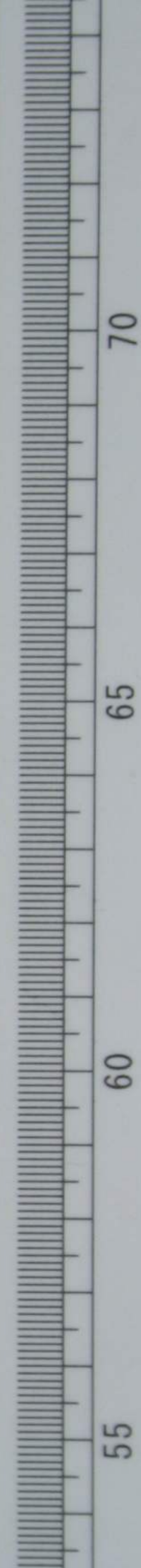


湖處子文集

本間文庫

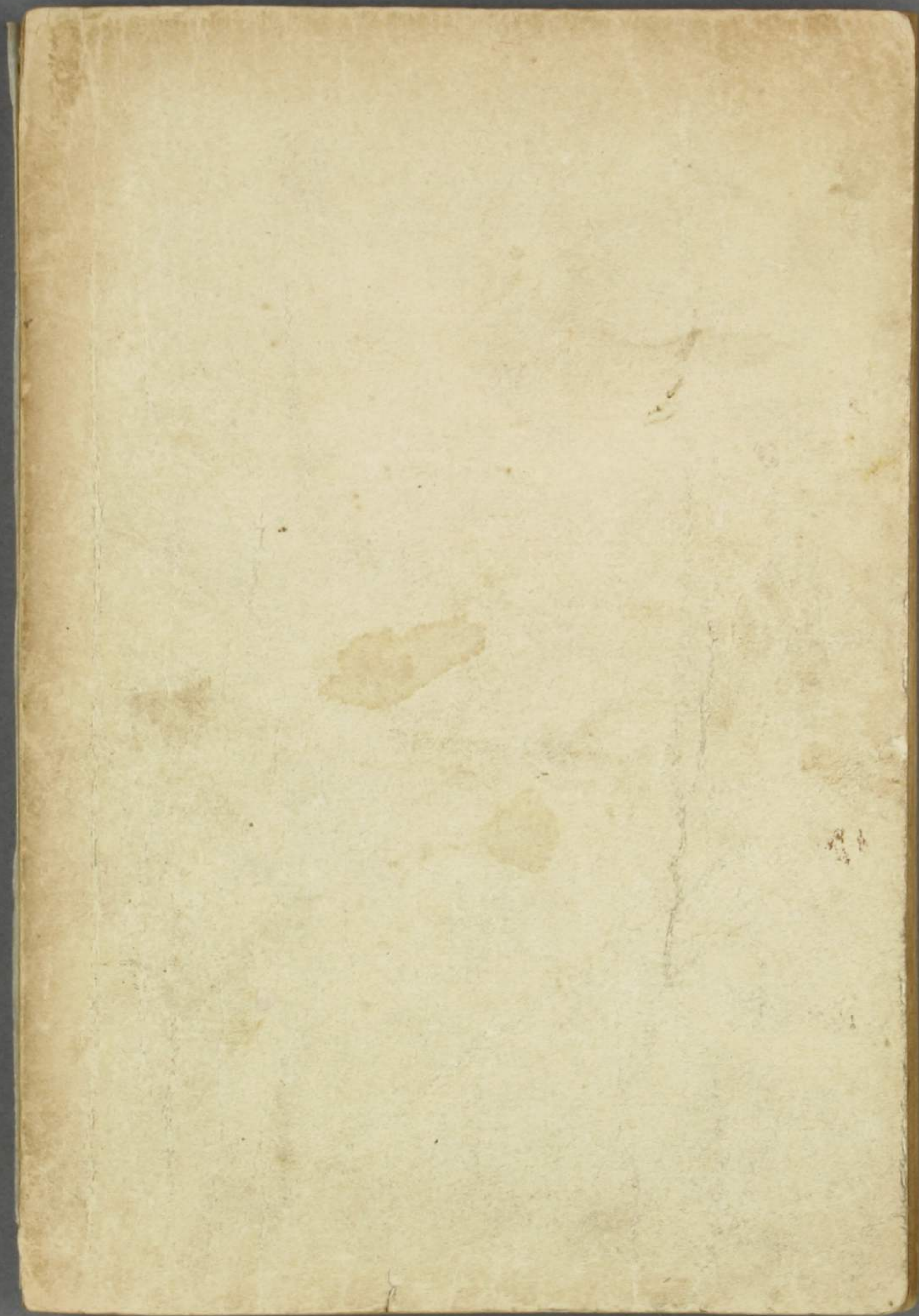
文庫 14

D 14



湖處子文集

東京 鹿鳴社發行



文庫14
D14



湖
處
子
文
集



全



4



湖處子文集

(一)

論 文

吾が本領	一
高明	二
巖村子の無神論	四
社會主義と吾が關係	八
トルストイ伯の非戰論の價值	一二
戰争問答	二〇
非教會の非、無教會の愚	二九
豫言中の日露兩國	三七
支那思想、桀紂主義	四八
宗教の批判	六〇

批 評

新曲かぐや姫	七五
--------	----

湖處子文集目次

(二)

隠れたる大作 八五
家庭小説二篇 九三

美文

古處山を懷ふ 一〇一
閨秀メリー、ラム 一〇四
女作家オーステン嬢 一一七
ヲルヅヲルスの詩神ドロテア嬢 一三三
奪はれたる青年 一四五
明 月 一七八
自然 兒 一九五

湖處子文集

宮崎湖處子著

論文

吾が本領 (電報新聞入社の際)

無邊先生は當世の師表なり。其の政治家たる天分に於ては、余は唯高山仰止するのみ。而も其の理學文章に於ては屢々參聞するを得たり。恒に退て嘆ずらく、十年讀書の功、終に先生一夕の笑話に如かずと。今や其の電報新聞更張の際に會し、先生余を喚び、委するに其文學欄を以てせらるゝに遭ふ、余安ぞ欣然起つて其命に應ぜざるを得んや。

十年以前、余は一たび筆を絶ち、専ら心を宗教に沈潜し、世と相遺るゝを期したりき。今此道に於て聊か自ら造詣する所あるを信じ、之を發表する所以を思ふや、復た又筆を藉るの已むを得ざるに遭へり、而して又同時に電報新聞の宏量なる、余が爲さんと欲する所を、或は間接に、或は直接に、余が肆に之を爲すを容るす余安ぞ喜んで起たざるを得んや。

昨喚ばれて麻溪の山莊を訪ふや、先生余の至るを見、破顔一笑して曰く、卿復た「歸省」を書く勇氣あるや、卿才ありといへども、惜むべし宗教に蝕せらるると、余答て曰く先生の言敢て當らず、不肖若し才あらば、天下を擧げて宗教に貢獻せんものをと先生大に笑ふ、其意余を遂に度すべからずと謂へる歟。余も亦大に笑ふて退く。之を記して以て入社の際となす。(明治三十八年十一月「電報新聞」)

高明

「高名」、是吾が嘗て富嶽の絶頂に立つた時、吾が腦中に飛びこんだ天來の觀念である。爾來此の觀念が吾が生涯の理想となつたのである。

高明は吾が理想である、吾は行儀の上には、自から其の蹉跎の多いのに哭しつゝあるのである。然し智識の上には、高明を渴望して已む能はざるものである。吾は人生人事の智識に於ては、實に空如たる者であるが、神の智識に於ては、高明を企望して已まざる者である。人の事には魔工が參つて居て、紛糾、錯雜、甚だ見解に苦むのであるが、神の事は比較的單純である。其の複雑は單純の組織なんで、之を原ば單純に反るのである。其の複雑は粲然として秩序ある處の複雑である。吾が簡素の性は彼に對ふに適せず是に向ふに適して居る。だから均しく神の事に於ても、彼の三にして一、一にして三といふが如き混沌たる學理は吾には解らん。反て神と稱せらるゝ者は三であつて、絶對者、天父たる者は唯一であるといふ、直截簡明な聖書の義解が吾には最も明か

に解る。

中庸の中に「高明者神憎之」と曰ふ語がある。是の神とは鬼神即ち魔を指すのだ。吾は此の魔に誘はれて、峻嶮なる天路を顛墜すること幾回か知れない。其でも吾は未だ嘗て吾が此の高明の理想を奪はれた事はない。高明なるかな、高明なるかな、是れ吾が生涯天路を攀るの望である。願くは取つて以て吾が名とせんかな。(明治三十八年十一月「電報新聞」)

蕨村氏の無神論

吾は有神論の信者である。吾は之を信じて疑はざるだけの内證を己に有つて居る。其結果として反て反對論に耳を傾くる、如何程の理由があるか其が知りたのである。今日までの聞見に據れば、清楚な、徹底した、痛快を感じるほどの無神論を聞くことが鮮いのを遺憾に感じて居る。概して言へば無神論は矛盾

論が多いのである。

頃者火鞭雜誌中、久津見蕨村氏の「ニイチエとシヨツペンハウエル」に於て同氏の無神論に接するを得た。蕨村氏は宗教と教育の衝突の古い時代から、吾が一日も尊敬を缺たことのない人である。數日前畏友山口孤劔君が五廬を訪ふて、吾が爲に蕨村氏の平生を告げてくれたので、始めて略々同氏の人と爲りを知るを得た。孤劔君の言に據ると蕨村氏は主義の人、而も熱熾なる主義の人である。又申蕨村氏は義俠家で、自分が非常な逆境に在りながら、一日も後進を社會に推舉することを忘れない人である。吾は思はず容を正して聞いた。恰も蕨村氏其人に接する様な心地がした。不幸にして吾が今此の尊敬する君子と、其の無神論に於て筆を交ふるに至つたのは、吾が心甚だ悲しむ所である。然し是れ各眞理の爲にするのである。蕨村氏請ふ之を恕したまへ。

蕨村氏は同論文中無神論の章に於て、神の存在を非除して斯様曰つて居る。

神とは唯人の想像のみ、觀念のみ、即ち神が人を造りたるにあらずして、人が神を造りたるなり。

同時に次章非無原因の中に、

如何なる想像も空像も、一たびは必ず感覺の門より入りたるものを材料とせざることなし、故に曾て全く吾人の見聞せざるが如き事物を想像し得たりと意識する場合と雖、皆是れ吾人が曾て見聞したる材料に因れるなり。全く其見聞を超越したる境涯は吾人の斷じて想像し得ざる所なり。

と斯様曰つて居る。だから此一節を以て前の無神論を顧ると、神に關する想像も、感覺の門より入つた材料に本きたるものと謂はねばならぬ即ち神が顯はれたといひ、神が語るといふ様な事も、其の形像、言語の耳目に來つた材料に據つて、古人が後世に言ひ傳へたものであるといふ事になるのだ。其結果蕨村氏は其の無神論に由つて有神論を證して居るといふ事になつて居る。又同じ非無原因の章に斯様言ふ語がある。

抑々宇宙萬有の存在する、必ずや其原因なかるべからず。然れども其原因は即ち神なりや、吾人の智

力は之を究むるに足る程に廣大なる力量あるものにあらず。

此の中に二個の矛盾點がある。第一は宇宙の原因は神なりや否と曰ふ言に於て、神ありといふ事を意識して居る事である。第二は有限なる智力を以て、神の有無を論じて居るといふ事である。又次に斯様曰つて居る。

宇宙は如何、宇宙よりも廣大なるものより見ば或は有限なるべきも、吾人より見れば誠に無限の存在なり。之に原因はあるべし、然れども亦是れ無限にあらずらんや。既に無限なり、有限の吾人は如何にして之を視ひ得るか、我は之を視ひ得べからずと斷ず、故に之を神と見る能はざるなり、隨て無原因論に非ず非無原因論なり。

謂はゆる宇宙より廣大なるものとは何か、神だらう。彼は茲にも有神を意識して居る。而して此一節の宇宙論は、頗ぶる明亮を缺いて居て、一見、矛盾を以て充されて居る様で、哲學家たる蕨村氏の爲に甚だ惜む所である。

之を總ぶるに蕨村氏の無神論は此の篇に於ては完全と謂ふ事が出來ない、蓋し不立文字と言ふこともある、眞理言ひ難しと謂ふのである。他日親しく相見ゆ

るを得ば、微笑の間に氷解することも有るであらう。暫く之を記して先容とするのである。(明治三十八年十一月「電報新聞」)

社 會 主 義 と 吾 が 關 係

僕は元民友社に在つて社會主義を唱へたもんだ。殊に極端な非家庭主義を唱道して民友社の二階で大に森田思軒氏と争論の火花を散した。すると傍から金子春夢君が宮崎君の共妻論といつて冷かした。其後プラトリーの議論の中に同じ意見を看出したので、再び大に二人と論じやうと思つたが、二人は其時既に共に地下の人となつて居たので、僕獨り空拳を握つた次第さ。其後僕は家庭制度につき、種々頭腦を役して見たが、聖書が教ふる一夫一婦制が男女の眞の關係だと思ふ。

僕は又當時救世軍の救濟事業に少なからず感動せられて、社會事業は天國の事

業、社會主義は天國主義だと喝破して、内村鑑三氏の識る所となつた。僕の社會主義は大體に於て基督教の上に立つて居た。僕は之に關する書籍を讀む暇がない所から僕は僕の頭腦を役して社會主義格言といふものを、二三十個條思ひついたまゝを書き附けて置いた。今其の書添を失つたが、其中で今も記憶して居る一個條は斯様曰うのであつた、社會時代は、道德上の黄金時代即ち博愛献身の時代である。もし此精神が充實せられんならば、社會時代は再び元の個人時代に返るのであると曰ふのであつた。

僕は又歴史上から社會主義を考察した。詳しく研究した譯ではないが何だか社會主義は屢々其形を以て歴史上に顯はれた氣がする。例せば(一)吾が國では神武天皇の國制は一般の職業は官業とせられたこと。(二)支那に於ては周公が井田法を以て土地を民口に割賦したこと。(三)羅馬に於てはシーザーの世に貧民黨が元老院を壓服してシーザーを擁立したこと。(四)又帝政時代には常備軍隊が

廢立の權を掌握したること。此の(三)と(四)とは實際に於ける普通選舉權の活動と謂ふを得べきである。近世史に於てはナポレオン三世が、普通選舉權を貧民に與へて佛蘭西の帝位を贏ち得た。社會主義は斯く屢々歴史上に顯はれた。而し永續しない。又其の顯れた形が悪くて、一度も美しき理想を發揮して居ない。是は主義の悪いのではない、主義を行ふ人間が悪いからであると斯様思つた。僕は又社會進化の上から考へて、社會主義は必ず社會の上に来ると斷じた。理由は政權は初世に於ては一人の手に在る。次世には數人に歸する。後世には多數に歸する。最後には大多數に歸する。是が社會時代である。前に引た羅馬と佛蘭西の例が其の例であるといふのであつた。

僕は茲に於て斯様考へたのだ。社會時代は必ず歴史上に来るが、人間から罪が取除かれぬ内に決して美しい理想、黄金時代、地上の天國は顯現しない。乃て人間から罪を除くことが肝要であると、斯様考へた。是が僕が社會論を中止して、

宗教界に投入した所以である。社會論者は動もすれば制度に重を置く。然し人間が其の制度を立てたのだから、人間が亦其制度を仆すのである。又社會主義が罪惡を滅除するの説がある。一應は道理だ然し人間は罪の發明者であるから、社會時代には社會主義を潜る罪や、之を顛覆する工夫を發明するのである。諸君は社會的制度を建てようとする、僕等は社會的の人民を造らうとする、若し社會的の人民を造らずに、社會制度のみ建て得たりとしようか、諸君が之を耻ぢて誼ひたくなるやうな醜惡な社會時代が來るに極つて居る。明治二十三年以前に於ては、代議制度一たび立んか、萬物一新するといふのが當時の民權論者の夢想であつた。代議制度の實行さるゝ今日、誰か此様な醜惡な代議制度の爲に哭かぬものがあるか。單に制度を恃むの非は、僕等は既に此一例に於て十二分に承知して居る。歴史は常に反覆するのだ。だから僕は本を務むる積であるのだ。僕をして諸君に對して望む所を曰はしめば、僕は諸君が其の皎潔な品性と、湧

立つ所の情熱を以て、博愛獻身の福音を傳へて戴きたいと思ふ。然るに靈の事は其の進歩が非常に遅緩である、遅緩であるから閑事業を爲て居る様に見ゆる所から、諸君の中往々其様な閑事業を止して、何故來つて我等と共に鋤に手を着けないかと言ふ様な傾があるが、其様言はるゝと甚だ憂いのである。寧ろ僕等の事業の難いのに同情を寄せて、慰藉と鼓吹とを豊かに與へて貰ひたのだ。(明治三十八年十一月「光」)

トルストイ伯の非戦論の價値

東京の諸新聞紙は、六月中の倫敦タイムズが、世界の巨人、非戦論の帝王と稱へられたる、トルストイ伯の日露戦争を難する一大論文を掲げたりと傳へたりき。今や八月七日の平民新聞が、之を譯載して我が讀書社界に紹介したるは、其勞甚だ多とすべきなり。全文は章を分つこと十二、言を屬ぬること四萬餘、

六號活字約六頁を填むる大文章にして、其大意、聖書の『殺す勿かれ』の金誠を楯として、人類間の戦闘を禁遏し、『己の欲する所之を人に施せ』の金言を以て萬國交際の原則とせんことを勸告するに在り。受膏者の語に取り題して『爾曹悔改めよ』と曰へり。

此論文に現はれたるトルストイ伯自身の、現代の人道の勇者なることは明かなり。又己を受膏教の信者とし、受膏者の教訓に本づきて戦争を非とするものなること、亦ただ明らかなり。人道の勇者としては、余は彼に多大の尊敬を拂ふべきものとす。然れども若し彼を受膏者の信者として、其の非戦論を受膏者の教訓より演繹したるものとしては、余も亦受膏者信者たり斷じて其無價値を宣言す。何を以ての故に、曰く、何ぞ伯の受膏教を觀ざる。伯の非戦論は其受膏教の産物なり。非戦論は末にして、受膏教は本なり。本を正だせば末自から判る。余先づ其本を正ださんとす。伯曰く、

試みに士官、將校に向つて何故に彼が戦争に赴むくやと問へば、彼は答へて曰はむ、我は軍人なり、而して軍隊は祖國防護の爲めに必要なりと。若し夫れ殺戮が基督教の法則の精神に違反すてふことに關しては、彼は甚だ介意する所なけむ。彼は此法則を信ぜず、若しくは之を信ずるも、开は法則其物を信ずるに非ずして、之に附隨せる解釋を信ずるものなればなり。(第四章)

彼の受膏者教の非解釋的なること、即ち舊式の聖書天啓説なること、之に由りて明らかなり。然も是れ唯其の半面に過ぎず。伯の受膏者教には猶ほ他の半面を有せり。看よ伯は猶ほ是く言へり。

我々が敵と呼べる彼の黄色人民を愛すとは、基督教の名の下に、人間の墮落、贖罪、復活など荒唐無稽の迷信を彼等に教ふるの意に非ず。(第十章)

是れ豈に近世の主我的批評の口吻にあらずや。夫れ舊式の非解釋に配するに、近世の主我的批評を以てす、是トルストイ伯の受膏者教の両面にして、語を換

へて之を言へば、紀元三世紀の迷信と、二十世紀の懷疑の結婚したるもの、是れトルストイ伯の完なき受膏者教にして、二千年來の受膏者教理史中、未だ嘗て出現したることなき妖怪的受膏者教なり。是れ即ちトルストイ伯の信ずる所の受膏者教なり。

然りといへども、此非戰論の根據を爲すものは、後者に非ず前者に在るを以て、余は猶ほ更に彼の非解釋的受膏者教に就て窮めんとす。

トルストイ伯曰く、受膏者は『爾殺す勿れ』と命ずるに、戦闘は殺す事を事とす。然して戦闘に従ふものは、此法則を信ぜずして、解釋其物を信ずと。然らば則ちトルストイ伯自身は、果して解釋を取らざるか。今夫れ『殺す勿れ』といへる受膏者は、又同時に『爾を求むるものは與へ、假らんとするものを卻くる勿れ』と曰へり。故に今茲に人あり、トルストイ伯に向ひ、請ふ爾の宅邸を我に與へよと曰はゞ如何、爾の世襲財産を我に與へよと曰はゞ如何、彼又更に、請

ふ我に爾の妻を假せと曰はゞ如何、爾の生命を我に假せと曰はゞ如何。トルストイ伯たるもの、如何か之を辭せんとするか。如何か之を辭したりしか。受膏者は又十字架以外に永生を求めんと欲する、恰かもトルストイ伯の如きものに答へて、『往て爾の所有を賣りて貧者に施し、然して後來りて我に従がへ』と曰べり。然らば則ちトルストイ伯は其の長き生涯の中、一たび貴族の世襲財産を賣り盡く之を貧しきものに施し、然して後往て受膏者の徒となりし事ありしか。余は又敢て問はん、トルストイ伯は他の受膏者、罪なきものなるか。伯もし然りと曰はゞ、余復た何をか言はん。獨り神の審判に委ねんのみ。もし然らずと曰はゞ、伯亦吾人と同じき罪人なり。吾人が此論文に加へられたる伯の肖像に於て見るが如く、兩眼明かに視つゝあるものは何ぞや。何となれば、受膏者は又曰はざりしか、『若し爾の手爾の足己を礙かさば斷りて之を棄てよ。兩手兩足ありて盡きざる火に投入られんよりは、跛または殘缺にて生に入るは善き

なり。若し爾の眼己を礙かさば抉出して之を棄てよ。兩眼ありて地獄の火に投入られんよりは一眼にて生に入るは善なり』と曰はざりしか。トルストイ伯、身流竄の厄に遇へりといへども、猶能く貴族として生き、自由を得て生き、完き身を以て生き、其の隻手能く非戰論を著して故國の帝王を罵倒するを得るもの、是豈に自から施せる解釋の賜にあらずして何ぞや。眼を轉じて論文に反へれば、茲に的然として其證據を發見す。看よ伯曰く、

『爾の敵を愛せよ、然らば爾は一人の敵も持たざるべし』とは、基督が十二使徒に教へたる言葉にあらずや。(第十章)

此の引用符を有する成文中、下文は即ち彼自身の造語、挿入、然して又解釋なり、本文にあらざるなり。且つ此解釋は、宜しく眞理なるべく見ゆるも、而も實は流俗の見に過ぎず。試みにトルストイ伯に問はん、受膏者は敵を愛せざりしか、何が故に十字架に掛けられしか。伯豈に受膏者の死を以て敵を愛せざ

りし報酬となすか。余は是に於てパウロの言の眞なるを信ず。曰く『余愈汝曹を愛すれば、愈汝曹に愛せられじ』と、是れ眞の愛に就て言へるなり。敵を愛すれば敵を有たずとは愛するに非ず、和するのみ。トルストイ伯の解釋は認められ。

然く謬まれりといふといへども、トルストイ伯の受膏者教の解釋的なること亦た之に由りて彰明ならずや。然く解釋的なる彼、俄かに此篇に於て非解釋を主張して、

彼は此法則を信ぜず。若しくは之を信ずるも、并は法則其物を信ずるに非ずして、之に附隨する解釋を信ずるものなればなり。

と曰ふ。是れトルストイ伯とトルストイ伯と同士撃を爲せるものに非ずや。トルストイ伯の非戦論は、トルストイ伯によりて解釋せらるべき規則の上に立てるものなり。聖書に謂はゆる砂上に建てたる家に類せるもの、是の如きは即ち

トルストイ伯の非戦論の價値なり。余故に曰く、余は其の無價値を宣告すと。夫れ聖書は終に解釋なき能はざるものなり。之を解釋するは其の正意を得んが爲めなり。之を實行せんが爲なり。乃はち『殺す勿れ』の法に至つても、如何んぞ解釋なきを得んや。曰く、如何んか之を解すべき。曰く何ぞ溯りて其本に反らざる。

夫れ此法たる、本と天の神エホバ、モーゼに由りてイスラエルに賜ひしものなり。同じ神は同じ人に由りて『殺す勿れ』と命じ、又同時に『殺せ』と命ぜり。『殺す勿れ』とは罪なきものに就て言ひ、『殺せ』とは罪あるものに就て言へり。曰く殺すもの、好るものは之を殺せと。然らば則はち神は獨り殺を憎むのみならず、又殺を好みするものなり。神は前の誠を以て、罪なきの血を流すこと即ちトルストイ伯の謂はふる殺戮の事を禁じ。後の誠を以て義罰を命ぜり。義罰の中にはトルストイ伯の憎みて已む能はざる所の戦闘を多く含むものな

り。イスラエルのカナンを征ち、バビロンのイスラエルを伐ち、ペルシヤのバビロンを討つ、皆神の義罰を行ふなりき。義罰を以て人を殺す、如何に多く殺すといへども、殺戮にあらずして義罰なり。トルストイ伯が殺を以て一概に殺戮となし、嘗て何等の識別を爲すこと能はず、唯其の形を見て其心を視ること能はざるは、實に理解なきの極となす。碩學の愚人とは其れトルストイ伯の謂ひか。(明治卅七年八月「聖書之道」)

戦争問答

問 今や日本と露西亞と將に戦を開かんとす、吾人基督の徒たるもの、戦を視ること如何なるべきか。

答 吾人基督の徒たるものは、一切の問題を聖書に決す。聖書に二あり、舊約、新約即ち是なり。大凡政治、法律、經濟、教育、國交等の國家問題、及

び個人間の權利問題は、舊約の識る所。新約は主として個人間の倫理的關係を垂示す。

問 舊約戦を視ること何如。

答 舊約に三種の戦あり、一は侵略的なるもの、二は自衛的なるもの、三は懲罰的なるもの、是なり。所謂侵略的なるものは、嘉南の五王の戦の如きもの是なり。所謂自衛的なるものは、アブラハムが五王を追ひ撃ちて、其の侵奪し去る所の兄弟ロトと、其の妻孥を克復したるが如き、ダビデがアマレク人を追ひ撃ちて、其の鹵掠し去る所のチグラクに遣し、婦女牛羊を克復したるが如きもの是なり。所謂懲罰的なるものは、神の聖なる律法を以て淨められたる猶太の聖民が、罪惡滔たる嘉南の七國を征討して、其の民人を殄滅したるが如きもの是なり。

問 舊約此の三種の戦を視ること何如。

答 侵略的なるものは神の憎む所なり。自衛的なるものは、神の許す所なり。膺懲的なるものは、神の命ずる所なり。

(創世紀第十四章一―二〇、撒母耳前書第三十章一―一九、出埃及記第十九章五―六参考)

問 然らば則ち新約戦を視ること何如。

答 新約は主として個人間の倫理的關係を垂示するものなること、前に之を言へるが如し、然れども心を潜めて細かに讀めば、猶ほ戦に關する聖旨を窺ふことを得ずんばあらず。

問 願くは之を聞くことを得ん。

答 世の終の豫言に於て、主の其時期を垂示する語に言へるあり、曰く、爾曹戦と戦の間を聞かむ、然れど慎みて怖るゝ勿れ、此等の事は皆有るべきなり。(原語 Doi は有らざるべからざるの意)然れども終は未だ至らず。民は

興りて民を攻め、國は起りて國を攻めん云云、是れ皆禍の初なりと。茲に二種の戦あり即ち所謂有るべきもの、(有らざるべからざるもの)及び有るべからざるもの、世の終を來すべきもの、即ち民興りて民を攻め國起りて國を攻むるもの是なり。有るべき戦之ある間は、世の終は未だ至らず、有るべからざる戦起りて此に世の終至ると謂へり。

問 所謂有るべき戦とは何如。

答 余謂へらく、是れ世の所謂義戦なり、舊約所謂自衛的なる戦なり。膺懲的なる戦なり。是侵略争奪續く間、必らず有らざるべからざるもの、而して之ある間は此世は未だ終らざるなり。何となれば義猶ほ此世に存すればなり。

問 所謂有るべからざる戦とは何如。

答 所謂侵略的なるもの是なり。看よ末の世に至れば、諸國諸民、生存競争の

爲めに相闘き相闘かひ、復た理義を問はざるなり。神天より瞰たまふに、復た一の義戦なきなり。昔は神ソドム、ゴモラを滅ぼさんとす、アブラハムに告げて曰く、若し彼處に義人十人あらしめば、我十人の爲めに其邑を滅ぼさじと、其れ唯十人の義人なし、ソドムとゴモラと是を以て滅ぼされたり。世の終も亦是の如し。諸民諸族争奪を是れ事とし、復た一の義戦無きに至らば、是れ義なきの世なり。義なきの世はソドムなり、ゴモラなり。神の審判の至らむ時、世界の滅ぼさるべき秋なり。今の世所謂帝國主義、諸民諸族を導きて、此時に到らずんば福なり。

問

新約の戦を視るもの、獨り此に止まるか。

答

猶ほ他に之あり、主の將に賣されんとするや其徒を警めて曰く、爾曹今財布あるものは之を握れ。行囊あるものも亦然かせよ。此等を有ぬものは衣を賣りて劍を買へと。其の正に縛に就くや、其徒の之を防ぐを視て、制し

て曰く、我今十二軍餘の天使を我父に請ひて、之を受くること能はずと爾曹思ふや。若し然せば此くあるべき事を録し、聖書に如何で應はむやと。此れ主は其徒に劍を買つて、自から衛るべきを命じ。己亦天軍を備へて自ら衛るの權あることを示せるなり。一人既に自ら衛るの權あり。一國も亦當に然るべきなり。

問

然らば則はち所謂劍を握るものは劍によりて亡ぶべしとは何の謂ぞや。

答

是れ事を好むものを戒むるなり。主の賣さるは豫め定まれる聖旨に出づ。其徒之を知りて之と戦ふ、之れ聖旨と戦ふなり。聖旨と戦ふは即はち神と戦ふなり。是れ主の此言ある所以なり。

問

然らば則はち律法に所謂殺す勿れとは何の謂ぞや。

答

是は世の所謂殺人犯の類を指す。戦の謂には非ず。戦は固より人を殺す。殺す無ければ戦なきなり。戦を以て人を殺す。必ずしも罪にあらず。若し

人を殺すを以て戰を罪せば、アブラハムは何如、ダビデは何如、イスラエルの聖民は何如、之を將ひて嘉南人と戰かひたるモーゼは何如、更にアブラハムよりも大なるものあり、ダビデよりも大なるものあり、モーゼよりも大なるものなり、神の子エスキリスト是れなり。若し殺すを以て戰を罪せば世の終、大なる神の審判の日に、義を以て審判と戰闘を爲し、其口より出る利劍を以て諸民諸族を殺すといはれし神の子を目して、罪の魁とせずんば止まじ。

(約翰默示錄第十九章一一以下參考)

問

然らば則ち所謂惡に抗する勿れとは、爾の敵を愛せよとは何の謂ぞ。又人汝の右の頬を批たば、亦他の頬を轉らして之に向けよとは何の謂ぞ。

答

是れ吾人の到達すべき至善の境を示せるなり。此理想の地に到達せんこと、是れ吾人の日夜に望む所。然れども今未だ俄かに此に到らざるが故に、

強ちに之を罪とすべきに非ず。主のピラトの法廷に於けるや、一屬吏の掌を以て己を打ちたる時、他の頬を轉らして之に向けず、反りて其の凶暴を詰りしは、罪を犯しゝに非ざるなり。パウロのルシヤスの陣營に於けるも亦然り。彼罪を定めずして己を打たんとする兵士に向ひ、其の羅馬人たる特權を主張して之を戒め、祭司の長に撃るゝに及んで、又憚らず之を誑へり。其のペストスの法廷に於けるも亦然り。ペストスの己を猶太人に與へて其喜を取らんとするの意あるを見るや、彼は即ち之を忌避してカイザルに上告したり。聖書は惡に抗する勿れと言へるに加へて、又爾曹求むる者には之を予へよと訓へたり。今や猶太人はパウロの生命を求めぬ。然も彼は之を與ふるを肯ぜず、反りて身を羅馬の權力に投ぜり。神又之がためにパウロを罪せず、反りて之を羅馬に送れり。之に由りて之を觀れば、彼の罪なきは明かならずや。一人既に自から衛るの權あり、然り一國亦當

に然るべきなり。

問 然らば則ち主の献身は徒死なるか。

答 悪是れ何の言ぞや。主もし死せずんば是れ贖なきなり。贖なくんば、是れ救なきなり。主もし死せずんば世界は罪に滅ぶべきなり。夫れ主の死は最上の義、天下何物か之に加へん。余が言ふところは是れなり、聖書は固より戦を認む。一國固より戦ひ得。一人も亦復た然り。最上は戦はざるに在りと。是故に一人若し身を傳道に献じて主の模範に殉ふ、義はより高きはなし。一國命を傳道に献じ、生命財産悉く之を敵國に與へ、國民舉りて一人の如く、甘じて主の模範に殉ふ、義はより高きはなし。一人固より戦ひ得、一國固より戦ひ得、最上は戦はざるに在り。是れ誠に信者の理想至善の境なり。往に劍を以て自から衛りし使徒たち、後皆各召さるゝ所に隨がひて、主の模範に殉じたり、主の謂はゆる爾今我に従ふ能はず、後我に従はんと云

ひしが如し。是に由つて之を觀れば、事を爲すに時あり、其境に達せずして其事を行なふ、偽善に非ずんば徒勞に屬せむ。献身の心無くも献身の事を行なふ、偽善に非ずんば徒死に屬せん。願ふ所は心よりする献身の美なり、徒死徒勞は余が取らざる所なり。(明治卅六年十一月「聖書之道」)

非教會の非、無教會の愚

往には或る人々が非教會の説を唱へて、其徒を其家に會するあり。今又或る人々等、自から無教會者と號し、遍く同人を青年會館に嘯聚して、二三人會と稱す、定時の祈禱會を設立するあり。教會を輕んずるの風漸く將に興らんとす、辯ぜずんばあるべからず。

嘗みに先づ問ふて曰はん、謂はゆる非教會とは何の謂か。謂はゆる無教會とは何の謂かと。彼等必らず答へて曰はん、非教會とは教會を非とするなり。無教會と

は教會を有せざるなりと。然らば更に進みて問はん、教會とは抑も何かと。教會とは元と希臘語 *Ekklesia* を譯したるなり。*Ekklesia* とは聚會を意味する語、殊に其國の立法議會を稱ふる語なり。其宗教に遷さるゝや、一に聖なる聚會を稱ふる律語となれり。然れば舊約の *Ekklesia* がエホバの聖會たるが如く、新約の *Ekklesia* は受膏者の教會なり。是故に教會は即ち聚會、聚會は即ち教會なり。大凡宗教上の衆會にして、教會ならざる衆會なきなり。主曰く『吾名のために二三人の聚まる所には吾も亦其中にあり』と、是れ即ち教會なり。二三の家族頭を駢べて拜を爲す、是れ即ち聖書の謂ふ所の『家の内なる教會』なり。(羅一六〇五、哥前四〇一五、門二) 既に二三人會あり、是れ既に教會あるなり。一の教會を離れて他の教會を作れるなり。己教會を作りて自から識らず、傲然無教會を以て世に高ぶる、識者誰か其の愚を笑はざらんや。既に家の内に信者を會す、是れ家の内なる教會を有するなり。既に自から教會を非として、而して家の内

なる教會を有す。是れ非教會者の心、吾が家の聚會は獨り是にして、吾が家ならざる教會は盡く皆非なりと謂ふなるべし、誰か其高言を許さんや。且つ夫れ非教會は果して神の聖意なるべきか。非らず、神は始より教會主義なり。創世の時、神は先づ人を造りて其園に實けり。既にして神曰く、人獨なるは善からず、吾之に適ふ助者を造りて之に與へんと。即ち更に其妻を造りて之に配し、祝して曰く、『生めよ、殖へよ、地に實てよ』と。是れ神は始より教會主義を執れるなり。神又其の齡既に邁みたるアブラハム夫妻を召して約して曰く、吾爾に子を與へん、爾の子孫の數正に天上の星の如く海濱の砂の如くなるべしと。神は其子イサクに二子を與へ、其孫ヤコブに十二子を與へたまへり。彼等よりしてイスラエルの十二族出てたり、神又ヤコブの一族を豊饒なるエジプトの地に遷し此地に於て大に彼等を殖したまへり。彼等は殖へて天上の星の如く、海濱の砂の如くなれり。神又其の僕モーセを起し、イスラエルの大衆を導きて

其父母の邦、約束の地に歸り、茲にエホバの聖會を興さしめたまへり。聖書に曰く、律法は來らんとする美物の影にして、眞の形は受膏者に屬けりと。神は其言に隨がひて、末の日に於て、アブラハムの裔に於て其子を降し、約束の地に於けるエホバの聖會が豫表したりし、受膏者の教會を全地の上に興こしたまへり。神の教會主義、赫として天日の中するが如し。目あるもの誰か之を看過すを得ん。神將に何を以て其教會主義を完うするか、曰く愛を以て之を完うす。神の始め男女を造くるや、之に賦するに愛を以てし、二者をして愛に於て一たらしめたり。愛は教會の源泉なり。愛ある所に教會あり。愛なき所に教會なし。愛を是とするものは教會を是とし、愛を非とするものは教會を非とす。佛者が教會を非とするは、彼先づ愛を非とすればなり。佛者曰はずや「辭親出家、識心達本、解無爲法、名曰沙門」と。又曰はずや「剃除鬚髮、而爲沙門、求道法者、去世資財、乞求取足、日中一食、樹下一宿、慎勿再矣。使人愚蔽

者愛與欲也」と。其の教會を斥くること是の如し。神曰く「人獨なるは善からず、吾之に適ふ助者を與へん」と。佛者曰く「人繫於妻子、甚于牢獄」と。神曰く「生めよ、殖へよ、地に實てよ」と。佛者曰く「使人愚蔽者愛與欲也」(以上四十二章經)と。佛者然く先づ愛を非とす、是れ其の教會を非とする所以なり。非教會者の教會を非とする、其れ愛なきが爲か。抑々其愛偏頗にして、獨り其の妻女、朋友弟子等にのみ傾けるか。主曰く「爾曹己を愛するものを愛するは何の能賞かあらん、税吏も然くせざらんや」と。余は疑がふ、非教會者の愛、税吏の愛に異なること幾何かと。

彼等をして答へて曰はしめよ、吾人の愛は大なりと。而も疑問は猶ほ殘これり。曰く何ぞ、曰く是れなり。彼等は既に教會を非とす。何ぞ其親愛する朋友弟子を其家に呼びて會をなすや。何ぞ其の哀矜するところの妻子と、頭を駢べて拜を爲すや。何が故に親を辭し妻子を棄て、出て去らざる。何爲れぞ其家を出て其

世を出て去り、日中一食、樹下一宿、慎んで再するなき、沙門頭陀の生を做さ
 ぐる。親は實に解すべからず、妻子は信に遺つべからず、朋友弟子、又亦絶つ
 べからずと曰はゞ、何ぞ自から身を謙して教會に出で、勉強して己を愛さるも
 のを愛することを學ばざる。何ぞ獨り高く思ひ高く擧がりて教會を非り、以て
 獨り自から特異ならんと欲するか。唯其れ特異ならんと欲する。是れ其の罪の
 由て來る所なり。

非教會者答へて曰はん、吾人が教會を非とする、豈に是の如くならんや。吾人
 の言ふところは單に現時の教會に止まると、而して其言ふ所を聞けば曰く、教
 會の目的は、單に救靈の一事あるのみ、没禮の儀式、交際慈善、振給等の事業、
 此等はすべて救靈の妨害たるもの。然して現時の教會は此の如き妨害物を以て
 實たざる。是れ吾人が之を憎む所以なりと。果して然らば是れ絶待に教會を非
 とするなり。何となれば則ち割禮なきエホバの聖會ありしことなく、没禮な

き受膏者の教會あることなければなり。彼等にして儀式を拒ばまば、是れ絶待
 に教會を非とするに非ずして何ぞや。彼等猶ほ能く其の贖罪を信じ、其の奇蹟
 を信ず。而して之を證するに聖書を用へり。嘗みに問ふ、彼等は同じ聖書に於
 て讀まざるか、没禮は救に關はる大禮なることを、又讀まざるか、主受膏者先
 づ躬を以て没禮を受けしことを。彼等は聖書よりも優りて能あるか。彼等は主
 受膏者よりも優りて大なるか。古の聖徒等は皆靈の救を得んがために、擧りて
 没禮を受けたるものなり。彼等は是等古の聖徒に勝さりて高きものなるか。彼
 等又教會の事業を限るに、傳道の一事を以てして、盡く慈善、振給、交際等の
 事物を排斥す。是れ余が怪訝に堪へざる所なり。彼等は同じ聖書に於て、受膏
 者の一行が、傳道の傍、常に振給を事とせしを讀まざるか。又かの使徒等が七
 人の執事を擧げて、専ら振給の事業に當らしめしを讀まざるか。又夫の異邦
 人の使徒パウロが、希臘の諸教會より一たび二たび寄附を徴して、以てエルサ

レムの貧しき聖徒に携へしを讀まざるか。將又エルサレムの教會が毎にパンを割きて交際を爲し、事實を讀まざるか。若し夫れ其の流弊は固より之あらん。其流弊の爰除こそ、適に彼等の任にあらずや。彼等の正に爲すべき事は、教會の破壊に非ずして、教會の掃淨にあらずや。教會の彼等を望む、大早の雲霓を望むが如し。彼等其聲を聞かず、反つて之を乾笑するは抑々何の心ぞや。且つ試みに之を思へ。慈善なく、振給なく、交際なき教會は果して如何なる教會なるかを。是れ愛なき教會ならずや。行なき教會ならずや。愛なき教會、行なき教會は果して如何なる教會なるか。約翰曰はずや『愛なきものは神を識らず、神は即ち愛なればなり』と。雅各曰はずや『身もし靈離るれば死する如く、信もし行離るれば死するなり』と。然らば則ち愛なき教會は神を識らざる教會にして、行なき教會は即ち死せる教會のみ彼等が愛するところの教會、彼等が家の内なる教會は正に是の如き神なき教會、死せる教會ならんのみ。恐る

べきかな非教會の傳道や、彼等は人を救ふと稱し、實は人を滅ぼさんと欲す。

(明治廿七年七月「聖書之道」)

豫言中の日露二國

今年夏六月余事を以て郷國筑前に歸り、箱崎に遊ぶ。十里松原の中、遙かに一物の空に聳ゆるを見る。是れ前に見ざりし所のものなり、其の下に近づきて觀れば、僧日蓮の銅像なり。何が故に茲に立てる、是れ元寇の豫言者にして、而して箱崎は元寇の折衝地なるが故なりと曰へり。余慨然として謂ふ、今や日本は元寇よりも大なる敵國と戦ふ、豈一人の豫言者なきか。

蓋し茲に一の大なる豫言書あり、之を繙けば今日の事、日露戦争の勝敗、歴々として之を掌に指すが如し。日本人にして之を讀まば、其の天命の在る所を識り、英氣今日に十倍せん、而して又畏るゝ所を知らん。然れども日本人は元來

不信の民なり、余今之を告ぐるとも必らず信ぜじ、反つて其の冷笑を買はん。然れども其の不信なるが故に之を告げざるは、其民に忠なるの道に非ず。故に余は甘じて其の冷笑を受くとも、敢て其の豫言を彼等に語らむとす。其言に曰く聲あり曰く彼の繋れて大河ユフラテの邊に在る四人の使を釋せ。乃ち四人の使釋されたり。年月日時に至りて人の三分一を殺さん爲に之を備へしものなり。騎兵の數に萬々あり。我其の數を聞けり。我異象に此馬と之に乗る者を見しが、其形狀斯くの如し。この禍にて殺されざる餘の人々は、尙其の手爲す所を悔改めず、惡鬼を拜し、見ることを聞くことを行ふことを得ざる金、銀、銅、石、木の偶像を拜し、又其の兇殺、魔術、姦淫、竊盜を悔改めず。

新約全書約翰默示錄

第六の使者其金椀を大河ユフラテに傾け、れば、其水涸盡たり、是れ東方の諸王の路を備ん爲なり。

全

是は天上の異象にして、同時に又豫言なり。其の録されたる時代は、紀元一世紀の後半、其位置は地中海中のバトモス島、にして其の記者は基督の使徒約翰なり。夫れ猶太人は其の東境を限るところのヨルタン河の彼岸の地を指して日の出る方と稱へり。大河ユフラテは更に杳かなる東方に當る。故に書中謂ふ所の大河ユフラテの邊とは、後章謂ふ所の『東方』にして、即ち現時の東方諸國、アラビヤ、ペルシヤ、印度、支那、蒙古、日本等の諸國を指せり。蓋、當時のユダヤ人は大河ユフラテ以東の諸國に就ては、何等の知る所なければなり。『四人の使者』とは、天命を承けたる四個の國民を謂ふ。然して此等の國民は、後世に至り、墮落したる基督教國——偶像崇拜國、殺人國、奸姪國、竊盜國を伐たしむる爲め、天が豫め備ふる所のものにして、此の墮落したる基督教國は、一方が東方なるに對して、西方歐羅巴なることを推して知るべし。之を統ぶるに

東方諸國は天に代りて歐羅巴諸國を伐つべき運命を有すること、是れ此の豫言の啓示なり。

而して之を歴史に徴すれば、此の如き基督教國なる偶像國、殺人國、奸淫國、竊盜國、果して之あるなり。一言に之を言へば、彼の舊教國是なり。別ちて之を言へば東羅馬、西羅馬、西班牙、露西亞の如き是なり。而して又之を歴史に徴すれば、此等の基督教國の襲撃したるもの、又果して之あり、第一にはサラセン人あり。彼等はアラビアの野より起り、傳道の劍を揮ひて歐羅巴に入り、東羅馬帝國を振動し、轉じて西班牙を襲ひ、其國民を斬屠し、其土地を占領し、之をサラセン帝國の版圖となせり。第二に土耳其人あり、彼等は裏海の邊より起り、洪水の如く西方に侵入し、サラセン人の擧ぐる能はざりし東羅馬帝國を擧げ、其首府コンスタンチノープルを奪ひて之に居り、更に進んで歐洲の中原を蹂躪し、奧太利の首都維納を威嚇したり。第三に蒙古人あり、其酋長成吉思

汗兵を用ふる神の如し、民人を屠り財貨を奪ふを事となす。彼大擧（騎兵七十萬と號す）して北部亞細亞に侵入し至る所斬殺を極め、遂に進んで露西亞を屠たり。其孫拔都五十萬の大軍を駟つて再び露西亞に侵入し、莫斯科府を陥れ、キエフ府を擧げ、更に進んで匈牙利に入り、シレシヤに入り、奧太利に入る。歐洲諸國震駭し、羅馬法王羽檄を飛ばして十字軍を興さんとしき。拔都去り、中原幸に慘禍を免かれたりといへども、露西亞は猶ほ蒙古人の主權の下に屈伏すること殆ど二百六十年なりき。今や蒙古人に次で起るものは誰なるか、支那人か、朝鮮人か、抑々又日本人か、四人の使者、其の三人は既に出でたり、殘る所の一人は誰ぞ、支那人か、朝鮮人か、抑々又日本人か、東方最近の史實を知る者、誰か之を日本人に非ずと謂はんや。

然り而して今日歐羅巴諸國の中、猶ほ討たるべく遣るところの基督教國は何れの國民ぞ、露西亞國民是れなり。彼が蒙古人の禍を蒙ること彼が如く、慘酷な

るも、彼は猶ほも改めざるなり。試みに其の北清事件に於ける殺戮強姦、劫掠を見よ。又キシチフに於ける猶太人の虐殺を見よ。嗚呼彼も亦一たびは西歐の文明を吸ひ、其の君主一たびは神聖同盟を組織し、世界の平和を保護したりき。今や悉く之を吐き出し、代ふるに其の露西亞主義を以てし、其のスラブ主義を以てせり。謂ふ所の露西亞主義とは何ぞや、謂ふ所のスラブ主義とは何ぞや。殺戮、奸姪、劫盜、侵略即ち是なり。彼は豫言の語の如く『其の兇殺、姦淫、竊盜を悔改ためざる』ものなり。今日日本が軍を興こして露西亞を伐つ、是れ此の天命に當れるなり。是故に海に於ては能く彼の太平洋艦隊に併せて波羅的艦隊を剿絶し、陸に於ては難攻不落の旅順を擧げ、滿洲全部を攻畧し、北は樺太を占領し、戦ふとして勝たざるなく、攻むるとして取らざるはなし。將士皆以て天祐となし、國民擧つて以て天祐となす。夫れ此の天祐あり、彼のシベリヤ鐵道を逆用して、直ちに其首府聖彼得堡を衝くとも又爲すべし、是れ豫言の

使命なればなり。

然りといへども翻つて之を思ふに、露西亞は世界の最大國、而して日本は世界の最小國なり。最小國を以て最大國を討つ、是れ豫言の使命といふといへども、如何にして其事を行ふか。我は既に彼の海軍の主力を全滅し、其陸軍の精英を鏖殺す、而も彼甚だ痛苦を感じざるなり。今や米國の仲裁に由りて、兩國の使臣米國に會して和を議すれども、而も彼強抗にして我に聽くこと遲きなり。彼は言はずや露西亞は未だ地を割き償金を納るゝほどに敗戦を感じずと。故に若し和議一たび破れば再び大に戦はざるべからず。夫れ小國大國と戦ふ、小國百戰百勝して亡び、大國百戰百敗して猶ほ能く存す、是れ數理の視易き所なり。日本人たるもの如何にして能く露西亞を膺懲するを得るや。

夫れ限あるものは人力なり。限なきものは天祐なり。日本人が恃んで以て露西亞を膺懲すべきものは惟天祐あるのみ。若し天祐を失はゞ其禍測るべからず、

日本人たるもの豈畏れて懼れざるべけんや。人或は曰ふ日本には天祐あり、是れ恐るべき國なりと。(太陽七月號大岡育造氏の『講和問題に就て』参照) 其意恰も天祐は日本の所有權に屬する者の如く思へり。是れ國民を誤る言なり。天祐豈に常あらんや。天に適ふものには天祐あり、天に適はざるものには天祐なし。今日日本が天祐を受くるは、幸に天に用ゐられたるが爲なり。一旦天に絶たるるあらば、豈天祐あらんや。日本人たるもの豈に畏れて懼れざるべけんや。且つ夫れ——天に代つて不義を討つもの、必ずしも永續せざるなり。看よ彼の勢に乗じて歐羅巴を席卷し。其の中原を蹂躪したりしサラセン人は今何處に在りや。土耳其人は今何處に在りや。彼の二百六十年間露西亞を占領したりし蒙古人は何處に在りや。彼は一朝捲き來る潮の如く、露西亞全部を掩ひしかも、一朝忽ち去つて往く所を知らざるなり。之に反して露西亞は一時潮に没了せられし陸地の、再び顯はれ來るが如く、反つて其頭角を顯はし來り、反つて近世の

最大強國となれり。然らば則ち天の蒙古を以て露西亞を伐ちしは、蒙古の爲なりしか、露西亞の爲なりしか。蒙古は一時大に興つて而して滅び、露西亞は一時滅に垂んとして又大に興る。然らば是れ蒙古の爲と謂ふべからず、露西亞の爲と謂ふべきのみ。蒙古たるもの勞せりといふべし。然らば則ち今日天又日本を以て露西亞を撃てども、是れ果して日本の爲なるか。將た、露西亞の爲なるか。若し日本の爲ならば、連戰連勝したる日本は是より大に興り、露西亞は是より大に衰へん。若し夫れ露西亞の爲ならば、日本は戰勝つて反つて衰へ、露西亞は戰敗れて反て又大に興らん。是に至つては日本は一の蒙古たるに過ぎず。日本人たるもの深く思はざるべからず。昔はユダヤ人罪を天に得たりしかば、アッシリヤ人來り伐ちて其民を其國に囚へ遷し、バビロン人來り伐ちて又其民を其國に囚へ遷しき。然も彼の偉大なりしアッシリヤ人、豪勢なりしバビロン人、皆既に太古史の上に久しく亡び、ユダヤ人獨り其の種族を保ち、其國性を維持

して今日に至れり。是れ果して何が故ぞ。日本人たるものは深く思はざるべからず。或は曰く日本の露西亞を討つ、是は正義を以て不義を正すなりと。然り蒙古人も亦正義と謂ふを得べし。彼のアッシリヤ人、バビロン人の如きも亦正義と謂ふを得べし。蓋し彼等暴は即ち暴なれども、彼等未だ天を識らず、猶ほ是れ小兒の如きものなり。故に其惡大なりといへども其罪は小なるなり。彼の露西亞人たるものユダヤ人たるものは、業已に天を識り、其旨を辨まへたり。是れ既に大人たり、大人にして罪を犯す、故に其惡小なりといへども其罪は大なるなり。是故に日本人が比較的露西亞人より正しき如く、蒙古人も比較的露西亞よりは正しきなり、バビロン人アッシリヤ人のユダヤ人に於ける亦又然り。之に由つて之を見れば、正義の族反つて亡び不義の族反て存せり。是れ豈に奇怪なる現象ならずや。夫れ蒙古、バビロン、アッシリヤ、其の國民天に用ゐられながら天に事へず謝せず天に徒だ獨り自から誇り自から高ぶる、是を

以て天に絶たれたるなり。彼等ユダヤ人、露西亞人たるもの、罪を天に得たりといへども、其心猶ほ天を離れず、其心猶ほ天に信賴す、故に天は之を答てども、唯其の改むるを期し、其の滅ぶるを好まざるなり。猶ほ親の其の子を答つが如し、是れ答を愛するが爲に非ず、其の子を愛するが爲なり。故に之を答つ間答を執れども、答ち了れば之を抛ちて復た顧みざるなり。然らば則ち天は不公平なるか、或ものをば初より之を顧み、或ものをば初より之を絶ちたるか。非らず天に事ふるものは天之を顧み、天に事へざるものは天一時之を用ふれども、天に事へざるが故に復た之を絶つのみ。天豈に不公平ならんや。是故に今日日本人が用ゐられて露西亞を伐つの使者たれども、勝に忤れて自から高ぶり、口に天祐を唱へながら、心に天祐を謝せずんば、是れ自ら天を絶つなり。天を絶てば天に絶たれ、天祐に離る。天祐に離れて世界の最大國と戦ふ、日本人たるもの畏れて懼れざるべけんや。(三十八年九月「太陽」)

支那思想桀紂主義

(一)

支那思想の特色は惟物的、本能的、意欲的、現世的、快樂的なるに在り。

支那史を讀む者は誰か桀紂の愚、其の淫虐を放にして身國併せ喪ひたるの愚を嗤はざる者あらんや。而も桀紂たるもの世々踵を接いで出て來るものは何ぞや。他なし桀紂も亦人なればなり。彼等が生涯盡さんと欲するところは意欲にして、意欲の方面より人を見れば人皆桀紂の心あればなり。彼等の吾人と異なる所は吾人は心に之を欲すれども之を其躬に敢てせず、之を其躬に能くせざるに、彼等は獨之を其躬に敢てし、之を其躬に能くしたるのみ。換言すれば彼等は唯吾人を代表して、吾人の意欲を窮盡せんと欲したるのみ。彼等の心蓋し謂へらく、吾既に生れて人類たり、又幸にして天子たり。若し天子たること唯黎民の爲に

思慮を盡し、法令を出すのみならば、天子は一の犠牲に過ぎず、是れ亦甚だ勞せざらんや。吾躬幸天子たり、富四海を有す、寧ろ如かんや。吾が欲する所を窮めて、以て天子たるの樂を取らんには、何となれば人生は須臾、神農虞夏、聖人の徒、亦皆同じく死したればなりと。彼等の心蓋し斯の如し、是を以て彼等各美姬を獲て伴侶となし、瓊宮を建て、瑤臺を起し、酒池糟堤を築きて以て長夜の飲を爲し、國人大に崩れたれども恤へず、國亡びて身之に隨ふも悔いざりしなり。其愚嗤ふべしといへども、其志亦悲しむべきなり。

後世の英主、秦の始皇、漢の武帝の如しといへども亦尤めて之に倣ふを免れず、隋の煬帝に至りては、歴史上の怪物を以て目せらる、然も實は是れ本能の化身たるに過ぎず、蓋し彼が爲せし所は吾人の爲さんと欲する所を爲し、爲す所を爲せしに過ぎず、吾人は唯少しく之を爲せるに、彼は大に之を爲し、吾人は各其一部分を爲せるに、彼は之を一身に聚めたるに過ぎず。史に稱す、彼位に即

て、首として洛陽の顯仁宮を營み、江嶺の奇材、異石を徴しき。又海内の嘉木、異草珍禽、奇獸を求めて苑圃に實て、又邦溝を開いて江に入れ、旁に御道を築き、樹るに柳を以てし、離宮を置くこと四十餘所、人を江南に遣はして、龍舟及び雜船數萬艘を造らせ、以て遊幸の用に供へたりき。西苑周二百里、其内海を爲る、周十餘里、蓬萊、方丈、瀛州諸山を爲くる、高さ百餘尺。臺觀宮殿山上に羅絡す。海の北に渠あり、縈紆して海に注ぐ、渠に緣りて十六院を作り、門皆渠に臨み、華麗を窮極す。宮樹凋落すれば、剪綵もて花葉を爲くりて之を綴り、沿内にも亦剪綵して荷菱菱莢を爲くり、色渝れば則ち新しき者に易へ、好みて月夜を以て、宮女數千騎を従がへて、西苑に遊び、清夜遊の曲を作りて馬上に之を奏すと。徒だ之を讀み去れば、非常法外なるが如しといへども、顧ひ來れば是れ亦吾人が狎を飼ひ、カナリヤを養ひ、花坪を設け、假山を築き、泉水を貯へ、亭廬を安き、良夜に妻女を呼びて月を賞するの大なるのみ。史に

又稱す、帝或は洛陽に如き、或は江都に如き、或は北に巡りて榆林金河に至り、或は五原に如き、長城を巡り、或は河右を巡り、巡遊に虚歳なしと。是亦吾人の旅行の大なるものにして、而も之よりも頻繁なるのみ。

唐起つて隋を滅ぼし、新に四海を統一す、其れ必ずや隋の末路に鑒みて、是れ日も足らざるべし。然も未だ幾もあらざるに、業既に玄宗の煬帝を學ぶあるなり。夫れ玄宗は英主なり、即位の始三代の治を思ひき、治績稍々擧がれば、意滿ち志弛み、楊貴妃の愛に溺れて、安祿山の反逆に敗るゝを免れず。後世須らく之を以て女禍の戒となすべし、然も詩人白樂天寧其事蹟を憐むて長恨歌を賦し、後世之を憐むものをして、永く絶ゆることなからしむ。以て人情の赴く所を知るべし。

(二)

夫の詩人は實に人情の赴く所を歌ふ者なり、天子は敢て之を爲せども自から言はず、代りて之を言ふものは詩人なり、人民は之を言はんと欲すれども敢て言

は、代りて之を言ふ者は詩人なり、詩人の聲は直に是れ人類の聲なり。支那詩人の聲は直ちに是れ本能自身の聲なり、支那詩人の聲は人生の短促を嘆し、萬事を放擲して歡娛を盡くすを勸むる聲なり。支那詩人中、其聲最も大にして其響最も豪なるは李白に如くなし、請ふ吾人をして彼に聽かしめよ。

彼其の『把酒問月』の中に歌ふて曰く、

今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人如流水、共看明月皆如此、惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏。

又其の『春日言志』に曰く、

處世若大夢、胡爲勞其生、所以終日醉、頽然臥前楹。

又其の『將進酒』に曰く、

君不見黃河之水天上來、奔流到海不復迴、復不見高堂明鏡悲白髮、朝如青絲暮如雪、人生得意須盡歡、莫使金樽空對月。

此亦等しく人生の老い易く、酒を飲みて歡を盡くすの勝れるに如かざるを歌へり。然も其の『江上吟』に於て此の感慨を極む。

木蘭之枻沙棠舟、玉簫金管坐兩頭、美酒樽中置千斛、載妓隨波任去留、仙人有待乘黃鶴、海客無心隨白鷗、屈平詞賦懸日月、楚王臺榭空山丘、興酣落筆搖五嶽、詩成笑傲凌滄州、功名富貴若長在、漢水亦應西北流。

彼其意謂へらく美酒を置き美人を伴ひ美船を泛べて美樂を弄す、躬匹夫に過ぎずといへども、猶ほ帝王の歡樂に當るに足る。況んや詩人去留の自由、仙人に超るものあるをや。昔楚の懷王、屈平の諫を容れず、富貴を極め、豪奢を盡せしが、倏忽にして國家を喪ぼし、歡樂を極めし擡榭は、徒だ山丘に歸り了れり。獨屈平は言用おられず、身を汨羅に沈めたりといへども、其遺し、詞藻は、日月の懸れる如く、赫々として千歲の下を照らせり。今我一方には帝王の歡樂を領し一方には筆を落し詩を賦して五嶽滄州を睥睨せば、楚王の富貴と屈平の功名と

一○身○に○併○せ○有○せ○り○と○謂○ふ○べ○し○。亦○快○な○ら○ず○と○せん○や○。然○れ○ど○も○悠○々○た○る○天○壤○、
功○名○富○貴○能○く○幾○時○か○存○す○る○も○の○ぞ○、功○名○富○貴○の○永○存○を○頼○む○、猶○ほ○漢○水○の○逆○流○を○
待○つ○が○如○し○、是○故○に○人○の○世○に○在○る○、寧○ろ○眼○前○の○興○會○を○追○ひ○、醉○生○夢○死○に○任○ず○る○
に○如○か○ず○と○、其○言○達○に○庶○幾○し○と○い○へ○ど○も○其○意○誠○に○悲○む○べ○き○な○り○。

(三)

且○彼○内○に○於○て○言○ふ○べ○か○ら○ざ○る○慨○嘆○を○懷○け○り○。何○ぞ○や○、永○生○の○飢○渴○是○な○り○。盖○、彼○
理○に○於○て○は○萬○、永○生○の○道○な○き○を○信○ず○と○い○へ○ど○も○、情○は○大○に○之○に○反○す○、情○、理○に○
反○き○、理○、情○と○闘○ふ○、煩○悶○起○ら○ざ○る○を○得○ざ○る○な○り○。彼○其○の○「白○髮○三○千○丈○、綠○髮○憂○
如○個○長○」と○謂○ふ○所○の○「憂○」と○は○、豈○に○此○の○煩○悶○な○る○無○き○を○得○ん○や○。彼○其○の○永○生○の○
渴○望○、内○に○般○に○し○て○已○む○こ○と○能○は○ず○。乃○ち○一○た○び○往○て○仙○術○を○學○ぶ○、大○凡○方○外○異○
人○の○圖○錄○、丹○訣○參○り○授○か○ら○ず○と○い○ふ○こ○と○な○し○。然○も○彼○自○ら○嘗○み○て○其○の○爲○す○な○き○
を○看○破○す○る○や○、極○め○て○仙○の○妄○を○嗤○ふ○。然○し○て○而○か○も○彼○が○永○生○の○望○、是○に○於○て○得○

る○所○な○き○な○り○、彼○默○し○て○已○む○べ○き○か○、魏○晋○以○來○詩○人○皆○な○能○く○理○を○以○て○自○か○ら○勝○
ち○、能○く○自○然○に○任○し○天○命○に○安○ん○じ○て○生○死○す○、李○白○に○至○つ○て○は○即○ち○然○ら○ず○、彼○や○
一○道○の○理○性○、白○虹○日○を○貫○く○が○如○き○あ○り○と○い○へ○ど○も○、更○に○洶○涌○澎○湃○、天○を○擊○ち○地○
を○捲○く○と○こ○ろ○の○情○潮○の○狂○瀾○怒○濤○の○翻○へ○る○あ○り○、理○性○の○一○喝○時○に○其○の○盪○搖○を○靖○め○、
之○を○し○て○一○碧○萬○頃○の○平○波○に○返○ら○し○め○て○餘○あ○り○と○い○へ○ど○も○、忽○ち○又○風○興○り○海○翻○り○、
狂○瀾○怒○濤○、洶○涌○澎○湃○天○を○擊○ち○地○を○捲○き○來○る○に○遭○ふ○や○憫○む○べ○き○理○性○頓○に○其○の○呑○む○
所○と○な○る○。彼○已○む○を○得○ざ○る○な○り○、乃○ち○酒○を○蒙○り○醉○を○取○り○、大○言○壯○語○し○て○以○て○妄○情○
を○呵○し○煩○悶○を○驅○る○、是○れ○其○聲○の○豪○に○し○て○、其○響○の○大○な○る○所○以○か○。今○其○言○に○曰○く○、
天○若○不○愛○酒○。酒○星○不○在○天○。地○若○不○愛○酒○。地○應○無○酒○泉○。天○地○既○愛○酒○、
愛○酒○不○愧○天○。已○聞○清○酒○比○聖○。復○道○濁○酒○如○賢○。賢○聖○既○已○飲○、何○必○求○神○
仙○。三○盃○通○大○道○。一○斗○合○自○然○。但○得○醉○中○趣○、勿○爲○醒○者○傳○。

又曰く、

鍾鼎玉帛不_レ足_レ貴、但願_二長醉_一不_レ願_二醒_一、古來賢達皆寂寞、惟有_二飲者留_一其
 名_二五花馬、千金裘、呼_レ兒將出換_二美酒_一、與_レ爾同銷_二萬古愁_一。
 然らば則ち其の酒を飲む、徒に其味を旨として然るに非ず、又酔を取らんが爲
 なり、其の酔を取るは、徒に其の興を愛して然るに非ず、萬已むを得ざるに出
 づ、即ち之に藉つて意識を没し、渾沌に返り、大道に達し、自然に合ひ、彼の
 千秋萬古の憂愁を銷すを得んが爲なり、彼其の豪語は此の苦心酸慙の餘に成る
 宜なる哉其の沈痛惻怛、聞く者をして哭かしむるや、安ぞ知らん反つて是れ肉
 なる吾人の聲なるを、反つて是れ現世主義の絶望の聲なるを。

(四)

白樂天は李白以外に於て、人情を曲盡する所の詩人なり。彼の長所は盡く其の
 長恨歌の一篇に顯はる。是は支那詩中、人情が長恨歌なるか、長恨歌が人情な
 るかと謂はるゝ者なり。貴妃玄宗は假托物のみ、彼實は之に於て人間の愛情を

歌へるなり。舊論之を以て垂誠の詩となす者は誤れり。蓋彼は別に新樂府と稱
 する垂誠の詩體を有すればなり。例せば其「海漫々」の下に「戒_レ求_レ仙也」の主
 意を記し、「新豐折臂翁」の下に「戒_二邊功_一也」の主意を記して、而して其率章必
 ず其志を顯言するが如し。彼の長恨歌の如き、琵琶行の如きは、同じく是れ純
 然たる抒情詩なり。彼此篇に於て先づ首に盛に楊貴妃の美を道へり。曰く、

回_レ頭_一笑_二百媚生_一、六宮粉黛無_二顔色_一。

彼猶之に添へて華清の池に沐浴する裸躰美人を想像し、明鏡の裏に現はらゝ雲
 鬢花顔を描寫し、歩々蓮華の搖さ來る様を叙べ、夜々芙蓉張に於てする合歡の
 甘美を語り、吾人讀者をして恍惚として天子たるの美福に心醉せしむ。彼は次
 て歡樂の美を歌ふ。曰く、

驪宮高處入_二青雲_一、仙樂風飄處々聞。

此の中に緩歌慢舞あり、此中に霓裳羽衣の曲あり、天子たるものは天人たり、

天子たるものは仙人たることを想望せしむ。

彼其次に安祿山の反逆を叙し、鞞鼓漁陽より地を動かし來つて、天上の羽衣の曲を驚かし破るに遭ひ、玄宗貴妃と塵を蒙りて城闕を遁れ、翠華搖々として行き復た止まり、途にして無情の軍隊に逼られ、終に貴妃を出して謝せざるを得ざるに到れるを叙し、悲慘なる美人の最後を書き、吾人をして萬斛の同情を玄宗の上に寄せしむ。曰く、

六軍不發無如何、宛轉娥媚馬前死、花鈿委地無人收、翠翹金雀玉搔頭、君王掩面救不得、回頭血淚相和流。

彼其次に雲棧縈紆たる山路を越え、風物蕭索たる邊地に落ち來り、懷土望郷の念、愛別離苦の涙一時に湧き來る天子の心情を歌ふ。曰く、

易江水碧蜀山青、聖主朝朝暮暮情、行宮見月傷心色、夜雨聞鈴腸斷聲。

彼其次に亂平ぎて玄宗復び長安に還り庭園に對し、見ゆれど在らざる貴妃の形

影を懷びつゝ、今昔の感に勝へざる情思を抒ぶ。曰く、

歸來池園皆依舊、太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳如眉、對此如何不淚垂、春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時。

詩人は是に到つて、貴妃なくして廣宮に居り、孤獨寂寞、日月の遷り難く風物の轉り難く、往者の忘れ難く、悲哀の過ぎ難く、眠覺め易く、夢結び難く、耿耿として半身を追ひ求むる其の半身の憧憬を寫す。曰く、

夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠、遲遲鐘鼓始長夜、耿耿星河欲曙天、鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰與共、悠悠生死別經年、魂魄不曾來入夢。

詩人の想像は遂に天子をして寂寞無聊の極遂に道士を求めて海上に遣り、仙島に入て貴妃の靈身を尋ね之に哀慕の詞を傳へしむ。而して彼は貴妃の美を稱する他の機會を捉へて逸せず、最も美なる語を以て之を道へり。曰く、

雲鬢半偏新睡覺、花冠不整下堂來、風吹仙袂飄飄舉、猶似霓裳羽衣舞、玉

容寂寞淚欄干、梨花一枝春帶雨。

然り而して天上と人間と世界を異にすといへども、彼は猶ほ詞を通じて舊約を尋ぐを得せしめ、髣髴として愛情に由りて永世を憧憬せしむ。

臨別慇懃重寄詞、詞中有誓兩心知、七月七日長生殿、夜半無人私語時。

在天願作比翼鳥、在地願為連理枝、天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期、長恨歌が吾人を満足せしむるは其の末章に在り、戀愛に後身あり戀愛に死なきを歌ふ所に在り、是れ人情の極致にして又其の渴望なり、支那思想の現實主義、白樂天に由り一轉して理想界に向へり。嗚呼是れ已を得ざるなり。誠に已むを得ざるなり。(三十八年十一月、二月「電報新聞」)

宗教の批判

(一)

宗教の對象は、天使にもあらず、禽獸にも非ず、人類是なり。宗教の對象は人類にして、人性の反照即是れ宗教なり、其の人性の反照なるが故に、人類は又宗教の裁判官なり。宗教にして若し人性を反照せざるか。人類は之を替て、省みず。故如何となれば、此の如きものは或は天使の宗教たらむ、或は禽獸の宗教たらむ、而も人類の宗教に非ず、人類に取りては一の空談に過ぎざる故なり。惟人性を反照する所の宗教、人類は之に聽き之に隨ひ、之と始終せんと欲す。是に於て是の疑問興る、曰く「人類とは何ぞや」。常識之に答へて曰く、人類とは全き靈なる天使にもあらず、全き肉なる禽獸にもあらず、靈と肉と併せ有して、天使と禽獸の中間に居るものなりと。科學は之に答へて曰く、人類は全く肉なる者なり、進化したる禽獸に過ぎざるものなりと。常識の見と科學の斷とは、若く根底より差へりといへども、有史以來、人類の生活の肉なることは明亮なる事實にして、宗教其物の現在の如き、亦實に之が證左なりとなす。

謂ふ所の肉的是什么ぞや、本能的なることはなり。吾に本能の機官あり、即ち見るべき目、聴くべき耳、嗅くべき鼻、食ふべき口、觸るべき膚あり。既に見るべき目あれば、吾は之に由りて美色を見るを得んと欲す。既に聴くべき耳あれば、吾は之に由りて美聲を聴くを得んと欲す。既に嗅ぐべき鼻あれば、吾は之に由りて美香を嗅ぐを得んと欲す。既に食ふべき口あれば、吾は之に由りて必ず美食を食はんと欲す、既に觸るべき膚あれば、吾は之に由りて必ず美感を感ぜんと欲す。之を欲して得ることなければ即ち濫る、若し人を圯らずんば反つて己を圯る。是れ甚だ厄介なる動物なり、又甚だ憫むべき動物なり、吾人常に慨嘆す、斯の如き動物如何にして天地の間に出て來りしやと。而も是れ吾人なり。是れ人類なり。是を離れて吾人なく。是を離れて人類なきなり。宗教の對象たるもの斯の如き人類なりとせば、人類の宗教たるものは必ず斯の如き人性を反照せざるべからず。然らざれば即ち替てらる。

然れども人類には猶ほ内なる半面、吾が肉慾の奴たるを肯せず、之を罪し之と争ひ、吾が之を肆にしたるとき、痛く吾を咎むるものあり。靈性はなり。吾は肉慾の繫縛を感ずるごとに、饑え渴く如く靈性の自由を慕ふ。宛も飛鳥の翼を張りて天空に翱翔し、高下進退意の如くならざるなきが如きを切に望む。人性の裏、實に此の如きものあり。人類の宗教にして此の靈性を反照せざるものは、是れ禽獸の教にして、人類の教に非ざるなり。

(二)

原始佛教は人獸を見て單に肉なりとなすなり。正に今の科學の見と等し。其言に曰く、

當レ念身中四大、各自有レ名、都無レ我者、我既都無、其如レ幻耳。四十二章經
我なければ靈なし、靈なければ人は唯肉なるのみ。人性は唯本能なるのみ。佛
既に人性を認めて本能となし、而して其の本能を剋伐するを以て教となす、知

○ら○ず○本○能○を○剋○伐○す○る○は○何○物○ぞ、○是○れ○必○ず○や○本○能○以○外○の○或○者○な○ら○ざ○る○べ○か○ら○ず。○
○若○し○是○の○如○き○本○能○以○外○の○或○者、○果○し○て○人○性○の○内○に○あ○ら○ば○人○は○決○し○て○肉○其○物○の○み○
○に○あ○ら○ず、○人○性○は○決○し○て○本○能○其○物○の○み○に○非○ず○と○謂○ふ○べ○し。○是○れ○後○世○此○の○小○乘○佛○
○教○を○打○破○す○る○所○の○大○乘○佛○教○を○誘○き○起○し○た○る○所○以○な○り。

○佛○既○に○本○能○を○以○て○人○性○と○な○す○と○き○は、○佛○の○教、○必○ず○當○に○其○の○本○能○を○許○容○し○て○近○
○世○哲○學○史○に○於○け○る○佛○國○流○の○唯○物○主○義○な○ら○ざ○る○べ○か○ら○ず。○若○し○本○能○の○剋○伐○を○教○へ○
○ば○是○れ○即○ち○人○類○に○教○ふ○る○に○自○殺○を○以○て○す○る○な○り。○人○類○の○宗○教○と○し○て○人○類○に○自○殺○
○を○強○ゆ、○是○れ○人○類○の○宗○教○と○謂○ふ○べ○き○か、○佛○の○言○に○曰○く、

出家沙門斷欲去愛識自心源云々。

同 經

又曰く

○愛○欲○莫○甚○於○色、○色○之○爲○欲、○其○大○無○外、○賴○有○一○矣、○若○使○二○同、○普○天○之○人、○
○無○能○爲○道○者○一○矣。

同 經

又曰く

○人○繫○於○妻○子○舍○宅、○甚○於○牢○獄、○牢○獄○有○散○釋○之○期、○妻○子○無○遠○離○之○念、○情○愛○於○色○
○豈○憚○驅○馳。○雖○有○虎○口○之○患、○心○存○甘○伏、○投○泥○自○溺、○故○曰○凡○夫、○透○得○此○門、○出○
○塵○羅○漢。

○其○の○意○欲○を○攻○撃○す○る○こゝと○切○痛○を○極○め、○必○ら○ず○之○を○剿○絶○せんと○欲○す。○是○れ○人○類○の○
○友○た○らんと○欲○し○て○誤○て○人○類○の○敵○と○な○り○た○る○もの○な○り、○人○類○を○濟○んと○欲○し○て○反○つ○
○て○人○類○を○滅○す○もの○な○り、○此○の○如○き○宗○教、○是○れ○果○し○て○人○類○の○任○ふ○る○所○な○る○か、○請○
○ふ○吾○人○を○し○て○原○始○佛○教○の○事○實○を○見○せしめよ。

○吾○之○を○聞○く、○佛○の○弟○子○に○加○留○多○夷○比○丘○と○曰○ふ○者○あ○り、○其○人○は○意○欲○の○人○な○り。○佛○
○の○遙○戒○を○立○て○た○る○を○見○て、○婦○女○子○を○し○て○己○の○手○足○を○捫○摩○せしめ○て○慰○む。○他○の○弟○
○子○之○を○以○て○佛○に○告○ぐ、○佛○爲○に○摩○觸○戒○を○作○る。○加○留○多○夷○乃○ち○又○自○己○の○美○德○を○説○き、○
○婦○女○子○を○し○て○自○己○を○渴○仰○讚○歎○せしむ。○佛○亦○爲○に○歎○身○戒○を○作○ると。○律○を○以○て○意○欲

を律す、伐らずんば已むべからず。吾又聞く、佛は元來女子を度して僧と爲すの意なし、之を爲すは阿難陀佛を勸めたるに出づると。阿難陀は佛の愛する所、其の高足弟子の一なり。是に由つて之を觀れば、佛の始めて意欲を攻むるや、意欲も亦初めより之に向ひて戰ひたるなり。嗚呼是れ即ち人類を以て宗教と戰ふなり。人類を以て宗教と戰ふ、其勢兩立せず宗教人類を滅さすんば人類反つて宗教を滅さん。宜なるかな佛陀の教秋蟬の如く一時に喧傳せられて已みぬることや。吾故に曰く宗教若し人性を反照せざれば替てらると。

(三)

大乘佛教は原始佛教の虛無主義より一轉して、實在論に返り來れるものなり。今日概して佛教と稱する者は、皆是の大乘佛教の化身なりとす。其の説く所は一元論なり、其の一元を眞如と名く。起信論謂ふ所の「一切諸法、唯依妄念而有(此)差別。若離心念、則無一切境界之相。是故一切法、從本已來、離言

說相、離名字相、離心緣相、畢竟平等、無有變異、不可破壞。唯是一心、故名眞如。」と曰ふものなり。一切の差別を去り、一切の認識を没し、惟一眞如に還元するの說なり。之を以て宇宙を見れば、天地、人物、靈肉、男女の差別あることなし、悉皆眞如の相貌なり、之を以て歴史を見れば、原因、結果、前業、後報の別あることなし、悉皆一心の流行なり。之を以て人性を見れば、善惡、正邪、美醜、妍媸の別あるなし、悉皆一心の發作なり。謂はゆる「善惡不二、順逆一途、煩惱即菩提」なるものなり、其の論理の圓妙なる其結論の甘美なる佛者之を醍醐に比す、正しく原始佛教の反動なり。

夫れ理性のみを以て宇宙を觀る、一元に歸趣せざれば已まざるなり、理性のみを以て人性を見る、一元に到着せざれば已まざるなり。宇宙萬象萬化すといへども、萬象萬化あるに非ず、宇宙唯一實在あるのみ。實在ありといへども、定義なし(空)、是れ其の萬象に現じ萬化に流る、所以なり。人性萬象萬殊すとい

へども。萬象萬殊あるに非ず、實に惟一心あるのみ。一心あれども主義あるなし、是れ其の萬象を成し、萬殊に動く所以なり。凡夫は唯其の現象を見て、一心を認めず、是れ其の善惡邪正を差別する所以なり。聖人は現象を通して一心を見る、是れ其の善惡邪正を別たざる所以なり。善なく、惡なく、正なく、邪なし、一心の動く所、悉く是ならざるなし。意欲、煩惱、一の不可あることなし。故如何となれば、是れ意欲、意欲ならず、煩惱、煩惱ならず、即ち是れ靈火靈能たればなり。正しく是れ榮紂の聖書、肉欲の福音なるかな。大乘佛教が大に人類に歡迎せられて、今日之を信する者、諸宗教中最大多數を占むと稱道する所以のものは、此の本能の福音あるに依る。

(四)

彼の耶蘇教は何物ぞ。吾は其の耶蘇の徒なり。吾何が故に耶蘇の徒なるや。吾は常識の人にして、耶蘇の教は其の常識の教なればなり。吾は謂く、人豈單に

肉のみならんや、亦必ず靈ありと。聖書は曰く、神士の塵を以て人を造り、之に生氣を嘘入れたまへり、人乃ち生ける靈となりぬと。吾謂く肉なる人には肉の飢渴あり、之を飽かせずんば能はずと。聖書は曰く、神始人を神の園に造り、觀るに麗く、食ふに善き樹を生ぜしめて、之を彼に與へたりと。又曰く、神曰く人獨居るは善からずとて、之に適ふ婦を造りて彼に偶はしめ、祝して曰く、生めよ蕃へよ地に盈よと。吾是に於て飲食男女の道、神より出たるを知り、安然として人間の生活を享くるを得。吾又謂く、既に肉の飢渴を充せる吾は、更に靈の飢渴を覺え來る。之を覺ゆれば之を充さずんば已む能はずと。耶蘇曰く、吾が與ふる水を飲む者は限なく渴くことなし、吾が與ふる水は自ら其中に湧きて永生に至ると。此の水は神の靈を謂ふなり。是故に耶蘇の教は靈の教、即ち、肉に始まつて靈に終るの教。肉に由つて靈に達るの教、肉を潔めて靈に合はしむるの教、肉を脱ぎて靈に化せしむる教なり。其の教は能く肉の飢渴を飽かし

め、無限に靈の欲求に答ふる所の教なり。是れ吾人の瑞喜し渴仰し歸依し甘服する所以なり。彼既に肉の欲求を容れ、而して靈の欲求を鼓吹す。然も肉の欲求は靈の欲求に反き、靈の欲求は肉の欲求に反く。肉の欲求は物質を取ること多からんことを欲し、靈の欲求は物質を去るとの多からんことを欲す。物質を取ること愈々多くして、肉の繫縛を感ずること愈々多く、物質を去ること愈々多くして靈の自由を得ること愈々豊なり。是を以て耶蘇は必ずしも酒を禁ぜず、反つて飲者てふ譏を得たれど、後の信者自ら之を禁じて飲まず。耶蘇は肉を戒めざれども、後の信者或は自ら慎みて之を食はず。弟子の首なりしシモンペテロは、妻を携へて傳道せしかど、羅馬教會は自から天國の爲に寺人となれり。初代教會は必ずしも一夫一婦制を創めざりき、學者曰く、聖書に長老、執事たる者は、一人の婦の夫たるべしと言へるは、當時の信者の數婦を有しし證なりと)而も後世獨自ら此の善制を起しき。肉の繫縛を脱ぐこと愈々多くして

靈の自由を得ること愈々豊なればなり。

耶蘇曰く、「彼の世に入り、復活に足る者は娶嫁ことなし、是れ復た死ること能はざるが故なり。蓋し天の使と等しく、神の子どもとなるが故なり」と。彼の耶蘇の徒は此の靈なる世界を望み、日日其肉の人を脱ぎて日日靈の人に化せんと務むものはなり。

(五)

佛教(大乘)と耶蘇教と兩者原より兩立すべからず、而も兩者世界を雙分して各其の一を有つ。耶蘇教は吾は地球上最も多く信者を有すと稱し、佛教は吾は地球上最も多く信者を有すと誇る。果して然らば佛教と耶蘇教と、孰が眞にして孰が偽なるや。眞理は果して信者の數量に由て決すべき者なるか。信者の數量に由て眞理を議決すべきときは、佛教は眞にして耶蘇教は偽なりと謂はざるを得ず。蓋は耶蘇教は靈の事を教へ、佛教は肉の事を教へ、而して靈の事を慮る

ものは肉の事を慮るものゝ多きに如かざればなり。小き群よ懼るゝ勿れ、我國を汝等に付さん」と言へる耶蘇は、眞理は決して多數の信じ得るものに非ざるを看破したればなり。數量既に宗教の眞偽を定むるに足らざるば之を定むるものは果して何か。

佛教と耶蘇教と其の相容れざる點を擧ぐれば、耶蘇教は神を之ありと曰ひ、佛教は神を之なしと曰ふ。前者は人を肉と靈となりと曰ひ後者は人を靈なる同時に肉なりと曰ふ。彼は主として常識即ち智情意三能の總合識の判断に山り、此は偏に理性の推論に循ふ。一は良心を推尊して一に其聲に聽從し他は良心を擯斥して妄念となし、斷然として其の認識を拒非し、其の敢て然る能はざるものを貶して權教となす。權教とは猶ほ善を惡より別ち、善を眞如の實性となし、惡を之が假性となし善を立てゝ惡を斷ずべしとなすもの、佛教中に在つて耶蘇教に廻向する者、猶ほ良心を回顧せざる能はざるものなり。然れども既に已に

善を立つれば又た同時に惡を立つるを許さざるべからず、是故に善をも立てず、惡をも立てず、善斷つべからず、惡亦斷つべからず、本より之を斷つを要せず、善と惡と自性別あること無ければなりと。斯の如く教ふる者は是を名けて實教となす。

是に於て重ねて問ふ、佛教と耶蘇教と孰が眞にして孰が偽なるや、將た之が眞偽を定むるものは何か。吾敢て斷じて曰く、佛教と耶蘇教と兩者等しく是れ眞なり、各之に適ふ人性に由る佛教は之に適ふ人性に眞にして、耶蘇教は之に適ふ人性に眞なりと。吾が謂ふ所の耶蘇教に適ふ者とは、良心の醒覺せる者、然らずんば醒覺し得べき者なり。謂ふ所の佛教に適ふ者とは、良心の麻痺せる者、然らずんば麻痺せしめ得べき者なり。人の性は先天的に斯の如く相殊なれり、人の性殊なる時は其の道も亦相異らざるを得ず。吾是故に曰く、兩者各之に適ふ者に於て眞なりと。

人の性は若く先天的に相殊り、故に孔子は性相近しと謂へども、敢て相同じと謂はず。孟子は性を善と謂へる同時に、荀子は性を惡と謂ひ、韓子は性に善惡ありと謂へり。是皆性に二種あることを顯證せるなり。耶蘇は人種を善惡の種子に比して曰く、善種は是天國の兒輩なり、稗子は惡魔の兒輩なりと。是れ純然たる預定説なり。耶蘇の謂ふ所の種子は、兩子の謂ふ所の性なり。孟子の謂ふ所の善性は、吾が謂ふ所の良心の本體是なり荀子の謂ふ所の性は、肉情の本體是なり。是故に性善なる者は眞に佛敎を信ずる能はず、性惡なる者は固より耶蘇敎を信ずる能はず、靈を主とする者は耶蘇敎を信じ、肉に循ふ者は佛敎を信ず、吾是故に曰く兩者各々之に適ふ者に於て眞なりと。

批 評

新曲かぐや姫

一讀して其美に奪はれ、再讀して稍々其物を正視するを得、三讀して始めて是非の念を生ずるものは坪内博士の新曲「かぐや姫」である。

博士、巻頭に自序し、此篇も亦博士自身の新樂劇の圖案なることを告げ、其の第一圖案なる浦島と此の篇の差異とを辯じて曰く、「彼にては舞踊を本位と立てたるに、此れにては謡唱大分を占め、彼れは俗曲を髓腦となしたるに、此れは寧ろ能學を根幹と做せり。但し構想措辭、旋律、樂器等一切舊格に泥むことなし」と。是れ此作を讀むに當つて、先識り置かねばならぬ物である。

寫實に起つて擬古に終はる、是れ往々大家の追ふ所の文學上の旅程となつて居
寫實に起る。ラルヅタルスの如き正に其の一人であつて、逍遙先生も亦此旅程
を取られつゝあるのである。是れ現實の煩瑣と平凡に厭かれた所爲であるので
あらう、是れ即ち反動である。
然し同一手腕にして能く寫實と擬古と兩能を兼ねるを得るものであらうか。是
は其作家の天才の程度次第である。吾は博士が寫實に成功せられたる如く古文
辭に於て成功せられんことを信じ且つ望むのである。
然し今日の博士、此の「新作かぐや姫」に顯はれたる博士の造詣は何様であら
うか。世間は既に博士の成功を認めて居る、其の古文辭の圓妙、至醇の域に造
詣して居ると謂ふのに異論がない。吾人と雖も亦之に同意である。唯吾が先生
を見ることは吾人の見る所よりは數等高いのである。故に吾は多少吾人に異つ
た考を有して居る。だから敢て先生の顔を干して之を披瀝したいと思ふのであ

る。是れは先生でなければ濟して舍つて置くのである。唯先生であるから言ひ
たい、唯先生であるから聞て戴きたいのである。
舞臺の結構、樂器の撰擇等。外部の事物は又各其の専門家の批判に譲るのであ
る、吾は唯「かぐや姫」其物の被服なる文辭と本體なる人格に就て言はんと欲
する所があるのだ。

(二)

驀地に本文に向はう

第一に「心あても虚ろとなりぬ、吳竹の節筒に生りし君なれば」の句に於て「虚
ろ」の語は適切で無いと思ふ。是れ次句の吳竹を縁する組織であらうが「吳竹」
は「節筒」の承語で具足せられて居るから、是處は然様な懸念なく、一氣に意思
を言ひ徹して欲しい。
次に「たゞ一筋に眞直にて、剛くもありけり節ある性の」、又「こはくもありけ

る下心の」である、是では「かぐや姫」は男性であつて女性でない、女性であるかぐや姫ならば、やはり屈すべくして狂ぐべからざる織竹の性を取るべきものと思はるゝのである。然し作者は姫を男性でもなく女性でもなく、中性の物と做せる様にも思はれて居る。其れならば議論はない。唯「かぐや姫」に對する美感を殺すまである、

次に「呵嘘して花を促さば、瓶裡の牡丹發くとも、可憐ら傷まむ花の色。」又「げに珊瑚は碎くべうして、其色を奪ふべからず、伽羅は燻くべしと雖ものこる香をりを如何にせむ。」此二章は理を語るの文。博士が理を語るの筆は、情景を叙するの筆に如かないかと思ふ稍露骨の嫌がある。道理とは思へるが美感を缺いでは居ないか。次に姫が自ら道ふ詞に「行住一へに任す興の來去に」とあるのは、前後の文辭の勝妙にして天女の誦經を聞くが如き中に、忽ち一句詩吟を間ふる様であるが、作者の意見は如何であるか。又「眼裡に妍媸無う、念頭

に是非を斷じ」の句も情を以て生命となす女性の爲には寧無用有害ではないか如何、然し前にも云る如くかぐや姫をして理性を以て勝しむる作者の用意ならば兎角の論はない。

次に「浮べる貝の花の城」斬新といへば斬新であるが吾は未だ首肯することが出来ない。又「げに時こそは靈しきもの」翁嫗の語としては學者めきたるを覺ゆるのである。

先生に願ふ所は古文辭に於ては全く寫實の筆を抛去つて、出来るだけ現實を飛び離れて戴きたい。然様でない先生が與へられた寫實的趣味が讀者の頭腦に残つて居るから、古文辭の綾羅の下に猶ほ寫實の骨が残つてある様に揣摩せらるゝ憂があるのである。是は先生の作に取つて非常な不利益であると思ふ。

(三)

竹取物語は天下の偽書、之が作者は千古の僞人だと、吾は其様嘗て謂つた。今

も猶謂つて居る。故如何となれば此の書が誇り示す所はかぐや姫なる一の術婦に過ないからである。吾が血管には人間の血液が流れて居るのだ。若し他界から來つて此の人間なる吾が同胞を熒惑する者、愚弄する者があるときには、吾が血流は激昇し、奮興し、彼に對して赫怒となるのだ。又然様な魔物を書いて喜ぶ様な作者に對しては、吾は少も假借する所なく、論難詰責して其書を焚せなければ氣が濟ぬのだ。

かぐや姫なる者は一の術婦である。何が故か。當然だ。彼の女は其雪膚と花顔とを下界の人間に見せびらかしに降つて來たのだ。事實は然様でないにしろ、作者の心は然様であるのだ。而して下界の人間の己の美色に迷つて戀慕して來る者に、許約の條件として、此の世界には有りもしない物を要求して、或は之を得んとて生命を危うするのを見て樂しみ、或は又之を求むるの術なく、遂に譎詐を以て譎詐を迎へざるを得ざるに至つた窮狀を見て喜んで居るのである。

謂ふ所の譎詐を以て譎詐を迎ふるとは何様云ふ事か。天人の譎詐に對して、人間の譎詐を提出したのだ。天人の譎詐とは何を謂ふのか、無論かぐや姫なる者の提出した要求を謂ふのだ。曰く佛の御石の鉢、曰く蓬萊の玉の枝、曰く火鼠の裘、曰く龍の首の球、曰く燕の子安貝、是等の者は皆此世界に無いものだ。よしんば有つたにしろ、彼の女は無いと思つたから、求めたのだ、有ると思へば求めはしないのだ。其は求婚者の誰にも應じないと決心して居るからだ。だから有つたら大變、其を取つて來た者に其身を許さねばならぬから、此世界に決して無いはずのものを言つたものだ。其の無いものを取つて來いといふ、其の心が即ち譎詐である。天人が譎詐を以て人間に譎詐を誘き起したのだ、譎詐の罪は先づ此の女にあるのだ。謂はゆる己より出たるものが己に歸つて來たのである。然るに此處が天人であらう、己の譎詐を高く棚の上にあけて置て、人間の譎詐など言つて人間を笑つて居る。美しいが憎い面だ。此が天人天女であら

うが、人間世界では此様な女は術婦だ、毒婦だ、妖婦だ、魔女だ、高橋阿傳だ。是か一の美文であるから、昔から名著で通つて居るのであるが、此のかぐや姫が歴史上の人物であつたら、何様な人間の憎を受け居るかも知れん。小野小町以上であるべきである。何もかぐや姫には罪は無い、唯此様な妖婦をさも美しく、真らしく、誇りがに書きたてたる作者の心術が譎詐である。吾是故に曰ふのだ竹取物語は天下の偽書で、之が作者は千古の偽人だ、ものゝ哀も何もない不情漢だ。

或は言ふでもあらう、かぐや姫が月球に歸るに當つて、不死の薬を天子に献じて其の訪問を蒙つた恩意に對へたのを見ると、全く人情のないとも言へない。然様であらうか、若し然様ならば、彼は人爵に動いたものと云はねばならぬ。故は諸皇子の戀愛と天子の戀愛と變る所はないのである。否諸皇子中には無いものを得ようと、或は生命を賭した者もある。或は大金を投じたものもある。

天子は更に此事がない。吾はかの術婦が何が故に天子に不死の薬を献じたかと疑つたが、此は唯天子が思想の中心である時代の産物だといふ痕迹を留て居るものと見て氷解するを得たのである。坪内博士が此の物語を翻して、戀愛の前に人爵を撤去して、「高貴なるに、心移すと浮世人の思はむことの便なさよ」と曰はしめ、又物語が天子に献げた不死の薬を其の養育の恩義ある媼翁の上に移したのは、好く時代思想を反寫せられたものであると思ふ。唯獨、

「あるひは又、直力に得むと急り
あるひは又、實は得べからざる物」を求めしに、あるひは詐り

「あるひは他し力草を、只頼むこそ果無けれ
あるひは他し力草を、只頼むこそ果無けれ

に至つて、人道が遂に博士を興すの力のなかつたのを浩嘆するのみだ。然し作者の主眼が茲に無いのは致し方もない。

然らば博士が此篇を著はされし本意は何處にあるか、無論其の末尾に在るので

ある。

姫「満ちぬる月の夜々は、我を見おこせ、浮世人。」

一回「圓滿美妙」の御相、

内侍等「あるひは山河草木に影を寓し

翁嬭等「又は人間に照臨し

武人等「餘んの光は宇宙を含む。」

一回「たへなり〜」。彩雲の棚引く空に、燦めき、ひらめく天の羽衣、靡くも

返すも光の眞袖。

内侍等「月見れば千々に悲しき故よしを

一回「ちびに悲しき故よしを、今こそ悟れ、月見れば、醜つ世いと醜くけれ。

三五夜中の影は又、満願眞如と聞くからに、尙あこがる、人心の遣る瀬なき

こそ有理なれ。

實や、一たび理想界、眞如界、の眞象の美觀に接しては、現實界、現象界の醜惡を愈々著しく感ずる。愈々理想を憧憬する、是が此篇の人生觀である。全篇の精彩は此處にある。妙想、美文の魔力も實に此處にある。然して無意味なる彼の物語に一大人生觀を與へし所。是が此篇の起る所以である。之を總ぶるに此の「新曲かぐや姫」一たび之を讀めば神飛び心奪はれ、恍惚として其の幻影の美を忘るゝ能はざるもの三日、今更に博士の筆力の偉大なのに驚くのである。(三十八年十二月「電報新聞」)

隠れたる大作

(一)

明治三十四年の春、民友社から出版した小説書類の中に、「武藏野」と題した小説の書物がある。吾が茲に「隠れたる大作」と曰へるは、此書の首に置かれた、

武藏野と題した短篇九章の作である。

同じ書物の中に、又「星」と題した、小品神話がある。其中に戀愛の女星、一詩人の夢に見えて、君は戀を望みたまふか、將た自由を望みたまふかと曰ふと、詩人は對へて我は戀と自由とを併せ望むと曰へる。譚がある。作者は此の神話に由つて、斬新なる思想を輸入して居る、否元始以來人間本來の欲求と運命とを發揮して居る。戀と自由是れ其自性に於て反對せるもの、即ち決して併せ得べからざるものである。而るに此の併せ得べからざる物を併せ得んと欲するものが、是が人間の本來の欲求である。何故併せ得べからざるかといふと、戀は元來束縛性の物なんだ。人若し戀すれば戀に縛らる、戀に縛らるゝ者は戀の奴隷だ。戀の在る所には奴隷がある、奴隷が無ければ戀がない。戀は奴隷を求むる所以だ。是故に自由の人戀すれば忽ち自由を失ふ。而して甘じて戀愛の奴隷となつて居るのだ。既に奴隷となつて居れば復た自由を有してゐない。自由を恢

復しようと思つたら、戀愛を解脱せねばならん。戀愛を解脱して、始て自由を恢復するを得るのだ。然るに歴史上の人は、社會に生れて社會に長じ、戀を追ひ束縛に慣れ、甘じて奴隷となり居つて、恬として自から怪まない。殆ど初から自由に與ないもの、様だ。是れ此の神話が頗ぶる斬新を感ぜしめ、直ちに吾人の想像を駆つて、原始の人の原始の状態を想像せしむる所以である。夫れ自由であることは、自然兒であることである、自然兒戀愛を懷いて奴隷となる。聖書の記述に據ると、原始の人アダムは、初は實に此の自然兒であつた。エデンの樂土の主人として鴻雁麋鹿を友として遊んで居た。其間全く自由の人であつた。然し彼は自然兒たるを満足せず、戀愛を懷ふた、彼が戀愛を得た同時に忽ち自由を失つたのだ。彼は其妻エバの愛に束縛せられて彼女と共に罪類となつて、エデンの樂土を失つて、流離兒となり了つたのである。

「武藏野」は作者が未だ戀愛に觸れざる自然兒として、自由の人としてエバ以

前のアダムとして、縦横自在に廣漠たる武藏野の或部分を駈け廻つて生活した結果として成つたもの。

(二)

武藏野は固よりエデンでない。彼には鴻雁麋鹿の舞躍るのがあるが、是には此の如き生物がなく、反つて人生々活を以て點綴せられて居る。斯く古今東西、自然の形を殊にせる所はあつても作者が茲に放浪した精神は、當年のアダムと異なる所ないと思ふ。

武藏野九章、其の尤なるは首の五章である。概して謂へば筆力勁拔、詩趣清新逸氣人に逼つて居る。其の首章は序説、武藏野に對する作者の憧憬を叙べた。次章は作者既に武藏野に在り、其の日記の文を拔萃して觀察の梗概を示して居る、其の文直截簡明、謂はゆる寸鐵人を殺ぐものである。茲に引て其の模範を示さんか。

十月二十五日「朝は霧深く午後は晴る、夜に入りて雲の絶間の月さゆ。」

同 二十六日「午後林を訪ふ。林の奥に坐して、四顧し、傾聽し、睇視し、黙想す。」

十一月十九日「天晴れ風清く、露冷やかなり。満目黄葉の中綠樹を雜ゆ小鳥梢に轉ず。一路人影なし。」

是れ明治二十九年の秋の武藏野を語れるもの、謂はゆる天高く氣澄み風清く露冷かに、霧晴れ月冴えたるものは自然にして、林を訪ひ林に坐し、四顧し、傾聽し黙想するものは自然兒なり。

十二月二日「今朝霜、雪の如く朝日にきらめきて、美事なり。」

一月十三日「夜更けぬ、風死し、林黙す。雪頻りに降る。燈をかゝげて戶外をうかゞふ、降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武藏野沈黙す。而も耳を澄せば遠き彼方の林をわたる風の音す、果して風聲か。」

同日 十四日「今朝大雪葡萄棚墮ぬ。」

是れ二十九年より三十年に亘る、冬の其を記したるもの。雨雪霏々として大野を掩ふ、自然兎兎の如く塾して出でず。行藏時に隨ふ是亦自然兎の自由なる所。三章以下は前章に列記した日記に就き精く實景の變化を以て説明を下すのである。此章に於て作者は武藏野の特色は楢林にあることを説いて、楢林の美觀を左の如く叙べて居る。

「楢の類だから黄葉する、黄葉するから落葉する、時雨が私語く、風が叫ぶ、一陣の風が高い丘を襲へば、幾千萬の木の高く大空に舞ふて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。木の葉落ち盡せば、数十里の区域に亘る林が一時に裸躰になつて、蒼ずんだ冬の空が高く此上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣が一段澄みわたる、遠い物音が鮮かに聞える。」

着想が斬新であるから、觀察が斬新である、隨つて文字亦斬新である、而して

凡て是れ無韻の詩である。

猶ほ吾人をして、幽玄の感に耐へざらしむるものは時雨の記である。

「若し夫れ時雨の音に至ては、これほど幽寂のものはない。山家の時雨は我國でも和歌の題にまでなつて居るが、廣い、廣い、野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、又た林を越えて、しのびやかに通り過ぐ時雨の音の、如何にも幽かた、又鷹揚な趣があつて、優しく懐しいのは實に武藏野の時雨の特色であらう。」

四章に於ては武藏野を點綴した生活を記した。其の記述は五章に接して、一層懐しい人間となつて居る、茲に之を引くことの出来ないのは残念である。唯末尾の蒼茫たる晩色、高寒なる野景を寫した筆のみは、如何にも看過し難いのである。

「日が落ちる、野は風が強く吹く、林は鳴る、武藏野は暮んとする、寒さは身

に泌む、其時は路を急ぎ玉へ、顧りみて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放てゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しさうである、突然又野に出る、君は其時、

山は暮れ野は黄昏のすゝさかな。

の名句を思ひ出すだらう。」

一篇五章皆絶品だ、其中にも三章と五章を推すべしと思ふ。

之を總ぶるに武藏野は一部の自然經である、十年前之を讀んで、十年以後又之を讀むに、感興毫も減じない。又十年の後も猶ほ今日と同じであらう、而も世間此の大作あるを識るものは、甚だ寥々である様だ。思ふに人情悉く戀に趨せて、自由の愛すべきを知らず自然兒たるの興趣を識らないからであらう。然し今に見よ、十年、五十年、百年の後、武藏野が此の都會の膨脹の中に卷こまれ、高樓大履の庭に埋つて了つた曉、其の面影を留むるものは、唯此の一編

であるであらう、而して作者の名は永く此一編を以て稱へらるゝてあらう。其の作者即ち當年の自然兒は誰であるか、獨歩國木田哲夫氏である。

(三十八年十二月「電報新聞」)

家庭小説二篇

(一)

家庭小説二編、一は中央公論二百號に出てる幸田露伴氏の「付焼刃」一は文藝俱樂部第十一卷第十五號に掲げられた堀内新泉氏の「愛の聲」である。

極端を尙とぶ戀愛小説の流行が、清淑なる家庭の空氣を汚すの虞があるので、思慮ある作者の中に、特に家庭の爲に清新なる趣味を傳ふるの風が興つた、願れば是亦社會の趨向に應じたものとも謂ふべきである。蓋は社會が固定して組織が秩序的になれば、人心は次第に沈着になる、人心が沈着になるに隨つて、

思想は家庭に傾くのである。今日の文界の現象は、やはり社會の趨向の反影に外ならぬと思ふ。

家庭主義は人生生活の重要を家庭に置きしむるものである。生活の趣味を家庭に發見せしむるものである。時間と金錢とを家庭の幸福、慰藉、便宜、必要のために使用せしむるものである。今家庭主義の要旨を摘み擧げて、二編の着眼點を檢せんか。

第一家庭主義は人を平凡にするのである。家庭を犠牲にして不羈卓犖なる行爲に出づる事を許さない。社會の秩序を外れて飛躍することを許さない家庭に困厄を及ぼすからである。孔子の如き、釋迦の如き、西行の如きは皆家庭主義の罪人である。家庭主義の豪傑といふものは、社會の秩序を着々履み登りて最高位置に達したものが其であるのだ。「愛の聲」の主人公飛驒莊川鑛山の鑛業部長某は、此模型に屬した人物として描かれたもの、様に見ゆる。元來質實な性で、職務

に忠實な人物である。彼は家庭の殖るごとに職務に盡すの度を加ふる。随つて鑛主の信用を増す、給料が上がる、鑛夫の依頼が加はる、漸く此鑛山に於て「彼の人は無くてはならぬ人だ」と云ふ位置に進む、最後には「目下の事業は寢かすも起すも自分次第」といふ最高地位にまで達したものだ。彼は此位置に達するに及んで、多年蓄積した金錢を散じて、教育事業に寄附する、社會の公益を圖る、士人から恩人として尊敬せられる。「若し御思召でもあるやうならば國會議員位には何時でも全郡一肌脱いで御選舉申す。それとも矢張從來の御事業が御望みだとあるならば、資本の所は何のやうにも一同て工夫するから、是非ともこの儘永くこの土地に止まつて貰ひたい」と慕はるゝまで、貴重な身分に成り上つた人傑だ。「付焼刃」の主人公は之れと正反對の人物が造られて居る、「色の小白い、のつべりとした、面長の、しかし下豊の、貧相でない、おつとりとした人の好さうな三十前の男、温厚過ぎて稍癡鈍なので、數々同輩から

(氣の長いのと人の好いのは君の専賣だ) など調戲れたり黷られたりしたことも少くない、不決斷で煮え切らない男で、陰辨慶で面と向ふと意氣地無して執着心が非常に缺けて居る男、未だ家庭を爲さない中から、分に過ぎ大借金を高利貸に脊負つて居たといふ男、家庭主義から平凡にせられなくても元來平凡な性の男、否平凡以下の男、其名は温間淀雄といふ男なんだ。

(二)

第二、家庭主義は金錢を家庭の幸福の爲に費さしむるのだ。俗に曰ふ勤儉貯蓄さ。是の責任は概則として一家の妻たる者が之に當るのである。「愛の聲」の美智子に就ては、「妻はまた非常な儉約法を執つて、其月から親子三人の生計費を十圓以内で綺麗にあげ、月々五十圓づゝは必ず貯蓄することにした」次で「月給が従來の額に倍したのを、内では妻の巧く料理して、毎月貯めて行くので、三年目には自分は立派な運命を造つた」と記されて居る。實に順境の順なる

もので、少々順に行き過る様だ。之に反して「付焼刃」の此點は借金しやくきんの壓力あつりよを蒙つた、逆境にある家庭の家政整理の局に當つた細君傳子の苦心くしんと技倆ぎりやうとが十分に發揮せられたところは、作の妙處の一となつて居る。「よく御考へなすつてごらんなさい、經濟が紊亂して顛返しが付かないと仰やつたところから、貴下と二人相談した上に、可厭いやでしたけれども、妾が實家へ行つて、頑固な父を説き伏せて、大切に仕て居る公債を手離させて、其金でもつて彼の慾野の手を切つて仕舞つて、漸く何様にか前途に樂になつて行かうといふ見當の付くやうになつたのは、終此頃ぢやありませんか、利息こそ公債並で、無いも同然のものにはしろ、まだ負債を脊負つて居るですもの、氣樂を仰やつては困ります。」と良人淀雄が友人世戸田と秋の大祭日の一を鴻臺で遊ぶ爲め、月額七圓の小使を使ひ盡した後、當日の遊興費を低頭で請ふのを、傳子頑として應じない、じりじりと理詰で詰上げ、頭たまご到素手すてで出したのである。

第三、家庭主義は家庭の幸福に時間を費さすのである。社會の快樂は交際である。家庭の其は團欒である。此點から見ると前項と伴隨して、社會と家庭は交々敵だ。元來儒教や佛教は此の團欒といふ事を度外視して居る、唯社會自身が幾分か茲に注意して、交際上のお裾分を爲して家庭の不平を慰藉して居る。宴會の歸路に於ける折詰の家産が其例だ。家庭は此家産を得て一家族の團欒を開いて、社會に對して不平を暫時忘るゝのである。然し是は家庭を輕侮した玩弄した所爲だ。家庭は社會に向つて復讐を行ふのである。美智子が繁華な東京を捨て、日本一の山國である飛驒の山中に一家の基礎を据たのも是が爲だ。主人が每晚詩文小説の爐邊物語を以て、近隣の老人婦女子を聚むるを以て快樂として、都會の交際社會を棄て果たのも是が爲だ、淀雄が世戸田に連れ出さるゝのを怒つて、「吾家へ御招びになるが宜いぢやありませんか、御遊なさるなら妾を連れて日比谷へでも上野へでも御出なさいまし、そして吾家へ歸つて御酒で

も何ても御欲りなさいまし、經濟的で而して道徳的であります」と曰ふのも是が爲だ。社會と家庭と畢竟平衡を得るまでは、家庭は決して讓るまい。

第四、家庭主義は平等を要求するのだ。良人が車に乗れば、細君も車に乗るといふ。良人が靴を拵へれば、細君も下駄を買ふ、良人が時計を買へば、細君も時計を要求する、良人が書物を買へば細君も掛襟を欲しがらる。だから淀雄は傳子に約して「苦難も偕にする代りには、歡樂も必ず偕にしやう、乃公が花見納涼に出る時には、お前にも必ず拵へて遣らう」と曰ひ、傳子も亦良人に向つて「第一歡樂は必ず共に仕やうといふ御約束があるぢやございせんか、貴方が好い御天氣の日に外へ出て御遊びなさりたければ、妾だつて矢張外へ出て遊びたうございませす。黙つて居ても今日あたりは何處か氣の晴るところへ連れて行つて下さつて宜い筈です」と否とは云はさぬ道理で推して要求するのも、一點も無理

のない處さ。『愛の聲』には此點が特に見えない。

第五、家庭主義は夫妻をして伴侶たらしむるのである、外の朋友は男子である、同時に内の朋友は細君といふ事になるのである。趣味上の朋友、信仰上の朋友、志操上の朋友、主義上の朋友は惟一家庭の伴侶あるのみである。二編共に筆端、茲に及ばないのは目的が茲に無いからであらう。又日本の家庭が未だ此處まで進んで居ないからであらう。

吾人は茲に此の老大家と新進作家の作とを比較したのではない、唯其の着眼點を檢舉並列した迄である。

露伴氏の作の筆力高古勁拔にして、間間鋭く、辣く、酸い所、其の獨歩なるは言ふ迄もない。所謂薑の愈々老て愈々辛いといふものであらう。

(三十八年十一月「電報新聞」)

美文

古處山を懷ふ

小春日和清く暖にして、一日の閑遊を思ふ此頃、數次懷を往來する者は、故郷の空に聳ゆる古處山である。

吾が郷里に在つて、時候の變遷を最も先づ報ずる者は此の山である。蓋は春の靄先づ其の巔に懸き、夏の雲は先づ其の巔より起り、秋の空は先づ其の巔に於て澄み、冬の雪は先づ其の巔に走ればなり。今吾が懷に來往するものは即ち吾が郷里の北面、清く明かなる空の上に、雪を戴いて孤り秀てたる其の崇高なる姿である。

大凡連想なくしては、一事をも憶起すことは能ぬもの。其の如く吾が今古處山

に於けるも亦唯此の現在に見る古處山のみでなく、歴史的に多様な古處山が吾が心眼の前に自から現れて移るのだ。

第一は戦國時代の古處山である。當時筑前の豪傑秋月種實、此山を據として一時手強く豊臣氏の大軍を拒ぎ戦つたさうである。今日も此山の正面に横はる田代山の頂上に盤桓した一老松に、懸鼓松といふ名が残つて居て、遙かに京師軍が其の頂上を占領して、真向に古處山を攻撃した光景を想望せしむるのである。吾が郷から古處山に登るには、一たび田代山を越へ、其の老松の下に一憩して、古處山の全躰に面しつゝ、戦國時代に生れて禍亂を蒙りたる祖先を懐んで、其の子孫たる自身等が太平の恩澤に浴する幸福を喜ぶのであつた。

第二には封建時代の其である。當時の秋月城市は猶ほ此の山の麓に立つてゐる。城中の洞道が、山中に抜けて居ると窠物語で記憶して居る。又同藩の微祿士族の女房たちが、家計を補ふため、晝此山に上りて薪を採り、夜月を踏んで

東薪を負ひ下るといふことも記憶して居る。其憂い経験を吾に告げた一老婦人の相貌をも想ひ起すのである。

第三には詩人と關係した古處山である。往時此山の麓に其號を此山に取つて古處山人と稱する隠れたる大詩人があつたこと、其詩が豊後の村上佛山翁の薬籠中の物となり了つたといふことを耳にして居る。不幸にして其人を見ず其詩を讀むに及ばないのを、吾は想ひ起すたびに慨しく思ふ。

第四には詩中の古處山である。古處山人の後に秋月藩儒原采蘋といふ先生が有つた。是人は日田の厩瀬淡窓の門人で、其の古處山を詠する絶句が「宜園百家集」に出て居る。或は記憶に錯誤あるかも知れぬが、其の末章が「古處山花穎川月、何嘗可一日無一詩」であつたと思ふ。然るに茲に奇なる事は、古處山には花がない、絶頂に柘植がある。眞黒く茂つて居る、其上に雪が降るのが反映上極めて美觀を呈するのである。今吾が心眼に浮んで居るのは即ち其だ。

最後に思ひ起すことは吾が「歸省」に此山の記憶がなかつた事である。當時平和の觀念のみあつて、崇高の觀念が吾が腦中に無かつた所爲であるか、何様であるか、吾と吾が心が解らない、
 小春日和清く暖にして一日の郊遊を思ふ此頃。絶えず懐に往來するものは故郷の空に聳ゆる、雪を戴いた天外の絶峰である。(三十八年十一月「電報新聞」)

閨秀メリー、ラム

メリー、ラムの名は、其兄弟チャールズ、ラムの其を連想せしては憶ひ起すこと能はず。姉は其の助なき弟を覆育し、弟は其の發狂質なる姉の爲に終身を獻じ、終始相助けて、遂に一代の文名を爲す、同情あるもの誰か一掬の涙を濺がざらんや。

メリー、ラムは一千七百六十四年に於て生る、父はインナーテムフルの判事ミ

スター、ソールトの書記なりける人なり。メリーの幼時は、弟チャールズの生るゝまでは、一向に興味なく光輝なきものなりき。ラム家には不幸にも發狂質の遺傳ありき。然して此の傾向は轉た當時小兒待遇の習なりける粗暴と不情のため益されぬ。爾の憐れなる狂へる腦は、始中終何を考へ居るぞ、この冷語は是れ彼女の祖母が感じ易き彼女に最後の印象として残せる語なりき。而して彼女の母は獨り其兄ジョン——利己にして貪欲なるジョンにのみ其愛を鐘めたりき。

是故にメリーの十一歳の時に當りて、チャールズの世に生れし時、彼女は其愛情の全量を傾け盡して此の赤子に傳づけり彼女は當時此子の上に注ぎし所の殆ど母としての愛情の感化力に就て後年語る所ありき。蓋は此子の覆育は殆ど彼女に委ねられたればなり。然く人生の伴侶、人生の目的を得てければ、既や復た淋しき味氣なき望なき昨日の彼女には非ざりしなり。

メリーの教育は、偶然に又有心に、幼きより一大密室なりける圖書館に輾がり、
 擇みなく、咎なく、自由に其の牧場に咀嚼するを許さるゝことに由りて爲され
 たり。是の圖書館は即ち判事ソールト氏の其なりき。聽て千七百八十二年チ
 ヤールス七歳、メリー十八歳なりける時、チャールスはブリューコート學校の
 學生となり、茲に詩人コレリツチと終生の友誼を結びたり。此頃より父は漸や
 く老衰し、其収入も之が爲に漸やく減じたり。獨長男ジョンは南海局に善き位置
 を有せりといへども、彼は獨其家族と豪奢に日を送くる外は更に他の考慮な
 りしかば、十一年の間即ち其二十一歳より三十二歳に至るまで、メリーは其
 の針業を以て自から養ひたり。
 父の能力は彌益消耗を加へたり。故にチャールス十五の齡に達して學校
 を退きしとき、ラム家一家の生養の責任、此の少年の肩に落ち來れり。幸に
 も彼は初其の兄ジョンの勤めし同じ役所に勤めて、善き給料を受け、尋て印度

省に轉じて一年七十磅を得る身となり、一家族茲に小康を感ぜんとして、忽ち
 又家庭の禍難に襲はれたり。先づ初めに其母全く廢人となれり。次で一千七百九
 十五年一家の責任を負ひたるチャールス自身、俄然遺傳性なる癡狂に襲はれた
 り。彼を以て唯一の支柱となし、慰藉となせしメリーの落膽いかばかりなりし
 ぞ。彼女は今彼に代りて老いて其の幼時に還れる父と、廢人なる母と、一家の
 負擔を分つ力なく終日祈禱書にのみ見入れるところの老たる伯母ヘッチーとを
 養へり。既にしてチャールス回復し來れり而も其の回復するや否、又新なる禍
 起れり。彼長男ジョン、重大なる禍患に遭遇し、其の家族を挈けて歸り來れり。
 彼は其の繁榮の日、其家族と嘗てチャールスの匱乏を顧みざりしが、今其躬窘
 窮するに及んで、彼の生養を受けんが爲に其家族を挈けて歸り來れり。是が爲
 なるか非ざるか、從來屢メリーの上に催うし來りし遺傳性の發作、終に千七
 百九十六年九月に起りてメリーを奪へり。メリーは突然卓子より小刀を把つて、

母の心臓を突貫けり。目前に起りし所を見て、父は無神経となり、伯母は氣絶したり。チャールスは驚き起ちて其小刀を姉の手よりもぎ取らんと努めたるが、其の未だ取りあへざるに疾くも其父に輕傷を負はせぬ。彼女の心狂へるまにまに、其父に輕傷を負はせて母の死骸と横はせぬ。慘憺たる光景目もあてられず、筆にも書くこと難し。然れどチャールスは唯數日前にこそ癡狂院より歸りたれども、能く此の慘事に當るべき能力、その平心と勇氣を維持すべき能力、殊に此の慘事の故にも拘らず、癡狂院の暗室に投じて親愛なる姉の生涯を没するを許すべからずと決するだけの能力を有しき。彼は當時コレリツヂに與へたる書翰を見れば、一層明かに當時の慘狀と、彼が自主的意志を作興したるを見るべし。

『我は歎くよりも爲すべき事を有てるを感じき。其の最初の夕、伯母は無感覺に横はり、何様見るも死人としか見えざりき。父は己が愛し又己を愛するところの娘の爲に受けたる傷によりて、血塗れたる額を以て横はり。母は死して遺骸となりて別室に横はれり。然れど我は不思議にも支持せられたり。其夜我は目を瞑ぢざりき。然れども恐怖なく、絶望なくて、横はりき。我は其後睡眠を失ふことなかりき。今や一家族の重荷は獨り我が双肩に投げかけられたり、蓋は我兄は嘗て老人、病者を看護するが如きことを思はず（我は愛情なしには之を言はず）。今は其足を痛めたるを以て、かゝる義務より免かれたるなり。今は唯我一人遺されたり云々。』

是より以後のチャールスの生涯は此の戦くべき慘事の當時、其心中に發起したりし哀むべき決心を現實する事なりけり。是に於て美しくしきアリスといへる一少女に對する彼の愛情は、一層謹嚴にして、一層命令的なる愛情と義務の主張の爲めに絶たれたり。其父の死するに及んで、一姉一弟一家に同居し、政府も亦其弟の保護を以て、將來其の姉の發狂性回歸し來るも、他の生命に危険を及

ぼさざらん十分なる保證として認めたり。彼は此の自から科したる事業に忠實なりき。彼自身は決して復た此の残酷なる遺傳に襲はるゝことなかりしかども、メリーは其生涯の終に至るまで、發狂質の回歸に訪はれて、爲に年々數月間に其朋友より犖獨に離されぬ。然れども彼等の協同の注意と謹慎とに因りて、前の如き生命に關するごとき結果を惹起すことなかりき。此事に就き哀れなる事實は、彼等の聖日の漫歩に、メリーは必らず發狂者の被服を包み、之を腋にしてチャルースに伴ふ事にぞありける。彼女は正しく其の病に襲はるゝときは、前兆によりて能く之を豫言するを得たり。さればラムの朋友はいかに一姉一弟手を相携へて、もろともに痛く哭きつゝ、避病院に向ひて行くを見たるかを語れり。

メリー前の發作より回復して、彼の平日の伴侶となりしときには、其の外部の容貌にも舉動にも、其の過去生涯に於て彼女を奪ひたる暗雲の徴候、一として

存するものなし。其の舉動は平靜にして、其言語容貌は沈着なりき。デ、クエンシーは彼女を稱して、マドンナらしき婦人といへり。又彼女の導かれて行ひし大慘事の結果として留まれる何等沈鬱の様状あることなし。然れども是れ其傷決して治されたるに非ず、寧ろ匿されたるものなる事は。此事件の後數年にして彼女が録せし語に由りて明かなりとす。曰く、親愛なる吾母上、御身は之を知りたまはざらんも、御身の上常に我が心胸にかゝりぬ。

或時メリーの愛せし小女、彼女に御身は嘗て御身の母上の事を語らず、是は何故ぞと問ひ出しとき、彼女の答は唯苦痛の叫なりき、以て彼が心事の如何に悲しむべきかを知るべし。

メリー、ラムの文學上の名聲は、主としてシエキスピア物語に存す。此のシエキスピア物語は、世の好著述が概して皆然る如く、貧の壓迫の爲に書かれたり。全部二十篇にして、其中彼の六大悲劇は、チャルース之を試み、他の十四劇

はメリー自から之を齎へせり。此計畫の主意は、諸劇詩を以て小兒の能力理解に適應したる散文説話となすに在り。而して其著作は、模すべからざる叙述の流麗と、劇中に生くる男性と女性の境遇と人物に對する批評的智見を以てせられたり。彼女は著作中の彼自身と、チャールスとを下の如く記したり。

『チャールスはマクベス、オセロ、リヤ王を成し、ハムレットに着手したり。我等が『中夏夜中の夢』(セキスピアの劇詩の一)の中なるヘルミヤとヘレナの如く、唯同座布團に座せざるのみ、毎々同卓子に就きて書けるとき、若くは年老たる文學通ダービーとジョアンの如く、我は嗅煙草を持ち彼は始終沈吟しつつ、且何も出来ぬと言ひつゝ書けるとき、御身等は我等を見ることを喜ぶならむ。彼は終まで斯く言ひつゞけて、終りに至れば必ず其の幾分の出来たるを發見す』と。抑も此の物語は、出版者ウィルリヤム、ゴッドキンの爲に書かれたり。其人先妻はメリー、ウィルストロンクラフトと云へる婦人なりき。其の後

妻なるものは、其良人の出版業を助けて効あるものなりしが、心卑しき婦人にて、ラム一家に對しては何故か憎惡の情を懷き、殊にチャールスに對して憎惡の情を懷きたり。チャールス彼女に就て曰ふらく、『我は我が頭上に此の銘を以て葬られんことを欲す、曰く茲にチャールス、ラムなる婦人を憎む者横はると、我が言ふ所は、唯一婦人を指せるなり。其餘に對しては、神我を祝したまはんことを』と。然り而して物語の成功は、出版者と其妻の不機嫌も之を害するこゝと能はず、書物は快速に七版まで走れり。今日に至りても、此セキスピヤ物語の斬新なる表装を装ひて、社會に出てざる年殆ど罕なり。

メリーの著述にして、セキスピヤ物語に亞ぎて行はるゝものを、エリヤの論文となす。然も最も愛讀せらるゝものを其の書簡とす。其書簡の中の最も美しきものを拔萃せんか、其はアルヅアルスの兄弟デヨンの溺死の後、直ちに其姉ドロセア、アルヅアルス(アルヅアルスの妹にして文學上の同伴者)に書き贈りし

者なり。アルツアルスの名作なる『幸福なる軍人』は、半は其兄弟ジョンに關して、半は同年戰死したるチルソンに關して作りしものと想像せらる。メリーの書はジョンの死に就き、ドロセアを慰めたるもの。曰く『我が願ひし所は、御身が今筆を着けたまへる如くにしかく美妙に描きたまへる死者に對する幽美なる記憶と、精神の平和なる状態を、異日必らず感じたまはんと語りまゐらせんことなり。されば悲傷者の悲傷の時を経て獨り夢寂に於てのみならず、醒時に於ても幸福の感覺の不斷の部分となるべきことを語らんは、悲傷者に對して最も禮なき事と感ずるになん。御身のやがて喪ひたまひし弟の君と共に、又弟の君を買して萬物を見たまはんこと、及び是事こそ終には御身に眞の慰藉、又永久の慰藉たらんことを、我は我が悲哀に於ける經驗にて善く知りぬ。然れど御身自身此事を感じたまふまでは、我は敢て然かく語るべきに非ずかし』。恐るべき哉此の如き精神にして、健全なる言辭を脣るを能くする心情にして、終

に生涯の重荷なりける癡狂病のために壓倒せらるべしとは。悲しい哉アルツアルス嬢の返書到りしとき、彼女は既に發狂し居りて、チャールス代りて之に答へたり。曰く『この度の病も、また前の時のもの、如く、たゞ一時的なるべしと信ずべき理由を我は有す。然れども我は然かく感ずること能はず、其間彼女は我が爲には死せる者なり。我は唯一の支柱を喪ひたるなり。我が力は去り、我は彼女の協力を奪はれて、痴孩に等し。我は正鴻を失ふことを恐れて、敢て思想せざるなり。蓋は我が大なる困惑に陥るとき、必らず彼女に諮るを常としたればなり。彼女は我より年齢増り、智慧勝り、善良勝れり。我は常に彼女の善良を考ふるに由りて、以て自家の哀れむべき不徳を蔽ふのみ、彼女は我と死生を共にし、我と共に天國に昇り、我と共に地獄にも陥らん。彼女は唯我が爲に生けるのみ。彼の恐るべき慘事の後、メリー深くチャールスに依頼せしかば、二人の心中、恒

に孰れか先に死すべきかの疑問ありしと見ゆ、チャールス一日從容としてメリ
ーに向ひ、「御身こそ先づ死なざるべからずメリーよ」と曰ひしに、メリーは微
笑を以て點頭さ然り我先づ死なざるべからずチャールスよ」と答へぬ。然るに
事實は之に反して、メリー、チャールスに後るゝこと十三年間、然れども其間彼
女の心状は頗る朦朧み、チャールスの亡きを苦しむの力を缺きたり。然らずん
ば其苦痛如何に大なりしとするぞ。一千八百四十七年、彼女は七十三歳の高齡
を保ちて死し、エドモンド教會の壁域なるチャールスの傍に葬られたり。
フオセツト婦人曰く、「ラム氏の此二人の相互の獻身の美徳は彼等が英文學に貢獻
せし所のものよりも優りて尊とく、吾人をして能く其のセキスピヤ物語、エリ
ヤの論文を離れて、此の一姉一弟の敬愛すべきを知らしむ」と。信なる哉言や、

(三十八年九月「女學世界」)

女作家オーステン嬢

赤坊が生るゝ、段々成長する、惡戯をする、お轉婆をつく、學校に上がる、學
校を退がる、舞踏會に出る、組合つて踊る、約束をする、結婚をする、赤坊を
生む、親になる、子供を育つる、嫁を呼ぶ、嫁にやる、安心をする、年を取る、
隠居をする、病氣になる、醫者を呼ぶ、死ぬる、牧師を迎ふる、葬式をする、
是は極めて普通平凡の生活、——普通平凡の歡樂、悲哀、苦痛、慰藉であるが、
英國十九世紀の巾幗社會中、寫實小説の大家の一なるゼーン、オーステン女
史は、實に此の普通平凡の生活の中より出てたのである。
ゼーン、オーステン、其の父は牧師である。千七百七十五年九月十六日ハムプ
シャイアのバシンストック府から七哩離れた、ステベントンの牧師館に生れた
のである。彼には五人の兄弟と一人の姉があつて、第一の兄ゼームスは英國文

學社會に中流の記者としては當時好く讀まれた方で、ゼーンに最も感化を及ぼした當人である。第三の兄弟ヘンリーは牧師で、ゼーンの爲めに出版者との交渉に當つた當人である。其他の兄弟皆各々ゼーンと特別の關係はあるが、最もゼーンに貴とかつたのは、姉のカツサンドルなので、此の姉と妹は生涯同じ家庭に暮し、同じ寢臺を分ちた。姉が學校に往くと妹も一處に隨つて往くので母親は二人の中を割くのが残酷だといつて、其を許してやり、姉が首斬らるゝときは、妹も一處に首さし出すだらうと平生人に語るほどであつた。姉の性質は冷靜で沈着で能く父母の命令に従ふことの出来る質、妹の其は頗ぶる快活で、而して命令を待たずに親の心に適ふやうに善く出来て居た。其でも妹は自分よりも餘程堅く智いといつて姉を崇めて居たのである。此の姉妹の睦しい間柄は、感能と感覺の中よき姉妹の一對、『傲慢と僻見』の中よき姉妹の一對として、其反影を現はして居る。

ゼーンはステベントン寺領で、二十五年以上暮した。此のステベントンといふのは石灰國なので大木は一本なし、一面に廣く生ひ繁つた列樹が見物である。列樹の下に蓮馨草、白頭翁、風信子など、可愛く花を咲いて居る。一體に崇高偉大な景色はないが、天地が廣くて快活なのは此の石灰國の特色である。寺領全體は淺い谷の中に簇がる疎屋の一部落であるが、其の通路の兩側に立ち列んで、いづれの宿も綺麗な花園を前に控へて居るなどは、いかにも洒落た田舎である。又其周圍は斜面の牧場で、一面眞青な茅野に黒牛斑牛など點在して居るところも、中々見棄てがたき景色だ。

ゼーンは此の郷里ステベントンと、程近きバシンストークで、種々な階級の人々と生活を見たらしい、英國の田里が著しく此の差別的社會を現して居るからである。然れば彼は此處邊で大地主、小地主、國會議員、牧師、其細君、其女たち、又をりくは鳥なき里の蝙蝠然と威張つた海陸軍の役人などを見た

らしい。此等が彼の小説の材料となつて居る。ステベントンから程遠からぬ所に、バスと呼ぶ地がある。此の處に一大浴場があつて、其處にオーステン氏と交際あるクーバー氏が住んで居るので、ゼーンは此の大浴場を研究するため、毎度此のクーバー氏を訪ふのであつた。然て又交際社會を研窮するのでゼーンは毎々リムを訪ひ自分も随分踊つたさうだ。何しろゼーンは自からも言つて居る様に、彼は何時も列樹の毛や苔の屑から綺麗な巢を作らうとする鳥を見られた様であつた。

オーステン氏の七人の男兒と女兒とは、性情が皆好く調和して居るので、其の調和の妙は自然と無邪氣無罪な小兒等に演劇を演ずることを教へた。其の脚本は二十もあるのであるが、彼等は此の二十の脚本をば通して一夕に踊るのである。此れは役者自身たちが銘々其の思ひつきを自身に筆を執つて書いたのである。是の爲方はゼーンが記者としての進行の途を滑かならしめたに相違ない。

其の理由は此時代には一般に女子が記者たることを嫌つたものである。今日でも猶ほ然様だけれども。であるから女子と文藝の話になると、何時も佛國の或る大家の説——大凡婦人の失徳の中、學者たるより大なるはなしといふ——が引かれるのである。同じ記者の言として勿論半分滑稽だけれど、女子に取りては北京が歐羅巴でない、アレキサンドル大王がルイ十四世の智でないといふほどの智識あれば澤山だといつて居る。又當時英國で有力な政治家であり、同時に又盛名ある文學家である或人、自分の女が作つたといふ詩を見て非常に讚めたが、然て彼人は其女を呼んで女の愛情に懇へてドーか復たと詩を作るのを止しておくれ、御身を女史など、世間に思はれたら困るからと、斯様言つたさうである。

此んな世界であるから、ゼーンは何日も休息室に引こんで小説を書き、其爲業が誰にも知れぬやうに、小片の紙を綴ちて書くので、いざといへば反古や針業で

直ぐと隠せるやうに注意をした、又其名は決して表紙に認むるなどいふ事を爲
なんだ。然るに父母はこれを黙許したと見え、反対した事跡一もない。兄弟た
ちは昔の作者仲間だから、之を咎めぬのみか反て出来るだけ便宜を與へて居る。
彼の身の周りに人となつた、姪だの甥だのいふ輩も、皆其の稱讃者である。彼
は斯かる稱讃者に圍繞せられて、少も自分の偉いといふ風を見せない、少しも
さる素振を示さない、其の滑稽と善諛とは此んな虚妄を装ふを許さないのでは
ある。彼は其の習慣に於ても、風俗に於ても、所業に於ても、飽までも婦人であ
る。彼はマルチノ—女史とは全く反対で、マルチノ—女史は作家として名高い
が針が持てぬといふ事も非常に名高いのである。彼の裁縫は驚くべく精好なの
で、今に保存されて居る標本を見るに、彼の指の熟練は其の筆の巧妙に少しも
譲らない事を示して居るといふのである。彼は水鳥の水に慣るゝが如く、記者
として其の筆に親しんで、二十の歳を迎ふる前に既に其傑作の數篇、——『感能

と『感覺』、『ノ—サンガー寺院』『傲慢と僻見』——を書き了つた。其の書くことの
簡易で而も自然なるや、家族たちの心に第一流の小説を書くのは、世界中一番
容易な事の一であるかのやうに思はせたほどであつた。彼にはホ—マー、セキ
スピア、セルバンテス、スコット、其他僅少の作家に賦與せられた賜——創
作の賜を、少分とはいへ、賦與されたのだと、オ—ステンの傳者ゴールドウ
—ホンスミス氏は曰つて居る。千八百一年の初、ステメントンの樂しき家庭は毀
れた。理由はゼ—ンの父其健康を失つた結果、牧師職を其子に譲つて、バスに
退隱したからである。是故にゼ—ンも此懐かしいステメントン、幼冲時代の遊
びどころ、平地を有する年經りたる花園、花咲き輝やく綠艸の小徑に暇を告ぐ
ることになつた。此綠艸の小徑は彼の今日まで書きつゝ歩いた處であつた。『感
能と感覺』の中に、マリアンテが其出立の南の夕、庭前を徘徊しつゝ、其故郷
に別を告ぐる語に、『嗚呼親愛なるノルランドよ、妾は何時卿を歎かなくなるだ

らう。何時何處に家庭を感ずる様になるだらう。嗚呼幸福な家よ、卿は今妾が此處から卿を眺めて悲しむでる心を察することが能るだらうか。多分復此處から卿を見ることもあるまい。さて又卿たちお馴染の樹だちよ、卿たちは何時までも變りはあるまい。我等が此處を立ち退くからと云つて凋む葉もあるまい。復見ないからといつて枯る枝もあるまい。否々卿たちは何時までも變りはあるまい、卿たち故に起す歡にも悲にも頓着しないで、其の影を歩く人が變るからとて感じもしないで。だが誰が残つて卿たちを悦ぶだらうか」と曰つた。ステベントンを別る、前日の夕、ゼーンの思も斯様だつただらう。バスに居た間ゼーンは此地の大浴場の風俗習慣を観察して、『ノーサンガー寺院』と『勸告』の景場とするに過ぎなかつた。千八百五年父が亡くなつたので、一家はサウザンプトンに移つた。ゼーンは此地でポルトマウスを訪ねて、海的美觀——『其の高潮の際、斷えず其色を變へ、喜を以て跳り、楽しき音もて

城壁に打かくる』海の美觀を見たらしい。が其故郷を去つて以來、九年の間、何一つも書かなかつた。理由は彼は元來家庭を愛する人なのに、其以來家庭らしい家庭を成さななだからである。千八百九年、チヨートンに轉じた。此處には其兄弟エドワードが住んで居て、別に一の住居をしつらへて彼等を迎へたからである。此處はウインチェスターに近く、又郷里ステベントンにも遠くないので、消息常に通ずるのである。又其住居は公道に臨んで居るので、聖日の爲に其宿に歸るウインチェスターの學童の一群が、甚だ騒々しいのであるが庭は極靜かて、芝生もある、小徑もある、運動にも、作文にも都合のよい灌木林もある、内には客室もあつて、ロイド嬢なる婦人も此の家族に加はつて居り、古きステベントンの親戚たちにも極近い。一社會が多福で賑かてゼーンの事業に頗ぶる刺激を與へた。インスピレーションが復つて來た。彼は再び筆を取て、連りに三篇——『エムマ』、『マンسفールド

ド公園』、『勸告』を成した。此地で又彼の爲にエガートンといふ出版者が見つかつた。此のエガートンは餘程目の開いた男と見え、彼の『感能と感覺』のために、百五十磅拂つて世に出した。甘く中つた、乃て此まで書き溜めてあつた『傲慢と僻見』、『マンスフキールド公園』、『エンマ』等の諸作、相續て世に出た。『勸告』は彼の死後(千八百十八年)に出た。皆匿名で出したのであるか、其は直ぐに知れた。當世文界の泰斗ウオタースコット、サウゼイ、コレリッヂ等の面々、皆心からの稱讚を以て其作を迎へたのである。茲に面白い逸事がある。是より先(千八百三年)バスに寓居してゐた間、彼の『ノーザンガー寺院』の原稿を其地の出版屋に十磅で賣つたことがある。所が好漢考一考して餘程馬鹿な商賣をしたと思つて、巨額の出版費を賭けるより、十磅だけの損で止めやうと決心して、其原稿を柵の上に投げあげて、全く忘却して了つた。今や世間はオーステン女子の名を喧傳して居るのに、バスの出版屋

先生一向に平氣で居る。すると一日一人の紳士が尋ねて來た。其用向は數年前十磅で賣られた『ノーザンガー寺院』の原稿を當時の價で買ひ戻しに來たのである。出版屋先生大喜びで、柵の隅から其原稿を投げ出して、金受け取つて、失ふたと思つた十磅が歸つたと思つて居る。客の方でも大喜びで辭し去つた。出版屋先生少しも自から怪しまず、反つて客の爲る所を怪しむだ。幾もなく『ノーザンガー寺院』の名噴々として傳はるを聞いて、出版屋先生二度馬鹿を見たのである。前の客は即ちゼーンの兄弟ヘンリーなので、ゼーンに代つて原稿買戻に來たのであつた。オーステン女史の作に關する批評は實に盛なもので、先づウオタースコットは其日記に、『余は二度いや三度までもオーステン嬢の好く書いた小説『傲慢と僻見』を讀んだ。年若い婦人で、日常生活の事物、人物を描寫する熟練を有することオーステン嬢の如きは、余が見聞した中で最も驚くべきものである。

犬の大聲に吠ゆる調は、我能く之を做し得るが、平凡の事物、人物を眞實なる描寫と感情との爲に、興趣あらしむる如き繊巧な手際は、我には拒まれて居ると曰つて居る。マコーレー卿も亦其日記に『ヂッケンスの困難の際』とプリニーの書簡を読み、次に『ノーサンガー寺院を』讀め。是はヂッケンスとプリニーを合せたほどの價值がある。而も一小女の作である。彼はまだ二十六歳と超えなないのである。驚いた物だ』と書いて居る。又ジー、エチ、レウエス氏は余はウエバリー小説叢書の一よりも『傲慢と僻見』を書きたいものと思ふと言つて居る。佛の歴史家キゾー氏は英國の小説を、別して婦人の手に成つたのを讀むことの好きな人であるが此世紀の初斯の女流作家（オーステンは其の尤なるものなり）に就て、斯う言つて居る、『彼等の作は其の上品なものと普及なものとで一派——大亞典時代の劇詩家の一群に髣髴たる一派を成して居る』。ゼラジ、エリオットは、オーステン女史は『最も完き名人を意味して謂ふ技術家の中、最も大なる技術家である』と稱揚して居る。オーステンを非とするのは、佛のマダム、デ、スタエルと、シャイロット、ブロンテである。マダム、デ、スタエルは、オーステンは俗だといつて居る。是れは佛語で平凡を意味するのである。恐らくはオーステンほど俗を脱れた作家はあるまい。又シャイロット、ブロンテはオーステン嬢は詩的想像——日常生活の散文を詩化すべき感情の高潮を缺いてると謂つてをる。此兩女史の作風は、根本的に相違して居るから、ブロンテ女史の様な想像家作には、オーステン女史の價値の認められぬのも當然である。彼は今名譽の中心となつた、モーレイ伯爵夫人から招戴状を受けた。猶ほ其よりも價値あるのは、彼の小説が彼の有名な印度太守ウオーレン、ヘスチング氏（シヤウマン）の稱讚を博したといふ通知であつた。彼は其の製作の反響が是くも高きに拘らず些も其に醉されなかつた。女獅子とも爲されなんだ。勿論彼は倫敦には往つた。けれど理由は其兄弟ハリーの病氣見舞の爲なんて、文學社會に立ち交はる

術家である』と稱揚して居る。オーステンを非とするのは、佛のマダム、デ、スタエルと、シャイロット、ブロンテである。マダム、デ、スタエルは、オーステンは俗だといつて居る。是れは佛語で平凡を意味するのである。恐らくはオーステンほど俗を脱れた作家はあるまい。又シャイロット、ブロンテはオーステン嬢は詩的想像——日常生活の散文を詩化すべき感情の高潮を缺いてると謂つてをる。此兩女史の作風は、根本的に相違して居るから、ブロンテ女史の様な想像家作には、オーステン女史の價値の認められぬのも當然である。彼は今名譽の中心となつた、モーレイ伯爵夫人から招戴状を受けた。猶ほ其よりも價値あるのは、彼の小説が彼の有名な印度太守ウオーレン、ヘスチング氏（シヤウマン）の稱讚を博したといふ通知であつた。彼は其の製作の反響が是くも高きに拘らず些も其に醉されなかつた。女獅子とも爲されなんだ。勿論彼は倫敦には往つた。けれど理由は其兄弟ハリーの病氣見舞の爲なんて、文學社會に立ち交はる

爲でもなく、文學社會に知己を得る爲でもなかつた。彼は一切然る業を避けて爲なかつたのである。

然れど彼は意外な邊から、意外な尊敬を受けたのである。其れは彼の兄弟が攝政親皇殿下の侍醫の一人と親しいので、侍醫からして親皇殿下が彼の小説を愛讀したまふ事を聞いて、彼に告げた。やがて殿下はオーステン女史が倫敦に來て居ることを知られたので、其のカルトン圖書館長クラーク氏に命じて、彼を音問せしめたまふた。クラーク氏は女史をカルトン館に引いて、其壯麗を示した後で、是から出来る小説もあらば、殿下へ獻納する光榮が與へられて居ることを告げたので、彼は『エムマ』を獻納した。

オーステン家には唯一脚の安樂椅子がある。其が休息室に備へてある。ゼーンは之を他に讓つていかなる疲勞の際にも之を用ひた事はない。七十になる彼の母がをり／＼之に横はるのである。ゼーンは母の不在中でも、決して之を用ひ

ない。寧ろ二三の椅子を取り合はせて、臥床を製へて其上に臥して満足して居る。理由はもし自分が母の不在に乗じて安樂椅子を用ひたら、母が歸つて其と知つて、以來は勝手に其を用ひまいかといふ懸念からである。何と優しい孝行な心がけてはあるまいか。斯かる事からでもあらう。彼の健康が大分損じた。

(千八百十六年) 彼は此時『勸告』を書いて居たが、病のために些も其の勞力を減じなんだ。彼は自から精力一杯を引絞つて、其作に究極の完全を與へた。即ち彼は一度書き了つた其結末を、面白からねつて、抹殺して書き改したのである。

彼の病が痊へんで、姉カッサンドルに伴はられてウキンチスターに轉地療養に往つたが、遂に此地で簀を易へて、此地の寺院に葬むられた。其の圓かな氣輕な氣質は、終まで渝らないで、枕邊に侍る一人が、何か欲しい物があつたらといふと其答は『死の外何も』であつた。

彼の體軀は高くて纖細で、其の足歩は輕くて牢く、全體は健康と愛嬌とを發表して居る。色濃き面、圓滿な頬、小き口、形好き鼻、光ある榛色の目、其の顔に接して縮をなした鳶色の髮毛、是れが彼の最も親しい親戚の一人が描いた肖像畫である。少し偏頗な觀察家に言はせると、頬の圓滿が圓滿過るといふ評である。此の女史にも美貌に伴ふところの艶福の無いではなかつた。換言すれば彼は一紳士の申込を受けたのである。其紳士は品性あり、位置あり、好き親戚ある男子であつた。しかし彼は之を辭した、理由は分らないが、其の紳士の精神が彼の情に觸るゝの力を缺いて居たことだけは確實である。又姉カッサンドルと共に或る海邊で年若き一紳士と知り合つた、其の紳士は容貌といひ、心情といひ、風俗といひ、姉をして此人ならば必と妹の心を獲るに相違ないと思はせたほどであつた。別るゝ際に其紳士は不日の再會を約して別れた。然し其紳士は別るゝ間もなく死んだので、此の美しき傳奇小説が、惜むべし中途で斷

絶したのである。

(三十八年十月「婦人畫報」)

ナルツナルスの詩神ドロテア嬢

第一セキスピア、第二ミルトン、第三ナルツナルス」と、是れ英國人が其産み出せる詩人に就て誇り道ふところの語なり。
ナルツナルスは英國の文豪中、唯一人の天然詩人なり。大凡天然に對して、其の外貌の美を詠じ、其の外貌の能力を頌するもの其數何ぞ限あらん。彼のトムソンの四時の賦の如き、實に英國文學中、有數の珍となすべきものなり。ナルツナルスは獨り此等と其撰と異にす。彼は天然に於て固より其外貌を見る。然れども彼の看るところ此に止まらざるなり。彼の深刻なる眼睛は、天然の外貌を徹して直ちに其背後に隠れたる神靈を射る。是に於てナルツナルスの詩、唯空しき美術品たるに止まらず、人生の以て安心立命する所以の道、亦此の中に

存す、是れ他の天然詩人に無き所、彼が英國文豪中唯一の天然詩人と謂はるゝ所以なり。此れ他なし英國人の天然に對する健全にして敬虔なる特性は、彼に由りて發揮せられて復た遺憾なればなり。

是の如きはアルツアルスの英國詩界に於ける位置なり。是の如きはアルツアルスの天然に對する使命なり。然して能く一個の青年の井ルリヤム、アルツアルスをして、此の偉大なる天然詩人たらしめたるものは誰ぞ。即ち謂はゆるアルツアルスの詩神とは誰ぞ。其女弟ドロセア是なり。

聖書に曰く、『人其友の爲に生名を捐つ、是より大なる愛はなし』と。ドロセアの其の兄アルツアルスに於ける、頗ぶる之に近きものあり。夫れ愛情の美人に於ける、猶ほ花苑の馨香を聞くが如く、結婚の美の婦人に於ける、猶ほ房中の生密を嘗むるが如し。世間の婦女子の翾々として之に従ふこと、猶ほ終日花間を飛揚して倦むことを知らざる蝴蝶の如き固より宜なり。獨りドロセアは

盡く此等の望を擲ち去りて、其兄の爲に其生涯を獻じ、其の耳目となり其の伴侶となり、以て其の最大傑作なる『永劫を模する短歌』、『チンテルン寺觀の邊にて屬れる數句』、『天然の感化力』、『清泉』等の諸篇を賛け成せり。世間の婦女子が、服装の美を衒ひ、交際社會の名聞を競ふこと、猶ほ蝴蝶の其の翹翼に於けるが如く、禽獸の羽毛に於けるが如き間に、彼女は其詩一條の靴の紐だも估ふ能はざるアルツアルスの貧窶を分かち、質素の生涯に甘じて死ねり。此の如き獻身豈に世に多く見る所ならんや。

井ルリヤム、アルツアルスは、カンバールランドなるコツカーモイスの人、父は代言人にして又ロンスデイル伯爵の土地支配人なりけるジョン、アルツアルスにして、井ルリヤムは其の第二子なり、一千七百七十年生る。女弟ドロセアは二十個月後れて生れたり。故に此の二人は、獨り兄妹といふのみならず。又恰當なる遊び敵なりしなり。此地固より天然の美を以て著はれたる地にはあらざり

き。然れども鳥雀の人家の軒に巢へる、蝴蝶の田園の間に舞へる、蜜蜂の野花を尋ねて唸り飛べる、雲雀の高く天空に歌へる、郭公の目には觸れず、流聲を爲して過ぎゆける、大凡英國の田家にて見得べきものは、皆同じく之を茲に有しき。彼のヲルツヲルス家の二星は、如何に提携し、同伴し、追隨して以て此天然と戯れしや。如何に其の軒の雀を弄びしや、如何に其の田園の蝴蝶を追ひしや、如何に其の天空の雲雀を聴きしや、如何に其の郭公の流聲を訝り見しや、之を看んと欲せば彼の『蝴蝶へ』又『雀の巢』を一讀せよ。

『蝴蝶へ』

吾曹の兒戲の中に、わが妹エメライン我と同じく蝴蝶を追ひし時なる其時よ、嗚呼日は如何に楽しく樂しかりしか、當の獵師なりし我は獲物の上に馳せかゝり、飛かけりて、棘より叢へと追ひかけつ。されど彼女（神彼女を愛せんことを）は其の翅より白粉を散らさんことを恐れたり。

『雀の巢』

彼女は之を見て、之を恐るゝやう見え、願ひながらも之に近づくことを怖れたり。彼女の衷に、かばかりの情ありき。當時小き囀婆として男子の中にありながら。後年の我が賜（ドロセア）、我が童たりし時も我と伴なりき。彼女我に目を與へつ、彼女我に耳を與へつ、遜りたる憂慮、柔しき恐懼を與へ、甘き涙の泉源なる愛情を與へつ。

ヲルツヲルスは茲に女弟ドロセアが如何に其の詩神たりしかを隠すことなく言あらはせり。

此の兄妹が樂しき兒戲の時間を、其の郷里に盡したるは、唯僅かに數年なりき。然れども彼等二人の記憶中の黄金時代、主なるインスピレーションは、實に此數年間なりき。

一千七百七十八年、母歿しければ、兄妹は各分たれ、井ルリヤムは學校に送

られ、ドロセアは外戚の祖父母の家に遣られたり。尋で一千七百八十七年其父の死せしに由りて、ユルツヤルスは伯父リチャイトの家に、ドロセアは他の親戚の家に收められ、其時間を半はフリフハックス、半は其母の伯父井ンドソルの牧師、博士クックソンの家に費しき。是を以て彼等兄妹の相會ふの日愈稀なりき。然も交互の同情は、少しも之がために冷ゆることなく、反りて相會ふの日愈稀なるほど、相會ふ日の歡愈熱きを見るのみ。

ドロセアが彼に對する獻身の初は、彼が佛國革命の爲に絶望したる際なりき。大凡寛大なる青年が當時皆爲し、如く、ユルツヤルスも佛國革命に對して熱き同情を注ぎたりき。謂へらく暴虐、殘酷、惡逆は皆世界の全面より一掃せられ、公義、慈悲、愛心など之に代りて人間を理むべしと。圖らざりき此の高尙なる待望は辱を受け、革命が最初に點じたる靈火は、杵を漂はす流血に消され、革命其物は變じて殺戮事業となり了らんとは。之を見たるユルツヤルスは、公義、

正善に對する確信を根底より覆へされ、一步一步闇黒なる懷疑の淵に陥らんとせり。是時ドロセア全幅の精神を以て之に當り、其の堅韌なる信仰を以て、彼が滅びんとする魂を懷疑の淵より曳き上げたり。是に於て兄妹各初めて相待たざるべからざるを感悟せり。彼等が同栖の心を定めたるは此時に在りといふ。

ユルツヤルス二十五歳、ケムブリツ大學を卒へ、大陸旅行を卒へて歸り來れり。今や何等かの職業を執りて、自から生活せざるべからず、曰く代人たるべし、曰く醫者たるべしと、是れ伯父叔父の聲なりき。彼は盡く其聲を排して、自から詩人とならんとす、諸父親戚等は之に對して皆齊しく顔を背けたり。獨女弟ドロセア之を賛せり。蓋は彼女は夙にユルツヤルスに有る所を認め、彼が詩人たるべきを信ぜしのみならず、元より其の詩人たることを知りし故なり。獨り其兄を識りたるのみならず、又頗ぶる己を識り、己に有る所のものを認めた

り、彼女謂へらく、其の己に有る所を以て、兄に貢献して、以て兄に有る所のものに加ふるときは、優に天下に當るに足ると。

彼女の補助を得たる彼は、今や詩人として天下に立ちたり。瑣細なりし彼女の資産は、此頃遺産の分配を受くるに由りて加はり、彼等をして一小新居を構ふるを得しめぬ。是に於て彼はドルセット州なるレイスダウンの勝區を擇みて、茲に一小新居を構へて、茲に作詩の業に手を着けたり。而も此の新しき詩人の生活の貧窶なる、非常の節儉を必要とせしかば、ドロセアは此の貧窶なる家政の局に當り、親ら掃除、料理、製造、修繕等の勞に服したり。彼女は賤役を取ることを恥辱とする、世間の婦女子の類に非ざりし故なり。彼女が厨房の事に従ふ間に、詩人は出て、菜園の事に勉めつ。斯くて掘上と料理と畢れば、二人對座して古人の詩集を誦み、或は同伴して其居を遶るところの天地の美觀の間に逍遙せり。

レイスダウンに亞ぎて、彼等の寓居となりしものは、ソマセットシイヤなるアルフォツステンなりき（一千七百九十七年）。此地に於て彼等は毎々コレリッチ、ラム等當世の名家の訪問を受けたり。コレリッチの名作『老舟夫』は概して此地に於て屬せられ、之を贊助し獎勵したるものは實にアルツアルスとドロセアなりき。

一千七百九十九年アルツアルスはエストモアランドの風光明媚なる湖國に住居を定めたり。最初彼等は一の小屋に住ひ、ドロセアは茲に半は慈善の爲に雇使せる羸弱なる一老婢と共に一家を経営したり。後グラスミールのライダル山に遷り住めり。

アルツアルス既に其家を定めしかば、茲に其従妹メリーハッチンソンを妻とし娶れり。ドロセアの美なる特性の流露は、此の新婦に向ひて表はれたる愛の歡迎に如くものなかりき。彼女の愛には嫉妬の刺なく、彼女の愛は、獨其兄の幸

福を加ふるを喜ぶばかり完全なりき。新婦も亦此の如き良人と、此の如き義妹に適ふ女性なりしかば、一家庭の生活は初より能く圓滿なる調和を保ち、ツルツルスの兒女は、即ちドロセアの兒女にして、ドロセアは嫂メリーと好みて慈母の務を分てりき。然も又同時に詩人の同伴者たりしことは依然たりき。

『吾妹へ』

際しものどかなる四月の朔、一刻は一刻よりも楽しく、知更鳥はわが宿の外に、高く立ちたる落葉松より呼び歌ふ。

此日や空に祝福あり、其祝福よ、幹露はなる樹木や、膚露はなる山巒や、緑の野邊の叢に、快樂の感を與ふべく見ゆ。

吾妹よ(これ吾願なり)朝饌をすましたる今、朝の業を抛ち去り、疾く出たりて日影を浴びよ。

今や唯一刻の與ふるところ、五十年の推考に優る。吾曹の心一瞬ごとに節季の靈に酔んとす。

さればいざ吾妹よ、願ふらくは速かに爾の山分衣を着て來れ、書籍を携ふるなかれ、蓋はこの一日吾曹は閑散に任すべければ。

マシユールノルド曰く、大凡ツルツルスの傑作は、一千七百九十八年より一千八百〇八年の間なる十年間に成りたりと。此間ツルツルスの主なる伴侶は、コレリツチ、チャールス、ラム、メリー、ラム、及び女弟ドロセアなりき。

此のアルツアルスの傑作時代を通じて、ドロセアは己を傾けて兄に仕へ、其の家庭の賤役に服し、其の兒女覆育の憂慮を分かち、同時に文學上の同伴者にして、又批評家なりき。又常に喜んで彼の長途の山行に追隨したり。彼は彼女の體軀の強健を喜び、彼に擬したる詩句の中に、彼女を「牧童の如く健かなり」と詠じぬ。「牧童の如く健かなり」、是れ能く天然詩人の詩神たる所以なり。

一千八百三十二年アルツアルス六十二、ドロセアも亦六十、而して積年の長途の歩行の結果は、甚だしくドロセアの健康を害したり。コレリツヂ、ドロセア、同時に病に罹られる時、アルツアルス記して曰く、「彼及び愛する吾妹の二人は、我が知力の最も負ふところある者、彼等は今等しき足歩を以て、疾病の途に由りて、我は墓に面ふと言はじ、反りて我は信ず、幸福なる永劫に面ひて進行す」と。

ドロセアは一たび回復して、アルツアルスの死に後るゝこと五年、一千八百五

十五年、此の詩神の靈亦詩人を追ひて天に歸り、其遺骸はグラスミヤ教會の墓地に、詩人と並びて葬られたり。(三十八年十二月「婦人畫報」)

奪はれたる青年

(一)

道灌山の懸崖續き、田端停車場の阪の上に、新に建てた貸家の一は一年前轉居して來た、四十許の紳士がある。門札は酒田雄三、有名な議論杉の彼方、中里あたり設立された神學校の先生である、家族は主人と細君と六歳許の男の子三人限りて、極々静かな家庭である。此の家庭に數日前一人の書生が加はつたのは此先生の從兄弟である佐野幸一といふ第一高等學校の生徒で、避暑中歸省してあつたのが、今度再び上京して、先生の宅に滞在しつゝ、開校を待つてゐるのである。

東京では日露の戦局を結ぶところの、無償金の和議を非として、全都の市民が反対の意見を揚ぐべく、去る六日々比谷公園に召集された國民大會が、解散の運命に遭遇した爲、其の瓦解が我は國民新聞、内相官邸の打毀となり、各區警察署交番所の焼撃となり、其餘波は罪もない電車や基督教會堂の焼撃となり、輦轂の下、全て無政府の状態、警察は無能なので、遂に東京衛戍總督から軍隊を繰出して、以て秩序を維持するの已むを得ざるに至つたのである。而も暴民の暴舉熱は昨今の殘暑同様、幾日経つても中々冷めさうもないので満都の人情恂然である。

而し此處は田舎で、毫も其様な心配はない、一向に長閑である。九月十日、日曜日、先生は學校の朝の禮拜を済して歸宅し、午餐を了つた後、八州の平野を見晴した、風通しの好い奥坐敷の椽側に、寢臺を持出して、寢ながら、今日の新聞を讀んでゐる。眞下は田端停車場で、ふうふう、しゅうしゅう、

う、ひゆる、ひゆる、ごうごう、不斷囂しく鳴つてゐる。

先生疾うに其に慣れて一向に平氣なものだ。何時か讀み疲れたと見え新聞を手から落して睡つて居る。天國でも夢見てるだらう。人生の清福は是である、外目には見えて居る、内實は何様であるか。

突如無遠慮な足音に驚いた先生がはと蹶起きた。

『佐野君か、何様だね少しは騒ぎは収まつたかね。其椅子に懸けたまへ、いや既う醒めたよ。』

『収まらないですな、晝は隠れて居て夜暴民が襲來するさうです。僕、昨夜是非歸らうと思ひましたけれど貴方、三時過ると既う電車がないうで、所爲なしに友達の宿に泊りましたんです。』

『君、國民新聞の前を通つて見なかつたかね。』

『通つて見ました故ツと。所が貴方巡查が一行に張番してゐて通さないですな』

あ。誰も通さなひです。是非外の方を廻つて往け、國民新聞社に用があるなら、手紙で言へ、然うでなきあ後日にしろつて。で貴方所爲なしに別段用のあるてもないから、外の方へ回りましたです。何でも其の夜、暴民が襲來するんださうで、來といへば陸軍が繰出す事に爲つてさうです。お互に御苦勞さまですなあ。

『暴徒が昨夜押寄せたかしらん。』

『さあ何の話も聞ませんから來なかつたでせう。所が今朝新聞配達が國民新聞を有てゐたんで、暴漢等に打毀れて重傷を負ふたさうです、本郷四丁目。』

『國民新聞相變らず出してるのだねえ。』

『左様でせうよ。』

『一昨日の朝配達が國民新聞が最う出ないといふから、代りに毎日新聞を取つてる。』

『然うですか、新聞配達も、一枚の國民新聞と一命との引替ぢあ耐らないでせうからはつはつは。』

『だが國民新聞は兎に角豪いよ、無償金の和議を持して、其の持論に殉ずる勇氣を見るとさ。斯様いふ時には是非誰か犠牲になるものが無くちやならんからねえ。』

『へえ。』

『地方でも無償金の講和を怒てるかな。』

『祝勝の聲がはつたり止んで火の消えたやうですさ、はつはつは。』

『道理だねえ。だが償金を取る爲に戦争を繼續した所で。今日さへ出さない露西亞が、是から後の戦費だけでも出せば可いがねえ。』

『危いもんですな。』

『すると是から以後戦争を繼續して無数の生命を犠牲にするだけが全損といふ』

ものだ。東洋の平和は克服してゐるし、此上戦ふのは償金を取る爲だ。日本國民を人道の扶植者と稱賛した列國の前に、今更償金の爲に戦へようか、何様だらうか。』

『然うですな。今日の東京朝日新聞にも其様な様な山縣參謀長の意見が出てゐました。尤も再戦の名目の事などはなかつたてすが。』

『これは僕だけの議論かも知れんが、日本の軍隊如何に忠勇武烈だつて、償金を取る爲に戦ふ元氣はなからうと思ふ。』

『名論でせうはつはつは。』

『可笑いかね。』

『いや實際です。』

此時玄關に郵便の聲聞え、間もなく細君一封の書状を持ち來り、其の裏面を訝しげに眺めつゝ、

『誰からでせう、名が無いですが。』

主人は其を受け取つて、

『何だ本郷區千駄木町二百九竹井下宿屋方より。』

と小首を傾けつゝ、開封して見ると拙ない言文で書いた左の通の書面である。

拜啓仕 候。

さて餘の儀にはこれ無候へ共樺島清事に就き御願上度緊急大

事件出來致しました其は去七日午後七時頃彼樺島なる者拙宅へ來り今日の糊

口に差支へ候 故何卒身分周旋頼むとの事故知人として黙止しがたく旅行案

内社へ周旋致しました處彼夫より電車焼打を見物せんものと拙者と同伴いた

し見物後上野公園へ行きました時は丁度午後十二時故最早歸宅なしがたくとて

本郷署方面へ暴徒の有様等見物せんと三橋迄行く途中彼長き箱の如き物を拾

ひました故届出 旁警察へ行きました所巡查抜劍して群集の迷惑ふ際なれば拙

者樺島に向ひ届出は明日にせよ危ふき場合大切な身を傷くべからずと歸宅を

進めましたら公明正大の潔白の身なれば何の身に嫌疑あらんや等と拾ひし者を届け置んやと申しました若もと思ひ拙者群集と共に帰宅しました時は是れ八日午前三時頃……

猶ほ翌日樺島を其の下宿に訪ねると、同人は本郷警察署へ拘留せられて居るといふので、同署に出頭して其の無罪を辨せんとしても、書生とて相手にせんから、如何か至急先生の救済を乞ふといつてある。其書面の差出人は雪峯といふ匿名を用ひてをる。

細君は顔色變へて、

『樺島が警察署へ拘留になつて居て居るで、樺島が。』

『然らよ。』

『何を爲たんですつて。』

『何を爲たんか此も要領を得ない。』と、手紙を再び繰り返して、

帰宅を勧めましたら公明正大潔白の身に危険あらんや等と拾ひし者を届け置かんやと申しましたが……是て見ると拾物を届け出なかつたといふらしい、其なら何も然ら面倒な事はなからう。』

『兎に角貴方は直ぐと警察署にいらつしつて下さいな。人の物でも拾つて取る様な人間ぢやない、必と何かの間違でせうから、可愛相にどんな憂目を見てゐるか。』

『誰ですな樺島だ。』是は佐野の問である。細君答へて、

『去年あなたが學校に入つた後に、國から來た青年があつたでせう。あの男さ。極々の正直者人の物を取るやうな其様な人間ぢやありません。』

『どうも人間といふものは、貧すり鈍するで、彼も病氣あげてあるから、或は窮して其様なさもしい心になつたかも知れん。然らとすれば實に不憫

だ。

『だから此間いつた通り病院から出たといつて来た當時、貴方が一遍尋ねなくちやならなかつたんですの。』

『然うだ然うだ。』

主人は細君が持ち出した着替を手早く着て、反古箱の中から證據品となるべき樺島が書面を有るだけ擇り出し、其を中形の新約全書に挿み、風呂敷に包んで脇に挟み蒼皇と玄關に下り細君を顧みて、

『ちや一走り行て来る。』

と大急で出て行つた。

(二)

樺島清とは何物かといふと生は九州石炭の出る福岡縣の者で、主人とは同國の好といふので、或人の紹介を以て昨年十月此家を頼りて上京した者である。

當時主人は或る事情があつたので寧ろ樺島を冷遇した、彼を哀れみ痛はつたのは此家の細君貞子であつた。元來この貞子といふのは主人には後妻なんて先生よりも十六七歳も壯く二十四五の同情盛り加ふるに人並勝れた多血質であるので、ひたと樺島が上を思ひやり折角宅を頼りに上京したもので恤はれなきあ、何所に頼るもんですかと、先生に對つて彼を庇つた。東京の十月は既に薄ら寒いのに、夏服着た限り一領の單も袷も携帯して来て居ないのと愈哀れが、先生の古着を出して着替さすやら。下駄、足駄を當がふやら、襦袢や靴下を洗濯してやるやら、兄弟でもあるかの様に行届いて世話してやるので、樺島はほろほろと涙をこぼし、知らぬ他郷で斯様な親切に出會ふとは思はなかつたので、『奥様もし、貴方の御恩は死んでも忘れは致しません。』と言つて居た、少年には少し感激過る方であるが、其の感激が又非常に細君の氣に入つてゐた。此家に居て職業穿鑿に毎日下谷本郷の方面を駈廻つて居たが、十一日目に上野

廣小路の普及社といふ新聞配達舎に主人の保證で入つたが、彼は其の舊恩を少しも忘れない、殆ど毎月の様に端書を出して主人の安否を問ひ、奥様に宜しくと云ふのであつた。酒田夫婦も此の輕薄な時節に珍らしい律義者、行末頼もしい男だと喜んで居た、唯だ夫婦が交る交る基督教を説ても、身に染んで聞かなかつた一事は、夫婦もろとも心外に思つて居た。而し人が美しいからつて安心して世間に出した。やがて今年の四月から鐵道學校に通學するやうになつたので、酒田夫婦は益彼を愛した。其後不斷勉學の報知を爲して居たが九月二日突然變つた端書を越した。

……小生不幸にして腦貧血病に罹り八月廿三日より東京腦病院へ入院致し居候處今日退院致候間先は御安心被下度候、且表面の處に轉宅寄宿罷在候……
表書には

本郷區駒込千駄木町二〇九
武井方 樺島 清

貞子は此手紙を見て主人に向ひ、
『此様な大病をしたんなら何様な様子で居るものやら一度尋ねて下さるが本當だけど。』

『然うだ然うだ。』
と先生返事ばかりであつた。細君の言を聞流したのではないが、日日の調物に追はるゝのでつい訪ふ事を果さなかつた。往に細君の小言を喰つたので是故である。

『だから此間言つたとほり一遍貴方が尋ねなくちやならなかつたんですの』
と。此事もあるのであるから、先生寒暖計九十度といふ熱も構はず、是非樺島を救ひ出すつて駆出したのであつた。

先生が出て行つた後、三十分も経つかと思ふと玄關に音なふ者がある、細君が出て見ると、小綺麗な浴衣に黒めれんすのしこきを締めた、色の黒い、骨の逞ましい、而し正直らしい顔つき、多分苦學生の一人らしい男が立つて居た。

『もし、酒田先生は此方でござりますか。』

『はい然うです、貴方何方ですか。』

『僕 は小川淺と申しまして樺島君の友人でござります。』

『あゝ然うですか、樺島の友達でいらつしやいますか。まあお上んなさい、さあ、まあ、此ちらに。』

『いやもう此所で御免蒙ります。實は樺島君の事で王子まで参りました歸路でござりますが……實は同人儀に就まして御願の書面を下宿から差上げた筈で御座りますが、届きましてせうか、如何で御座りましてせうか。』

『はい先刻参りました。』

『先生は御出下さりましたらうか、如何でござりましてせうか。』

『書面を見ますと直ぐに證據書類になりさうな、彼が越した端書を爬集めて急いで出て参りました。』

『然様で御座りますか、御蔭様で樺島君も助かりますで御座りませう、有難う御座ります彼様な美しい人ですから、何様なりとして助けてあげたいと思ひますもんで、飛んだ御迷惑を掛けまして御座います。』

『何程致しまして 妾の方からこそ貴方がたに御願申さねばなりません。』

『何様仕りまして。』

『全體樺島が何を爲たんで御座いますか、御書面では何か長い箱の様な物を拾つたさうですが、然うですか。』

『然様です……實の處 僕も一所に警察署に引かましたですが、樺島君がその、小い短刀を持って居ましたんで。』

『え短刀!』

『然様でござります。で、僕の方は直ぐと放免になりましたけれど、彼方は遂に拘留になりました。』

『おや然様ですか、而して其の短刀で何様か致したんですか。』

『いや別に何様と申して……何様も致しは致しませんでしたけれど、時節柄で御座りますんで。』

『其は困つた事をしましたねえ。』と、嘆息ながらの獨語である。

『いや既う早大丈夫で御座ります、此方の先生に往らつやつで戴いて、樺島君の公明正大な事を證明して戴きましたら直ぐに放免になるに極つて居ります僕も其れ伺ひまして大に安心致しました。是から直ぐと下宿へ歸つて樺島君を待つことに致しませうです。是は誠に御邪魔仕りました、然様なら御免下され、先生に宜しく御傳へ下さりまし。』

『まあ宜しいでせう、これは御茶も上げませんで。』

書生が歸つた後に、細君は猶ほ玄關に座住まつて、頬杖を突いて、

『何様したのだらう樺島は。』

と、獨り考へこんで居るところに、長男輝男外から突如に、

『お母さん。』

大聲に戸を開けた。

『を、叱驚した。』

『今のは誰あれお母さん。』

『あれは餘所の兄さんよ。』

『何所の。』

『樺島さんのお友達。』

『樺島さんのお友達? 樺島さんのお友達何爲に來たの。』

「煩さいねえ此の子は。」

「樺島さんのお友達何爲に來たのよう。」

「樺島さんの事て來たのよう。」

「樺島さん何様したの。」

「樺島さんがねえ、短刀を有つて居たつてよ。」

「その短刀で何様したの。」

「くどく聞くのねえ輝男さんは、いづれ人でも切つたのだらうよ。」

「誰を露西亞の兵隊を。」

「然う然う。」

「豪いねえ樺島さんは、樺島さん萬歳。」と拍手喝采する。

「ハ、ハ、ハ、奥では佐野、玄關では細君が大笑ひ、

「何様な心持でせうねえ、復一度子供に返つて見たいもんですわ。」

「お母さん、お母さんてばよう。」

「何だよう。」

「笑つてばかり居ちあ可けんぢやないか。」

「然うかよ、何かよ。」

「水が飲たい、飲でも可いの。」

「可けないのよ。」

「可けなかないようだ。」

「何だ此の和郎は、何日其様な悪口を覺えたい、こらあ、こらあ。」と小兒を懷しめて脇腹をくすぐる。小兒は母の膝に踏反り返つて、

「あは、は、は、御免よう御母さんは、は、は、は。」

「えお母さん飲でも可いの。」

「少しお飲み。」

「あつ。」と躍つて臺所に駆けこむて、ばけつの水を批拘ながらがぶがぶ飲むて
忽ち咽せてる。

「ごほ、ごほ、ごほ。」

「何だい輝男さん、お母さん少しお飲みと曰たんぢやないか。」

「あ、既う可いよ、お母さん外に行くよ。」と遁るが如く駆け出した。

「腹一ぱい飲んで行たよこの子は、始末に可けない。」と細君は獨りて吹出して
奥坐敷に往つた。佐野は顔で迎へながら、

「何様ですな、其の樺島さんとかは短刀持つてゐた様な話ですな。」

「はあ。」

「其りあ些と行つたかも知れまんよ。」

「妾も其を心配してるの。」

「弱いものは斯様いふ時にあ多少騒ぎに蒙れますからなあ。」

「然うでじもありまさあねえ、註つても國の爲だから妾感心と思ひますの。で
ももし苦學生の病氣あがりて、金は無し、學校は退くし、自棄になつて騒いだ
んぢやないかと、其を心配するんですの。」

「何とも曰へませんなあ。」

「若しも然様だと實に不憫でさあねえ。先づ第一親たちが可愛想で、大事な子
一人失ふんだもの。」と、嘆息吐つて「青年ほど當にならんもなあないですのね
え。」

「へえ。」

細君は考へこむ、佐野は新聞を讀み初むる、乍ちがらつと戸が開く音。

「あや。歸つたんかしら。」と細君起つて出て見ると果して然様だ。

「今歸つた、あ、暑い。」

「何様でした樺島は無事に放免になりましたか。」

『だめだ、既も疾うに市ヶ谷監獄署に廻されて了つて居たんだ。』
『へえ。』と細君はがっかりした。

(三)

往に酒田はわが家の門を駈け出で、動坂までは全て夢中で急いだ。此所で一臺の俵を得て其れに飛乗り行々考へたものである。今日は正に日曜日善を爲すべき日である。是から往て樺島を拯ふのは神が今日我に善工を命じたまふのだ。有がたい事だ、樺島だつても此れで十分懲りたらうから、今日こそ心底から悔改るであらう、先づ聖旨を候ふべしと懐中の新約全書を取り出し、黙禱して開いて見ると斯様言ふ本文に出會つた。

『エスの名は其名を信ずるに由りて汝曹が見るところ識るところの此人を健勁せり。』
然うだ、然うだ、エスの名を以て彼を救ふべきである。是から往つて彼を救つ

て彼が未だ聖書を有たんのなら、此の聖書を彼に與よう。此の聖書に持合せの金を添へて斯う日はう。是れは我が與ふるのではない、エスが卿に下さるのだつて、然様日はう。我は徒だ無益の僕爲すべき事を爲すのであつて救ふものはエスである。斯様思ふと假にも人を救はふとする自身が、先づ有りがたさ尊とさに、感涙禁あへずであつた。同時に又恩を謝して己が足下に泣伏す樺島の容が既う目に浮んで居るのである。

本郷警察署へ着いた。堂々たる自然石の建物である。署員抜劔防禦の功で、府下の警察署中唯此所ばかりは安全である。内に入つて更に左側の受附所に入ると、三十許の背のすらりとした面の瘦た、色の冷た、身分のある婦人と、二十許の同伴と見ゆる婦人と、待つ所あるもの、如く佇立て居て、際々駒下駄を鳴して退窟を慰めて居る。酒田は自分の所用の容易さを豫期して、彼婦人たちをお氣の毒だといふ面つきで遇つて、受附口に進んだ、受付口には畏い顔した

二十七八の男が見張つて居るので、之に名刺を出して樺島が事に就て、係の方に面會したいといふと、畏い聲で中に入つて待て御出なさい、今に警部が出て來ますからと、叱る様な調子で曰ふ。酒田いかさま是が警察署式の容貌言語だなどと思つた。内に入つて高架の長卓に相對した低い腰かけ、人民控所とていひさうなのに腰かけて、十分間も待たと思ふと、髪を五分に刈つた白の夏服を着た、顔の赫い、皆の尖つた、顛顛の突起した、頬の殺けた、見るから餓虎的骨相した四十四五の人物が奥から出て來て、眞向の椅子に坐を取つた。是だなどと思つて居ると、案の如く受附が其人に名刺を渡して樺島の事に就て、彼の方が逢たいと、顔で知らすと、其の人は一遍名刺を見た後、つくづく恐ろしい目で酒田に向つて。

『樺島に就て何の御用です。』

酒田は起つて前に進み、

『僕は樺島の知合のものです、同人が當署に御厄害になつて居るといふ通知を受けましたので、偏に眞率律義とのみ信じて居ました彼が、如何なる悪事を働いて御厄害を懸くるに至りましたものですか、其を伺ひに參つたものです。』

警部は猶ほ一層恐ろしい嘲笑の面相を呈はして、

『貴方がたは此頃都下に恐ろしい騒が起つた事を御存知ないでせうが。』

『存じて居ります。』

『樺島は其暴動を働いたんです。』

『へえり。』

餘りの意外にあつけに取られた酒田暫時は開た口が閉からなかつた。

『當人に面會が出来ませんでせうか。』

『面會？、當人は既ら此所に居らんです。』

『何處に居ますですか。』

未だ分らんかといふ顔色で、

『あれは既う疾に市ヶ谷監獄署に入つてをるです、昨検事が出張して訊問した上、監獄署に廻したんです。』

『然うですか、其ては到底救済は出来んですか。』

警部は愈嘲笑の齒を顯はし、

『然うですなあ、罪人の救済が出来れば結構ですがなあ。』

馬鹿だと言はぬばかりの嘲笑に遇つたので、酒田先生始めてはつと心づき、

『いや何様も失禮致しました。』

先生落膽して悄悄と出て去つた、二人の婦人はお氣の毒だといふ顔色で其の背影を見送つた。先生警察署を出て一息ついて獨語した。

『何だ馬鹿な、樺島が拾ひ物して届ないと云ふから、然様かと思つて来て見れあ、暴動を働いたつて、叱られて好い面の皮だ。然し彼等も斯様いふ際には人

でも叱つて其の憤慨を漏すのだらう、叱られてやるのも一の義務だ、善を爲る爲に來て、善を遂ぐる機會に遇はなかつたのは遺憾千萬だが、而し事の成否はさて置いて、我は唯だ我分を盡した事を以て満足せねばならん。猶ほ樺島が爲に盡すべき機會が來たらば、十分盡さう、今日の所、是より以上爲すべき所を知らないのである。然し樺島が暴動を働いて監獄署に入つた、何様しても信ぜられん。然し嚴正な事實である。』

『見物後上野公園へ行ました時は丁度午後十二時故、最早歸宅なしがたくとて本郷署方面へ暴徒の有様等見物せんと云々』
といふに到つて、

『なるほど茲に其兆候が見えてるなあ。而し彼の正直律義な樺島が何様變じて暴民となつたゞらう。病氣はするし、學校は退くし、金は無し、絶望だといふ

んで自暴自棄になつたんではあるまいか、萬一然様であると、既う精神の墮落であるから、救済も覺つかないが、然し旅行案内社に出て居て糊口の途に窮したんでなからうが、何様したんだらう、併し彼の事だから、別に手を下すやうな事はある筈がない何れ嫌疑でも受けたのだらう。』

彼は猶ほ至細の情實を詳にすべく、歸路千駄木の武井を訪ふて雪峰といふ匿名の男を尋ねた。際よく居合せて居たから、之に本郷警察署に往て來た事、樺島が暴舉に加つたといふ事、疾うに市ヶ谷監獄署に送られたといふ事を語り、善後策を講じた。彼が言には、『樺島君は未だ食べるものを食べないから、水分のある食物を差入れてくれと、昨日尋ねた時に申ましたから、其では早速差入物に着手しませう。』といふので、酒田も五拾錢銀貨を托して差入物を依頼した雪峰といふのは年齢二十四五の至極柔和な男であるが、何故か本名を明すことを避けて居る、樺島の近狀に就て彼の言ふ所は斯様である。

『樺島君は脳病院を退き出てから、武井に居ながら普及舎に通つて例の新聞配達を行つてましたが、時局の爲に少からず動かされてゐまして、大屈辱の講和とか戦勝國の戰敗的講和とか云ふことを始終口走つて居りました、僕は其頃からの交際ですが、精神は潔白だし、舉動は活潑だし、實に美しい性質ですが何しろ若年ですから、思想が定まらん處に、斯様いふ時局に成りましたものから、美しい人だけに感ずる事も強いので、遂に普及社の社長白石さんと、喧嘩をして普及社を出てしまつたんです、其の喧嘩といふのは樺島君の過激なるを咎めたらしいのです、新聞配達の分際で、政治上に容喙するものでない、殊に君の様な少年は毎日の義務を果して勉強するのが本分だと言れたんで、平生白石さんの講和主義を平生面白からず思つて居た際であつたんで、樺島君赫と怒つて少年だつて何だつて、斯様な國家の浮沈の際に黙視して居られるものか、其様な窮屈な處には、一日も居るのは厭だつて、白石さんが宥むるのも聽かず、

直ぐと僕の所に飛て来て、僕今から糊口に困るから、何所にか周旋してくれろと曰ふんで、幸僕に社に社員があつたんで、直ぐと其に充てたんで。其から以後は拙劣な書面で申上げた通なんです、定めてお分り苦かつたてせう。』と羞しさに言を結んだ、酒田は猶ほ問ひ確めたんである、

『すると全く時局に誘惑されたものと見ゆるですが、全く然様ですか知ら。』

『何様も然様としか見えないます。』

『別に自暴自棄の兆候は見えなかつたですか。』

『然様な言行は樺島君に於ては些も無いです、僕其を保證します。殊に學校も其迄は一夜も缺かさな位でしたから。』

『學校は繼續してゐましたか。』

『然うです。』

『長い箱の様な物を拾つたと貴書にあつたのは何でしたらうか。』

『讚美歌二冊に茶碗、茶碗は其て自分が飲むと曰つてました。』

『え何ですか。』

酒田少し案外といふ面つきをした。然し樺島の暴動が絶望からでないといふことと學校を繼續してゐた事を確め得たので一は大に安心し、一は大に遺憾がつたが、先づ其を土産に宅に歸つて、以上の事實を語つた。而して不在中に樺島と一緒に警察署に引かれたといふ者が來たこと、樺島が短刀を持って居た事を聞て浩嘆した。

『其では初から行る積で出かけたんだ。然様して見ると愈犯罪だ。困つたもんだなあ。』

細君も二度落膽、やがて自から慰むるかの様に、

『其でもまあ國の爲とおもつて爲たんだから、感心は感心さ。』

全體此の貞子といふ婦人は、國の爲といふと深く感激するのである。主人は其

言を承けて、

『じまあ餘り感心も爲ないけれど焼でなくて可かつた。焼だと救ふに困るけれど。』

佐野は得意氣に語を挿込んだ。

『僕の言が當りましたな。』

『はあ、だから喜んでるんです、而し何時監獄署から出るでせう。』

『其れは分らん、先づ是から検事が起訴して、裁判に懸つて、無罪となれば直ぐと放免になるが、有罪であると懲役なり、禁錮なり、相當の處分を何ヶ月か受けなければならんのさ。』

『實に可愛相ですなあ。』と涙ぐんで、『何様か所爲は無いもんでせうかねえ、あなた。』

『朋友中に善い辯護士でもあれば頼むけれど、不斷世間と交際しない吾々には

斯様いふ場合にははたと困る。吾々信者は唯神に祈るだけさ。』

『然うだ。』と今思ひ附た様に、貞子は起つて書齋に往つた、熱切なる祈禱の聲が聞えて、段々と獻款るのであつた。

同時に今田端停車場から上つたらしく、號外を觸れ賣る聲騒がしく門前を走るので、呼留めて買つて見ると『滿洲の戦報』なんて、去る六日我軍は歩兵七大隊、騎兵八小隊、砲兵四中队より成る敵の來襲を撃退して二百名の死傷を生ぜしめ、鹵獲甚だ多しといふのである、此二號活字の戦報の次に四號活字で追加した一項『辯護士會の決議』といふものがある。決議の主意は辯護士會は今回の刑事被告人中の良民と認むべき者、即ち當時一定の職業に従事せる者に對しては十分辯護の責を盡すべしと曰ふのである。主人は貞子が祈禱を畢つて密室から出て來るのを待つて此事を語つて聞かすと、貞子は赤い目に又涙を浮かめて、

『あゝ有難い、神様は祈る前から妾の心を知つてゐて下すつたんです。』
主人も佐野も、肅然として思はず坐を改めたのである。(三十八年十一月「中學世界」)

明 月

神の作つた宇宙の中で、日の恩光は恰も嚴父の其の如く、月の恩光は恰も慈母の其の如くである。日の萬物を長成するの恩は感謝するには餘りに大に過るので、人は偏に月の慈愛を感謝して居る。蓋は月の慈愛は喜ぶ者と共に喜び、悲む者と共に悲しみ、苦しめる心を慰め、傷める魂を痛はつて、同情溢るるばかりであるからである。福なるもの月を見れば愈其の身の福を覺え、禍あるもの月に向へば禍其の身に在るを忘る。あゝ月よ誰か爾の慈光を仰がぬ者があらうか。

九月十三日の晩、今宵は今年の明月に當る。行水を了つて晚餐を済すと、既う

座敷一ぱい清影が射しこむて居て、尺八の遠音がさして居る。轉ぶやうに自宅を駆け出して、觀月臺に駆け上つた。觀月臺とは此の北豊島の田舎で。觀月の名所と謂はるゝ、田端から巢鴨に走る山手鐵道の線路が、一帯の長堤の如く千里の窪田を亘る一部分である。勿論是は鐵道會社の有て、外人の漫りに侵入すべき境でないが、復線を布かるべき此の堤の上が、猶ほ單線に止まつて居るので、片側の空地が、何時か此の田舎から東京に出る捷路となつて居るので、夏は納涼、秋は觀月の名所として、都人里人此所に出て來て、同一の明月に對して、人様様の觀月を爲るのである。

既に線路上上つて見ると、月は疾く谷中の森を離れて、秋の空に唯一輪澄んで居る。上野日暮里の一帯の樹立は、淡う輝やく霧煙の背に隠れて、山かの様に見えて居る。線路の真中、煉化石を築き立てた二丈有餘の懸崖の下には、水深き野川の流に月影が耀めいてる。反對に西を顧ると、當面の西ヶ原の里の茅

舎が、歴々として指點すべくある。線路の兩端は月の光に隠れて見えないのである。

月は昇るに隨がひて光を益した、笛の音も富士前の方面から、段々此所に近づ

くらしつ。

一人否二人の浴衣伴が、既う線路の上に顯はれた。一人は鬚のある先輩、一人

は白面の書生である。此の美しい月の下で、殺風景な時局論を行りつゝ來をる。

『償金は全て取らず、取つた樺太は半分返す、是が大屈辱に非ずして何ぞださ

君。』

と先輩が息まく對して、學生は平然之に答へて居る。

『然様でせうか、然し僕は遺憾とは思ふんですが、屈辱とは思ひませんな。今

度の談判で理想的の條約を得ようとは無理ですもの貴下』

『無理？、何が故に？、其理由聞かう。』

『其の理由は甚だ明白です、其の明白な理由が聰明な新聞記者や政事家に分つ

て居らんのが、不思議で耐らんと生意氣ですが僕は然様思ふですなハ、ハ、

、。』

『其の理由を言ひたまへ、其の理由を。』

『何でもありません、今度の講和が米國の仲裁に出たんで、露西亞の求和に出た

んでないからです。』

『分つた事さ。』

『其れが分つて居るんなら政事家や新聞記者が何も初手から理想的の條約を期

待する理由がないです。畢竟其れが分つて居ないから、露西亞の求和の場會に

提出すべき、理想的要求を提出して、其れが取れないと言つて憤慨して居るで

せう。』

『だつて露西亞は戰敗國、我は戰勝國ではないか。』

「勿論でさあ。然し外交上の要件となるべきものは、單に戦敗の事實で無くつて、戦敗國の戦敗に對する感情ですものなあ。」

「其れは其様さ、だつて取れるものを取り得ないのが残念であ無いか、其を屈辱と稱ふのであるんさ。」

「失禮ですが、其は貴下の想像でせう、だから取れるものを取り得ないとも曰へると侘く、取れないから取り得ないとも曰へるでせう。」

「然様曰へ然様曰へる。だから本當に取れないものなら君、飽まで戦争を繼續して、勢力を以て取るのさ君。」

「再度の戦争で以て償金を取り得るとしても、再度の戦費だけでも出しませうか今日でさへ一錢も出さぬ露西亞が。」

「出さすのぢ。」

「何の名義で戦ふてせう。」

「然様さ無論東洋の平和の克服を名としてさ。」

「東洋の平和は今度の條約で十分克服して居るでせう。同時に國民大會が償金なき講和に反對した決議も、文明諸國に知れてるでせう。だから今更東洋の平和を名として戦ふたつても、世界が承知しないでせうあハハハ。」

「然様かも知れん。」

「若しも然様であるもんなら、日本の軍隊が如何ほど勇敢であるといつても、世界の見る前でまさか償金を取る爲に戦ふ勇氣はないでしよなあハハハ。」

「まあ君議論は止して月見ようぢやないか、何様だ君此の月は。」

「美しいすなあ。」

「唯だ美しいだけかねえ。」

「はハハハ、唯だ美しいだけですな僕の様な俗物は。貴下何様です。」

「然様だねえ僕も殆ど同感だねえ。」

忽ち巢鴨を發した汽車が、轟然大地を震動し、火の子を吹立て、二人を追ひ散らして田端に走つた。其後に祝福を受けた家族と見えて、夫妻の間に五六歳の男の子の手を引いて、中里の田圃路から出て來て堤に上つた。

『美しい月だねえ、今年の様な明月は珍らしいよ。』

『美しい明月ですことねえ。』

『美しい明月だねえ、誰か何處でか笛吹てるねえお母さん。』

『月に尺八、添物だねえ、中々巧いや。』

『安宅を吹いていますのねえ、ほら「笛に、なりたや、しのぶへーに、ふへーは、好いもの、笛はーおもひを、くちうつーし」つて、其様曰つてませう。』

『己にア何だか分らんが好い節だねえ。』

『お父さん坊にも笛買つて頂戴なあ。』

『何んだ此子も笛に蒙れたのかねえ、好し好し今に東京に往つた時買て來てやる。』

『い、ねえ、お父さんは好い子だねえお母さん。』

『は、は、は。』

家族の往た後に、書生あがりの、一人は薄く髻を立てた男二人、田端の方から線路傳ひにやつて來た。

『あ、美しい景色だ。晝見れあ何でもない處だけど、月は至る所を美化して住むのだ夜霧がバツと浮いて、上野谷中が茫然としてるところは、全て美しい夢見て居る様だね。あ、美しい、美しい景色だ。』

『なるほど美しいねえ、神韻縹渺といふ所だね。』

『暫らく見よう。』

『好し來た』

節揮つて夜霧を拂つて、淺茅生の上に蹲踞つて、諸同に仰いて月を見て居る。
 『月に對ふと種々な記憶が浮んで來るが、一つ話せる事がある、其れ僕が嘗てフ井クテの哲學を月を觀じて解いた事です。僕は全體哲學を好まんけれど、フ井クテの主觀的唯心論だけは好てね、そして其の唯心論といふのはね、心が造物者で、心外の萬有は唯其の影で、客觀された心だからだ。何だか髣髴として分つたやうな分らないやうなんで、僕躍起と模索してかゝつたね。其の又模索するところに引力があつてね、哲學の妙味とは是だと思つたが、到底模索し得ないから、愚だと思つて、抛て了つて、半年も經つて、丁度其年の中秋、然様さ今夜の様に晴れて居て、獨て月を觀て居る中に、不圖其の問題を思ひ興すと忽ち解けた。解けて見ると全て詩だね。哲學ぢあないね。彼が哲學なら哲學も尊いものだ。』
 『其の妙味を僕にも些分ちたまへ、何だか太宰の滋味の様な氣がする。』

『其の際の感會はとても口で言へるもんでない。恰も詩句を解く様なんで、解けば毀れて了のさ、だけど其の論理だけは今でも言ひ得るだ。其れは斯うよ、今僕等か月を見て美と謂つて居るけれど、其は僕等が然様曰ふので、月其物が實際美だか何だか分らないのだ。だから僕等が今月を見て居るのも、其實は月其物を見て居るではない、僕等が心で美とした月を見て居るのさ。解つたらうね。言はば僕は月を見ながら月を見ないで、唯僕が心で美ごと造つた月、即ち僕自身の心の影を見て居るのさ。』
 『だから心が造物主で、心外の萬有は心の影とか、客觀された心とか謂ふのだねえ。なるほどねえ。』
 『然様だ。そして此の思想が何れほど此世界を美化するのかが君、日月星辰、山川草木、此等の外物が外物でなく、皆吾が思想感情の所作だと思つて見たまへ、人生到處是故郷どころでなく、此の世界が全て一變して自分の畫いた畫幅と』

化して、戀しくて戀しくて耐らなくなるから。』

『旨い物を取つ捕へたねえ、聞て居てゾク／＼と血が跳るやうだね。』

『何僕だつても果してフ井クテの精神を得てるか何様だか知らない、或は是も僕が心の影かも知れん。然し僕は僕の心の影で満足する。』

『僕も哲學を研究しよう。』

『暇があつたら行つて見たまへ僕等詩人には無用だけれど偶にや面白い説もあるよ。あゝ古いことを思ひ出して、思はず下手の長談義をした、さア行かう。』
と二人同時に立あがる途端に、ほろほろと調子を齊ふる尺八の聲音、數歩の中に聞えたので驚いた。

『月下吹笛、旨く行つてるな、何時此所に來たらう。』

詩人の影の没する頃、瑯々と笛吹き出した。ハーモニカも纖弱な音いろを交へて居る。六段を合奏して居る。段々と佳境に入る。巧いもんだ。宛轉活躍、珠

玉盤上を迸しるの妙を極めて居る。堪らなくなつて曲譜を唸り出す者もある。樂隊を組んで來たのだ。野川の頭に陣取つてるらしい。

前に往つた家族が今歸つて來た、良人が先に立つて、細君が後から附いて來る。男の子は母の背に月の方向いて眠つてる、可愛い寝顔だ。

其後に天からでも降つたかの様に、年若い男と女と携へて現はれて居る。語る語る來るのである。女の語で、

『前刻から視ると大分月が清えたのねえ。』

『然うです然うです。月が美しいので何だか別世界を歩く様な氣がするのさ。』

『月が美しいばかりなの。』

『猶一美しいものがあります。』

『何あに其れは。』

『當て、御覽なさい。』

「笛?。」

「然う。」

「ぢや、貴下是から一人で笛聞て在らつしやい、妾歸るから」と、突と跳ねて手を離す。

『をやあんた何様したの怒つてるの。』

『だつて妾盛りませんものを。』

『何故? 月見に来て笛まで聞くもの、大盛でさあねえ。』

『だからあなた笛を聞いて在らつしたいと曰ふのさ、妾歸るは』と、身を翻す。

『御免なさい御免なさい。』と男、女の手を握つて引返し、

『猶一美しいのは是ですよ。』と確と女の手を握り締める。女嫣然、

『郎君妾を愛して居て。』

『分つた事を聞くと月が笑ふさうですよ。』

『然様妾嬉しいわ……斯様して月夜に笛聞ながら愛を語るのは理想なのねえ。』

『かも知れないねえ。』

『あら厭だ。妾斯様な小説を見た事があるの、或る天主教のお坊様があるの。』

其お坊様が非常に男女の結婚を諍つて、其れを罪惡と稱つてるのよ。すると或

夜月が非常に奇麗なので、廣い廣い野原に出て、一人て月觀をして居ると、何

となく心の中に是までに無い寂しみを感ずるの、だけと何が不足なのか些とも

分らなくつて、唯當もなく懐かしいのに悶へて居る時にね、ほら向うから若い

男と女と腕を組んで愛を語りつゝ、此方に來るの。お坊様其を見て、平日の頑固

とは打て替つて嘆息吐くの。自分の寂寞が獨身の寂寞である事が今分つたか

らなのよ。而して斯様曰つてるの、「斯様な美しい月夜はね、情郎情婦の住むべき世界なんて、自分の様な獨身者は陰に引こんで居るべきだ」と哀れですのね

え。今夜も天主教のお坊さんが何處からか見て居はしないのかねえ。』

『大丈夫其様な怪しいものは、何處にも居ませんよ。』

『あら怖かあなくてよ、見せたくてよ。』

『何を。』

『恚つたいよ斯様して歩くところをよ。』

『一寸聞いて御覽なさい、尺八の音じめが美しいよ咽んでますよ。あゝ美しい、一縷の怨を長く長く洩て居る。何だらう尺八の陰調に巧く合つてる曲だ。』

『郎君。尺八の事ばかり言つてるのねえ』

『あ御免なさい、さあ歸らう、遅くなるとあなたの體に障るから。』

『障らないわ、もつと歩きたいわ妾。』

『可けません。』

二人は暫く黙して居た。女はやをら月を仰て、

『御覽なさいまあ清い月ですことよ二人の愛も彼様に皎潔であつて欲しいは』
感する所あるが如く男は極めて真面目で低調で、

『煩惱の雲が直ぐ懸たがるから悲いのは、神に祈るばかりです』

尺八の幽妙の聲音の中に、二人は元來た方に引返して、間もなく光の中に消えて往つた。宛かも美しい幻影の如くであつた。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

午後十時の最終の上列車は疾うに通過した。一時間以前に、道灌山の方面に當つて、劉亮と響いて居た尺八の音もバツタリ絶えて、野邊一面蟲の鳴音が目に立つばかり聞えて居る。人影は既う一個も見えぬ、皆月を遺して家に歸つて休んだらしい。月は獨り天に残つて愈亮え、愈美なる光を放つて人間界を照して居るが、既う月見る者は無いのであらうか。

否ある。此の眞夜中に亂髪、寢衣のまゝ、雪の様の素足ながら、すたすたと線

路の上をたどり来る一個の婦人がある。やがて野川の邊まで進んで、枕木の上
 に佇立て後の方を顧みた。其の月を受けた顔を見ると凄いほど、色の白い面
 ある。而し其の落着いた態度は確と或る決心を表はして居る。彼は若し死ね積
 ではなからうか、彼はやがて枕木の上に座り、月を拜むかの様に突伏した。其
 細長い襟頭は正に線路に當つて居るのだ。彼は汽車の通過を待つのおぢやないか。
 若し其儘に眠に落たら、曉には何様な惨事が起るであらうか。十分間ほども経
 つたと思ふと、彼は突と頭を揚げた。身を起した野川の懸崖の頭邊に突立て見
 下した。彼は終列車の既う過ぎたのに心づいて、身投しようとするのぢやない
 か。懸崖下は深い淵を成して、月影が大きく崩れて渦まいて居る。彼は其の淵
 を見つめて居る。今にも飛びこむのではないか、あゝ危ないと思ふ途端、女は
 風と仰いで月に向つた。一二分も見とれて居たかと思ふと、何憶い出したのか、
 わつと號んで泣出した。蟲の音も一時途絶えたのである。彼は兩手を顔に推當

て、聲ある限り、涙ある限り、泣いて泣いて泣き盡したところで、袂を以て面を
 拭き拭き徐々家路に就たのである。あゝ有難い月のお陰で助かつた。是が月見
 の終であつた。

月は此所ばかりではなく、遍ねく不幸の家を照して居る。涙乾かぬ疎屋には、
 あはれ憂き世の恩人として、心細き病の床には、慈しみ深き乳母の如く、故郷
 を慕ふ配所には、貳心なき舊友の如く、絶望せる牢獄の裡には、天國の救の光
 の如く臨むのである。嗚呼月よ、誰か爾の慈光を仰がぬものがあらうか。

(三十八年九月「中央公論」)

自然兒

南部豊前より太宰府に詣でんとするものは、往く往く深山穹谷の間に失はるゝ
 の思を爲しつゝ、辛ふじて筑前の境に入り、茲に始めて一谿流の、見え隠れに

人に添ひつゝ、數里の山行を安然にして平原に導き出すものに遭ふべし。此の
 谿流を稱ふる大佛川の名は、遍く人の知る所なり。
 大佛川の始めて山を離るゝ際、偏山先づ盡き、偏山は一たび陵夷し、再び川と
 均しき名に呼ばれて隆起し、其山脚の一部として、砲臺の如き一枚巖の壁立し
 たる處に、水は貯へ、多くの淵を包藏したる一の長く大なる淵を成せり。部落
 の民は、其水を方數里の平田に曳くべく、井堰を築きて淵の尾端を括りしかば、
 井堰の下は石壘を漏るゝ雫の、廣く乾ける積の中を、細かなる白蛇の如くして
 流るゝに引き代へ、井堰の上は、水は湖の如くに満ちて、巖に隣る閘門の前に、
 渦を成して徐ろに廻轉せり。處のものは星隈の名を以て此の淵を呼べり。
 井堰の他端、堤に沿ひて下る水を、竹簾を透して曳き、又竹簾を透して落し、
 其間に一軒の水車小屋あつて、尙ほ暫らく川に隨ふ太宰府街道に面へり。その
 車は斷えず異様なる聲を發して轉り居れり。道ゆく人、立留まり、珍らしげに

之を見る時、何處よりか出て來れる、一個の腕魄兒が、行人の前に立はだかつ
 て大手を擴げ『我が車見せぬ』と誇るは、往々にして見る所なりき。
 伊之とは渠が父善吉が、此腕魄兒を呼ぶ名なりき。渠は此水車の争ふものなき
 相續人なりき。渠は子なくして老んとしつる、父母の望を實して生れ、次で生
 るゝものなかりしかば慈愛は渠が一身に鍾られぬ。學齡に於ての渠は、他の村
 童と同じく、一たび學校に上げられしかど、渠は學校を厭ひしかば、父母は渠
 を強ひては遣らず、唯其の帯びし意に隨ひて遊ぶに任せぬ。
 隣なき友なき一軒家に在つて、渠は寂寞を感じざるを得たりし乎。天高く氣澄
 み、日落ちて猶ほ遠村を認むる秋の夕暮、獨り公道に佇立して、遙かに山麓に
 簇がる人家より、立ち騰る烟を見つらん渠は、之に對して懐しとは思はざりし
 乎。臯雨晴れて、點々たる田植笠、路傍の田より山際に連なり、村童等は群を
 成して躍り出て、田植事すとて、終日樂しく遊ぶを見る時、渠は之を見ても羨

まざりし乎。余は然りと答ふる能はず。
 然れども是は唯一時の出来心にして、渠は他に渠が天國を有しき。春回つて雪より天地を恢復し、凡ての世界が眞青に蘇生する時。渠は獨り野路に麥笛を吹き廻り、ゆくゆく雲雀の巢を尋ねて家路を忘れつ。夏は朝より井堰に出て、一たび石間に鰻を釣り初むれば、長さ日の暮るを覺えざりき。人の懼れ遁る、蛇も、渠に在つては甌具の如く、其殻を得れば、手巾の如く額に巻ぬ。其の活きたる一が、叢間に頭を昂げて向つて來る時、渠は尾に由つて之を擧げ、跳梁する其の頭の遂に疲れて垂るゝに至つて、始めて許して放ち遣るなり。既にして秋來れば、蜻蛉を積に狩り、樹より樹に蟬を獵り、叢に虫を訪ふ。
 渠は盡く聲に依つて鳥を識れり。獨り是に止らず、一樣にして異様なる鴉語すらも渠は盡く分ち數へぬ。秋の初風吹き荒ぶ日、渠はいつも家に在らず、渠は屋後の柿の最も搖ける枝に跨り、枝と共に低昂しつゝ、暴ふる風に向つて號ば

へり。是は渠が風と戯るゝ仕方なりき。雪降れば渠は狗兒の如くあくがれ、竹馬を駆つて數百歩の外に出づ。渠が最も遠く父の家を距るは、概して雪の日なりしなり。
 然れども一年の裡最も渠に待たるゝものは夏にして、最も渠を歡迎するものは星隈の淵なりき。三伏の日、毛髪を動かす風だになく、自然は眠り、人は倦むて出てざる時、渠は一碧澄むだる淵を目がけて、宛然母の懷を見て奔る赤兒の如く、嬉々水玉を蹴立て、駆けこみ、水の臍を越ゆる處より鴨の如く水に没し、龍の如くして彼岸の巖に這ひ出るまで、渠は一波にも運動を與へず。
 渠は恰も雪を握り固めたるが如き、一拳の白き小石を有てり。是は渠が嘗て積に於て拾ひ得たるものにして、渠が之を愛すると、千個の銀錢にも優るものなりき。此石を得てより渠が水浴の嗜好又新たなるものとなれり。渠は巖の頭に立ち、之を欲ふ所の淵に投じ、石の水面に落つる時、渠亦既に水中にあり、暫

らく見ゆる所なくして、忽ち又た泡沫の消えし處に顯はる、片手面上の筆を拭きつゝ、片手小石を差しあげつゝ。
 此石と此方便とを以て、渠が探らぬ淵なく、渠が潜らぬ底なかりき。星隈の上半部、怪物の栖めりと傳へ、冬の夜深けて公道をゆくもの、往々風なくして水ひるがへ、翻り立つの音を聞くべく道はれ、獨り涸ぐもの、足を禁せるのみならず、最も水を知り居るべき漁夫すらも、網を容れざる處ありと稱する、その上半部の深淵すらも、渠が爲に開かれて、樂しき遊び處となりぬ。
 村童等が打ち群がり、餓鬼大將を推し立て、亦水浴に出て來る時、唯一人星隈を私有したる伊之を罰すると渠等が無上の娛樂なりき。渠等は淵に渠を取巻く、渠に一濤喫しめんと、勢を合せて四面一齊に泳ぎかゝる。伊之は故意と之を避けず、不動と波の來るを待ち、渠等が巖の如き怒濤を先たて、逼り來るを待つて、忽然として頭を沈め、波をして波を撃たしめ、渠等が思ひかけざる處に浮

きて、撃ち返す波を自から被ぶる渠等を見る。之に激せられて、渠を捉へて淵に引こみ、之に水を喫せしめんとして、反て先づ水を喫したるものありき。
 然れども渠は多數と争はず、渠は其淵を敵に譲り、自己は去つて水の面に其の愛する石を追ひつゝ、湖り、唯一人怪物居るてふ處に入つて、渠自身怪物其物なるかの如く出沒し、敵の相視て魄を冷し、相促して歸りたる後、仰けさまに身を中流に横たへ、蒼く、潤く、深き天上に浮べる一片の白雲を眺めて、双腕徐ろに水を搔きつゝ、波に任せたる小舟の如く、悠々下流の淵に下る。
 自然は渠が幼稚園なりき。渠が寂しき、一軒家にあつて、友をも隣をも要せざりしは是故なりき。渠が爲には、父母の天井すらも甚だ慕はしきものにはあらざりき。渠は食ひ眠る爲にして家にある外は、凡ての時に於て外に看出されぬ。雨は數々渠を戸内に鎖さんとして數々渠を誘ひ出しき、渠は嘗て隠し神に失はれたることすらありきとぞ聞えし。

斯くして渠が九年は過ぎ、尋て来れるは大旱魃の年なりき。
 初に於て、既に阜雨に乏かりき。方數里の水田は、七分通り、辛じて早苗取りしが、插秧過ぎて猶雨に窮すると殆ど月に垂んとし、四望幾萬頃の青田、次第に燻ぼりつゝ初めぬ。猶ほ木陰に懸小屋して水番するもの、水口水口に水曳くもの、心痛しつゝ作回するもの處どころに見えたりしが、灌漑の水路、概して麥魚の腹を顯はして乾死するまで燥き、枯槁は殆ど日影の如く廣がり、色を變へつゝ枯れゆく様、出て見るに忍びすなりしかば、復び野外に出て來るものなく、獨り依然として猶存するものは、絲の如く細りし流れに懸る水番小屋のみ。

四面の山社より打出し、殷々として響を交ふる雨乞の大鼓は、斷えず霹靂の假聲を以て、眞雷を誘ひつゝ、夜を徹し日を徹して鳴り。初めは愉快を以て鳴りしが、漸くにして義務に鳴り。久しくして絶望に鳴れり。然れども聲の嘗て天

に聞えざるかの如く、上より一撃の應ふるなかりき。然れども何にかな望を屬せんと思へる渠等は、毎日高良山の嶺に起つては仆るゝ白雲に對して、空頼と思ひつゝも、猶一日の望を屬しつゝ、朝な夕な同じ失望を繰り反せり。渠等は失望に慣れて笑へり。失望は無爲を生めり、渠等は天を動かす能はざる雨乞を以て止みぬ。一の大鼓先づ黙しぬ、又一また静まりぬ。やがて唯一となりぬ。

伊之が粉挽車は、久く既に運轉を停め、車の轂も輻も川床の底板も、つゞく日に照らされて、龜の甲の如く干割れ初めぬ。此頃回るは、星隈に懸れる水揚車なりき、村人は日毎に、然して交る交る車をば踏轉しつゝ、日毎に深淵の水を汲みあげぬ。嗚呼是は伊之に取つて、如何ばかりの苦痛とするぞ、渠は毎日隱忍しつゝ、併しながら恨しげに渠等が爲る所を見居れり。

廣く深く大なる、數百年來、其神聖なる懷を、嘗つて日光に暴らせし口碑を有たざる星隈の淵も、今や僅に播鉢一杯の水を餘すまでに汲み盡され、汲み盡さ

れたる水は、却つて田の渴きを新たに誘ふに止まり、稻の枯槁やがて回すべからざるに及ばんとせり。人の心愈々悶て、未だ植付けざるの田は、植付けざりしを幸として、植付たるものは、植付けたるを不幸として、打返して粟を蒔くとの、寧ろ賢れる道なるを思ひ初めぬ。然れども渠等は絶望しつゝ、猶希望せり、渠等は粟を蒔かんと言ひつゝ、猶萬一の降雨を覺束なき明日の空に僥倖し居れり。

然れども天は猶一月以前と變ることなく、頑然として人間を乾笑すると初の如し。前週間より立ち籠めたる人家の煙、今や朦朧として全地を罩ひ、山影樹木盡く煙の裡に看出され、神を畏るゝものをして、睨然として天地廢らんかの思あらしむ。もし猶五日雨ふらずんば、全く二個月雨なきなり。天猶五日雨なくば地に革命あらんとす。

此時に當て新たなる雨乞人世界の上に顯はれぬ、その人を誰とかなす、伊之は

即ち其人なりき。渠が雨乞を思ひ立ちしは、飢饉の故にはあらざりき、世が旱魃に滅ぼさるゝも否らざるも、渠が懸念とする所にあらず、渠が雨乞の必要を感じたるは、泳ぐべき淵の殆ど吸み乾されたるに由れり。

然れども如何にして雨乞すべき乎。渠は屢々父の寢物語に於て、渠が生れざりし以前は、歳旱する毎に、村人は龍神に雨を乞ふべく、張子の大蛇を作つて此旱限に沈むるの例なりしとを稔聞し、今は「世が開けたり」とて、此事廢され、其大蛇を今日に見ると能はざるを、平生最も遺憾と思ひたりき。決然として渠は謂へり、吾自ら大蛇を作らんと。其日の夕、村社より退り歸れる父が、其母に語る所を聞くに、渠は曰り。星限は龍神の宮にして、其水は早歳に於ける水の元なり、その水の元をすら畏る所なく汲潤すは、前代未聞の珍事なり。末の世とは今ならし。渠等は猶此非常なる旱魃に對してすらも笑へり、是は猶忍ぶべけども、今の壯き者の輩が、漫り

に勤行の古を舊弊と罵り、今を智慧進みたりと誇つて、雨を祈るに、飲食雑談、神を瀆すとを語つて、些しも憚ることを知らざるは、懼るべき事ならずや。天の雨ふらざるは、人間不信の刑罰なりと、伊之は痛く父の語に撃たれぬ。謂へらく是れ大蛇を作らざるの謂なりと、渠が心は益々決しぬ。

然れども、如何にして大蛇を製るべきか。

村人の作りたりし如き張子の大蛇は渠が手には能くせざりき。渠は父に問はじ、父には好案あるべきを知れり。然れども渠は初より獨自一己を以て雨乞すべき精神なりしかば、拙なくとも己の小さき頭に頼るべく決めぬ。渠がその小さき頭に、最初に浮びしは『繩』と云ふ思想なりき。渠は此目的を以て水車小屋に入つて、白粉を帯びたる繩の斷片を甚だ多く蒐めたるが、渠は倏ち腦中の電光に感じて叫びぬ。『茅萱、茅萱、茅萱から大蛇が出来る』と。

時に日は暮でありき。然れども新事に明日を待たざるは小兒の癖なり。渠は夕

飯を仕舞ふやがて、鎌を把つて家を出て、七月十三日の月を伴れつゝ往きぬ。渠は茅萱の多くある處を知れり。茅萱は日に萎れて自から卷きて收まり、風塵に塗れて灰白色を帯び、荊んとすれば散りかひ曇る程なりき。渠は其荊りためたるものを、兩腕を廻して束ね、之を星隈に抱へゆき、之を水に漬し置き、然して後歸つて寐ねしが、眠るまで明日出来べき大蛇に就て考へぬ。

明くる晨、渠が起き出でたるは、猶ほ月光を地に認むる曉なりき。大蛇の創造は、今茅萱を水より引揚ぐる事を以て着手されたり。萱は一夜水にあつて、清まり、開き、軟らぎたりき。渠は之を屋後の柿の樹蔭に運んで、之をば繩に綯ひはじめぬ。其腕より大なるほどの繩なり。

然れども是は渠に一大事業なりき。日未だ出でず、葉末の露飛んで面を撲つ間は心は鼓せずして躍りき、日は出て、草を蒸し、一種馨ばしき薫の鼻を襲ふ間は、其の薫は獎勵なりき。然れども腕は痛むて肩より抜け去らんとし、掌は血

紅の如く聚り、皮は剥ぎ去らるべくなり、汗流れて眼屢曇る時、渠が力は既に盡き、繩は手を離れて、屢解け、燃屢回りき。然れども渠は疲るれば則ち休めり。渠は自在に芝生に轉がり、木末の蟬の聲を聞くく、いつしか自ら己を忘れ、久うして又新なる力を以て起つなり。

何心なく出て来りし善吉は、其子のする所を見頗ぶる同情を表し、爲に一臂を假さんかと云ひしか、其の殊勝なる獨自一己主義を開き、愈々心も動かしぬ。母は渠を午飯に呼べり。

渠は半日の力を給し来りて、再び事に従ひぬ。事業は下り坂となれり。成就に近づけば近くほど氣益々加はりぬ。且つ奮ひ、且つ歡びつ縋ひゆく程に、茅萱一たび縋ひ盡しぬ。渠は猶ほ見て憚らず感ぜしかば、再び萱を刈り足し来りて、甘心するまで縋ひあげぬ。

渠は手を以て繩を度るに、繩は欲ひしよりも寧ろ長さ程なりき。十分の事業は

九分成れり。渠は満足を以て身を芝生に投し、安樂椅子の動くが如く、代る代る足と首を揚げたり。其運動の止みし時、渠は柿を攀ちつゝありき。

柿は青く空を蔽へども、今年は柿の凶年と見へ、結べる實は僅に數ふるばかりなりき。最も遺憾なりしは其の澁柿なるとなりき。世の小兒に先ちて柿を味ふと能はざるは、渠が爲に大なる損失なりけり。然れども秋風吹き木葉落ち盡したる後、空しき木末に累々垂れたる紅の實は、世に柿の盡きし日に、如何ばかり渠の樂なりしか、渠は如何なる熱心を以て梢を襲ふ鳥と戦ひしか。

此柿は渠が此世界に於いて愛する唯一の果樹なりき。渠は鳥の巢をたにも、其木末に許さざりき。結ぶ實の少なければ少き程、愈々尊と實なりき。然れども雨乞の爲には渠は愛する樹をすら愛まざりき。渠は其の最も繁れる枝の一より多くを伐り下し、其葉を摘み取つて、頭より尾まで繩の背に挿み、然る後二又枝の各々一顆の實を持つと、恰も二の巨眼の並べる如きを得て頭に加へぬ。

是に於て長さ一丈有餘の大蛇全く成るを告げぬ。

『大蛇が出来た！』渠はソクソク魂動き、家に駈けこみ、父と呼び、母と呼び、午睡したる父を驚かし、軒の日蔭に洗濯し居る母を捕へて躍り、『来て見よ』の外は語なかりき。おとく(母の名)は往きて柿の根に蟠まる青大将を見、色を變へ、聲を放ちて却き奔り、子に笑はれて心づき、僅に再び近き見たり。足の戦きは猶ほ止まざりき。善吉が感激は非常なりき。渠は其思ひ付はさて置き、十歳の子の赤誠を其大蛇に於て認めぬ。渠は伊之に龍神の必ず享くべく、天の必ず雨ふるべきことを豫言するまでに撼かされぬ。渠は信心ふかき幼子を懐抱して、涕の落つるを覺えざりき。伊之も亦涕くみぬ。

母は猶ほ離れて立ち、此の恐ろしき物を以て何をせんとするかを問ひ、答へられし時、今更空畏ろしく思ひぬ。

伊之は仰いて天日を見たるに、日は柿を離ると僅かに寸餘なりき。渠は即時に

雨乞に取かゝれり。渠は用意したる青竹を以て大蛇の頷を支柱し、其頭を高く頭上に差しあげ、胴より以下を地に這はしめぬ。渠は今出て立ちぬ。大蛇は活きて、ぞろりと動き出だしぬ。父母は立つて目送せり。渠は往くく星隈に向ひ、往いて竹籤に引こみたる時、不思議にも、今まで一葉をも翻へざりし空氣は、颯然として一林を震撼し、大蛇全身の鱗悉く逆立しぬ、流石造主なる伊之も、竦然として身の毛立ちぬ。

星隈の水、大方は汲みあげられしかども、由来最も人を脅かしたる上流の淵には、猶ほ大なる甕を埋めたるが如き一の溜の存するあつて、猶ほ底を見せざる程の水を貯へたりき。伊之は今其淵を下臨する至と高き巖の額に、雨乞の犠牲を引きあげぬ。渠はその額より青竹を取り放ち、それを七重八重に蟠らしめぬ。渠は今之を懐持して以て淵に投せんとして、倏ち之を愛しむの意を生したり。渠は心に謂へらく其の丹心の成せる業を一擲して萬一雨ふらざる時は如何、

さらば之を投することを廢めんか、兩乞の志を廢するを奈せん。絶望は渠を坐らしめたり。渠は淵に嚮つて跪づき、掌と掌を合せ、口の内に何事かを唱へて拜み、身激動し眼涙の迷るに至りぬ。渠は雨乞の贅を懐きあげぬ。此日七月十四日は、其年に於て、空前絶後と稱する炎天なりき。日輪は今天心を離れたるばかりにして、赫々たる光は、稍傾けりと雖、人の頭を照り割らばかりの熱氣は些とも減ぜざりき。其の青く輝ける周圍の空には、一片の雲だにも容るさず、雲は遙かに高良山の巔にあつて、例の遊戯を繰り返せるのみ。霹靂の消息はゴロとも聞えず。昨日まで打ち残されし唯だ一つの社鼓も今日は響かず、響き竹林を驚かしたる風も、今は疑はるゝまでに藏まり、一蟬鳴て山更に静かなる、此の夏日の深き沈黙の裡に、大蛇は驀然淵を破つて投げこまれぬ。

淵は一時眞白なりき。泡の全く失せたる時、淵は搖ぎ而して搖ぎ、大蛇は波と

低昂せり。波は搖ぎ而して搖ぎ、大蛇は且つ昂り且つ沈みつ。大蛇の全く沈みし時、淵も漸く静まりつゝ、遂に全く静まり果てぬ。然れども巖の頭に取つて瞰下し居る伊之は猶ほ、淵翻つて、奔騰し居る大蛇を見き。

渠は今起あがらんとして、背後の山より吹き下す一陣の怪風を感じぬ、覺えず頭を擧げて見れば、大佛山の顛、拳の如きものを加ふ、諦見すれば雲なりき。雲は刻々持ち上り、拳より拳を分ち、雲より雲出て、見る間に峰を抜くと尺餘、渠は瞿然として懼れ、胸は音のするまで鼓動し、然して新に心の丹底より湧き出づる喜悅は、渠をして雀の如く躍り立たしむ、渠は今時々轆轤の轉るが如き響を以て膨脹する雲を見あげて、其の廣がりて天日を啣み、明るき對ふの小山を残して、地は日蝕の如く暗く、驟雨將に至らんとして、風大佛山の巖紐を振ふまで看とゞけたりき。

渠は驟雨を家に待たんと、父母の天井に向ひて飛びしが、其の竹藪を出づるや

否、豆粒の如き最初の一滴、早くも渠が額を打ちぬ。
 善吉が豫言は違はざりき。伊之が乞ひし雨は降り出しぬ。恰も簾を懸けしが如く、十歩の外を辨せざるまでに降りぬ。爛たる電火は、定時に晦冥なる地に閃めき、一層の晦冥に世界を遺し、一雷一雷雲を破りて墮ち來る響は、痛快極まつて人を憎殺し、善吉もおとくも蚊帳の内に耳を掩ひて縮みあがれるに引かへ、伊之は雨を得たる喜に鼓舞せられて、芋の葉を笠に戴き、電火の下に隠見しつゝ、獨り外を駆けめぐれり。

閃電、霹靂、久らして共に止みぬ。然れども雨は猶ほ止まざりき。草も樹も色を回し、社鼓の聲四もに起り、伊之は疲れて家に僵れぬ、然れども雨は猶ほ未だ止まず、軒より山まで皆雨なりき。日は遂に雨に暮れ、夜に入つて夜も雨に深けぬ。然れども雨は猶ほ止むべくもなかりき。

伊之は夕飯了りやがて寝たり。此二日の疲羸は、渠をして曉より深く睡らしめ

たり。渠は夕より曉まで、一息に徹して寝たり。渠は端なく目を覺ませしに、星隈の井堰を越ゆる水の音、簾々として渠を呼べり、渠は宛然喇叭の聲聞きつけたる兵士の如く、父の懷より飛び起きて戸を駆け出せば、恰も昨日の夜明けの如く、微光を殘せる落月の下に、さら／＼として水車は廻れり。

渠は之れには目も觸れで、疾風の如く星隈に奔りぬ。夜はからりと明け離れたり、雲は盡く高良山の巔に退て堆積し、空は新たに拭かれて未だ乾きあへぬもの、如く新に、雨の名殘は點々として樹木の葉末に滴たり、朝風來つて吹き散すを待てり。

善吉は久しぶりに清々しき心地を以て起き出たり。渠は一新したる天地を愛でつゝ、水聲を星隈に追ひしに、大佛川は、雨時に於ける常習の如く、四山の溪澗を一時に合せて、遽かに水満ち、濁流滔々として濁浪を揚げ、井堰を超えて墮つる水、恰も數十の白馬の競ひ奔るが如く、篁の竹、半は肩まで水を被り、

且つ拂はれ且つ返りつゝ頭を揺れり。

渠は非常の満足を以て踵を回し、徒らに轉る水車の水を暖き落し、艸樹の滴を吹き散ずる朝風を浴び、露けく立ち昇る家の煙を眺めつゝ歸り來つる時、ゆくりなくも伊之を尋ねる妻に逢ひぬ。渠は始めて伊之の在らざるに心づきぬ。然れども渠は伊之は平生の如く、何處にか外に在るべきを疑はざりしかば、食時には必ず歸り來べしと答へて、諸ともに安堵したりき。然れども食時過ぐれど、伊之は猶ほ歸り來ざりしかば、善吉は茲に始て胸を打たれぬ。渠等は家を廻つて呼び歩きぬ。然れども伊之は何處からも答へざりき。渠等は一人子の影を追ひつゝ、渠が鳥の巢を尋ねし樹間に、虫を訪ひつる叢に、遍ねく渠が足跡を跡つけたるも、終に渠をば看出さざりき。渠等は嘗て一たび隠し神に失はれたりし渠は、今や終に失はれ了りたらむと想ひぬ。

ね、里人も亦手を分ちて伊之の搜索に従ひ、二日徒らに搜索したる後、三日目の朝、おとくは水退きたる井堰に於て、其愛するものが、生命に亞て愛したりし小石を、大なる石と石との間に看出せしなり。

世は渠を水に誘はれたりといへり、然れとも予の目には甚だ異なるものあるなり、彼豈に自然の懐に返りたるに非ざるか。

(二十九年五月「國民新聞」)

湖 處 子 文 集 終

明治三十九年二月五日印刷
明治三十九年二月十日發行

湖處子文集與付
定價金三十五錢

鹿鳴
著作
所有
社

著者 宮崎湖處子

發行者 倉田清
東京市青山千駄ヶ谷四百七十番地

印刷者 佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發賣元

東京市青山千駄ヶ谷四百七十番地

鹿鳴社

特約大賣所

東京市神田區裏神保町	上田屋
全 表神保町	東京堂
全 下谷區徒町二丁目	得策堂
全 麻布區飯倉四丁目	益世堂
全 日本橋區吳服町	北隆館
全 京橋區尾張町	東海堂
名古屋市本町三丁目	川瀨代助
大坂市東區南本町	杉本書店
全 東區備後町	吉岡寶文館
久留米市米屋町	菊竹金文堂

時文叢書

每月一回發行▲洋裝美本一冊▲定價金三十五錢▲六冊前金二圓十二冊前金三圓八十錢▲郵稅一冊六錢

時文叢書は當代文藝の名家に美文、評論の其他散文を網羅せんとするものにして以て時代思潮を鼓吹すべく作文の好參考書たるべし

第一卷 湖處子文集

宮崎湖處子君著

第二卷 天火人火

高田口梅汀君序
藤島愛泉君著
三月十日發行

萬朝記者田口掬打君序 平福百穩君畫

好評再版

萬朝懸賞短篇小說傑作集

口繪泰西名畫
體裁優麗美本
定價四十五錢
郵稅金六錢

萬朝報の短篇小説は極めて正直に描寫せる各社會のスケッチなりあらゆる階級の聲ある小品畫なり其短篇中の傑作を集めたるもの即ち此書なり苟も文藝に志ある青年子女諸君は其必要の爲に其興味の爲に必ず一本を座右に欠くべからざるなり

角戀坊撰

家庭川柳

洋裝頗美本
定價金十二錢
郵稅四錢

俳句よりも尤も俗耳に入り易きは川柳なり此書は古來の名古中より家庭に關するもの數百句を撰しこれに尤も分り易き評釋を加へたるものなり

倉田櫻芳君著

口繪原色版クロス上製最美本

好評再版

家庭小説の妻

定價金六十五錢
郵稅八錢

人はいかにすれば尤も幸福の生涯を送り得へさか又いかにすれば真正なる愛情を持続するを得へさか本書は此二個の大問題を解決せんとして作れるものにして尤も精純なる家庭小説なり

倉田櫻芳君著

谷洗馬君畫 口繪十數度刷石版

最新刊

小畫家

クロス上製最美本
定價金六十五錢
郵稅金八錢

凄艶にして而も壯絶、快絶、氏が深刻健全の想精緻健全の筆相俟つて一聯の珠玉燦として眼を射るが如きものあらん

家庭之友主筆 羽仁もと子著

主婦必讀

如何に家計を整理すべし乎

洋装頗美本
定價金參拾五錢
郵稅六錢

一收入に比して**家計の膨脹**に苦しむ人は此書をお読みなさい

一**僅少なる収入**に依て**家人の幸福**を計り得べきかと苦慮する人は此書をお読みなさい

一家計相應の餘裕云ひ換へれば**貯金**を造らんとする人は此書をお読みなさい

一家計の大小に拘らず奢侈に流れず鄙吝に陥らず最も**圓滿なる生活**を営まんとする人は此書をお読みなさい

一此書を熟讀すれば**何人**も必ず**一家の財政**を巧みに整理する事が出来ます

トルストイ伯著 柴田流星君譯 トルストイ伯最近肖像挿入

小説アンナ、カレンナ 近刊

「アンナカレンナ」一篇人も知るトルストイ翁が累世の大傑作にして世界文學の好産物なり先に文豪尾崎紅葉氏がこれが翻譯に着手されしも不幸中途にして物故せらるる以來本篇の紹介は殆んど中絶の姿なりしが譯者深くこれを遺憾とし茲に前後四ヶ年の大苦心を以て本書成るトルストイ翁が尋常ならざる觀察の微妙と復たなき忠實もて描き出されたる篇中の人物と事件とは讀者をして如何なる感興を惹起せしむるか世の片々たる戀愛小説に飽ける我讀書界は必ず此一大雄篇を歓迎するに吝ならざるべきを信じて疑はざるなり

二六新聞記者山本柳葉君著

袖屏風近刊

著者曰く「我の云ふ處は錘的觀察なり全局に渉るの力なきも三分五分一寸何程かなりとも穿たんことを冀へり」と所謂錘的觀察とは何ぞ乞ふ發賣の日を待

て
依田百川先生、加藤咄堂先生序小川南堂君著

空前成功新論近刊

世の不遇に泣く人、薄命に泣く人、及び成功の關門に達しの名養の月桂冠を戴かんとする人は早く來りの本書を讀め、本書は丁寧に遺憾なく其成功の方法を授けん

221

